



0022403-000

332.24-H141r

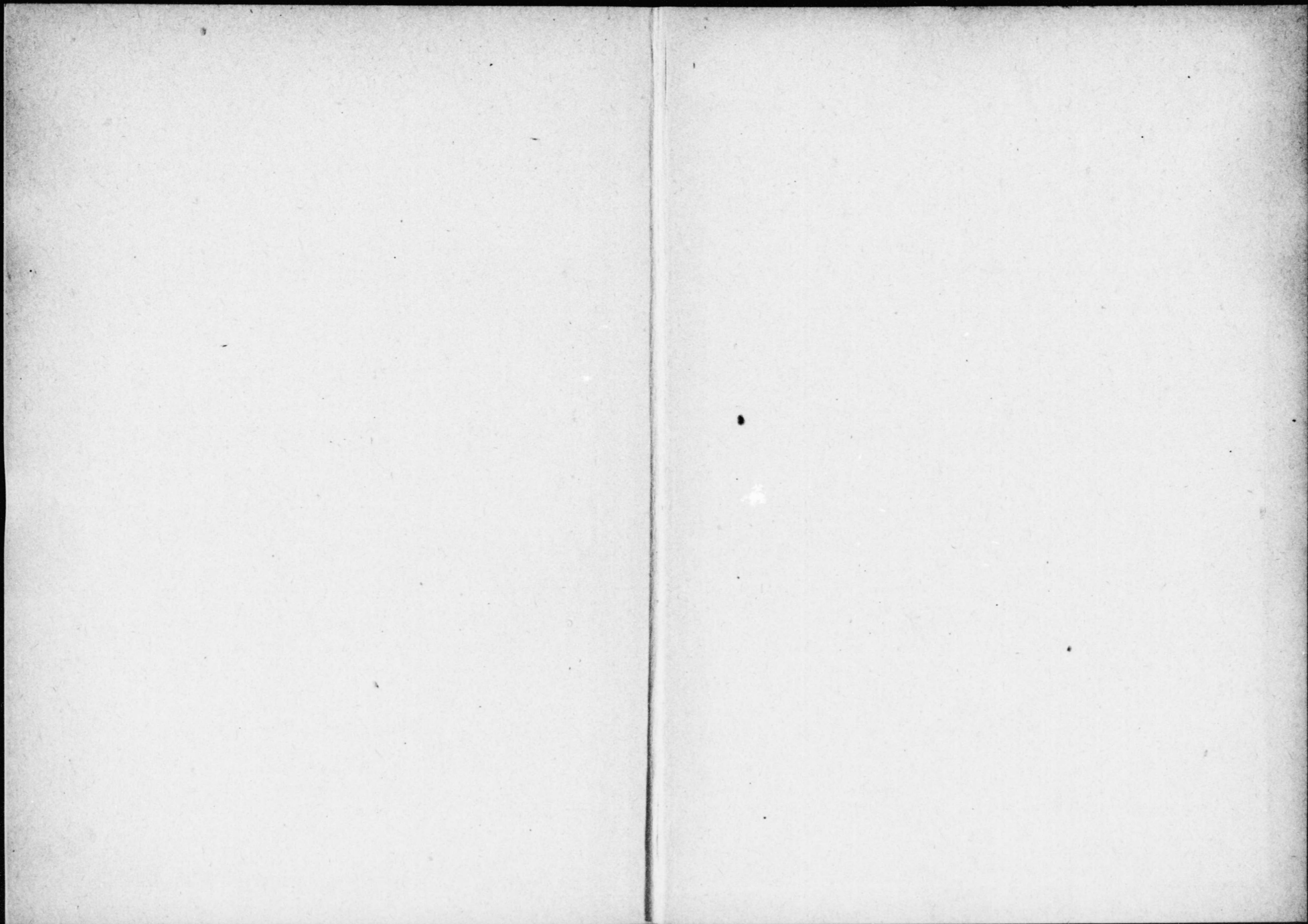
蘭印の資本と民族経済

浜田恒一・著

ダイヤモンド社

1941

ADC



蘭印の本資と民族經濟

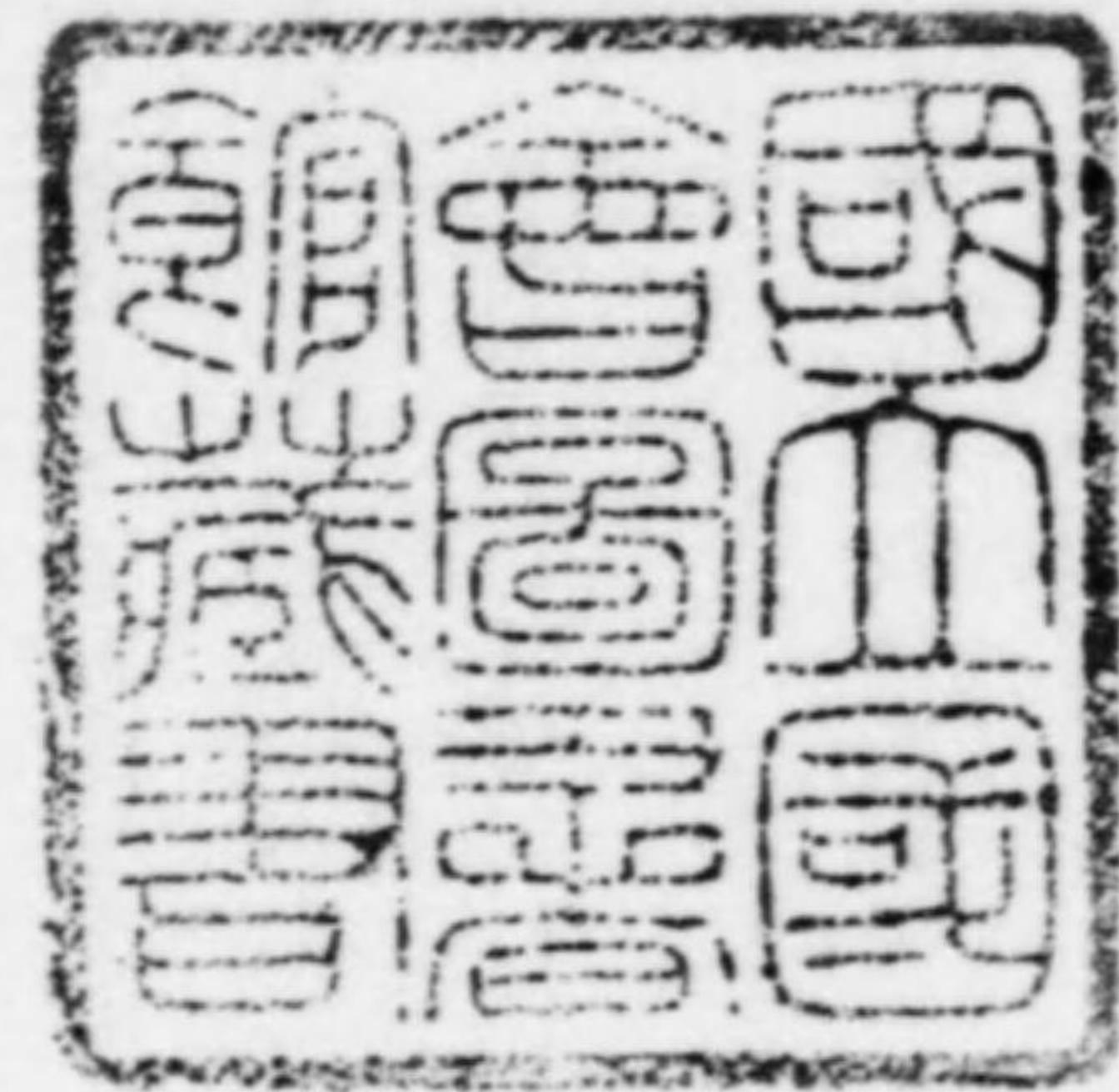
財團法人南洋協會調查課長

濱田恒一



ダモイモンス社刊

332.24
H141r



33581

序

蘭領印度は農業國である。然るに近年その農業は行塞りの様相を露呈し、他面に工業の發達は各種の條件が熟しつゝあるに拘らず、貧困と植民地性との爲めに阻碍され、かゝる意味で蘭印經濟は根本的變革の期に臨んでゐる。この事は日本の對蘭印政策に至大の重要性を持つものと思はれる。之に鑑み本書は蘭印經濟の基礎的事情と動向とを敘して蘭印經濟に於ける問題の所在を明にせんとしたのである。最近蘭印に關して幾つかの書が公にされてゐるが、南洋問題の重要性に顧み、まだ／＼多數の書が公刊されていゝ筈である。その意味でこの小著も多少の存在理由はあらうかと思ふ。

本書の執筆に際しては、財團法人南洋協會の資料を利用し、亦、職員諸氏の御世話になる事が大であつた。特に岡本暁氏には全文を校閲して戴いた。記して深謝の意を表する次第である。

又、出版に當つては慶應義塾出身文筆人より成る廿日會から多大の御援助を賜つた。之亦、感謝に堪えない次第である。

昭和十六年六月

著者

序

蘭印の資本と民族經濟 目次

はしがき 三

第一章 人・土地・政治

第一節 土地と人 九

第二節 政治 三

第二章 蘭印と國際資本

第一節 南洋に於ける國際資本 一七

第一項 國際資本の進出 一八

第二項 英國資本 一九

第三項 佛蘭西資本 二〇

目次

第四項 米國及支那資本 三
 第五項 日本資本 四

第二節 蘭印之國際資本 五

第一項 產業資本 五
 第二項 金融資本 三

第三節 資本ルートの發展 三

第一項 資本主義前奏曲 三
 第二項 栽培業の資本主義化 四
 第三項 鑛業の資本主義化 四
 第四項 工業の資本主義化 四

第三章 商人資本の侵入

第一節 東印度會社の設立 四

第二節 原始蓄積 四

第四章 農業現勢と農業資本

第一節 現勢 五

第一項 土地制度 五

第二項 土人農業 五

(イ) 米 五

(ロ) 玉蜀黍とカツサバ 六

(ハ) 薯と豆 六

(ニ) 煙草 六

(ホ) 椰子 六

(ヘ) 胡椒其他 六

第三項 農園農業 七

(イ) 總説 七

(一) 投資其他 七

(二) 生産及輸出 八

(口) 砂 糖…………… 八六

(ハ) ゴ ム…………… 九二

(ニ) 煙 草…………… 九九

(ホ) 茶 …………… 一〇一

(ヘ) キ ナ…………… 一〇三

第四項 人口過剰と灌漑施設…………… 一〇六

第二節 資本ルーツとしての農業…………… 一一三

第五章 鑛業の發展と鑛業資本

第一節 鑛業資本…………… 一二九

第二節 各種鑛産物…………… 一四一

第一項 石 油…………… 一四一

第二項 石 炭…………… 一四六

第三項 鐵…………… 一五三

第四項 錫…………… 一五九

第五項 ボーキサイト、其他…………… 一六四

第三節 鑛業政策…………… 一七〇

第六章 産業革命は進む

第一節 工業の動向と問題…………… 一七三

第二節 現 勢…………… 一七五

第一項 中・小工業…………… 一七五

第二項 大 工 業…………… 一八三

第七章 貿易及國際收支

第一節 出超も空し…………… 一八〇

第一項 巨額の貿易外支拂…………… 一八〇

第二項 輸出貿易…………… 二一一

第三項 輸入貿易と蘭印工業化問題……………三二四

第四項 各國の地位其他……………三二六

第二節 和蘭の収益……………三二九

第一項 和蘭の役割……………三二九

第二項 蘭印への投資……………三三〇

第三項 蘭印の役割……………三三三

第四項 和蘭の収益……………三三九

第八章 社會及民族問題

第一節 社會問題とその對策……………三三一

第一項 農業移民……………三三一

第二項 庶民金融機關……………三三六

第二節 インドネシヤ民族運動……………三三九

第一項 南洋民族運動の性格……………三四一

第二項 インドネシヤ民族運動……………三四四

(イ) 二、三の基本的事情……………三四四

(ロ) 運動の發展……………三四五

(一) 先驅者カルテイニー……………三四五

(二) 第一次大戰まで……………三四六

(三) 戦後に於ける發展……………三四六

(四) 民族主義運動……………三四六

(五) 歐洲大戰と民族運動……………三四六

蘭印の資本と民族經濟

はしがき

日本は國が狭いのに人口は多い。而もこの人口は年々急速に増加してゐる。如何にして之を捌いたらいゝだらうか？これがこゝ三四年前の海外發展論の根據であつた。然るに滿洲、北支が親善關係に入つたので、當面の人口の捌口が見出されたばかりでなく、生産擴充其他の進行と共に、人口問題の性質は一變し「生めよ殖えよ」となつて來た。この百八十度の轉廻で人口過剰は海外發展論の根據たり得なくなり、代つて「資源」が擡頭し、現在では殆んど之が唯一の論據となつてゐる。之には米國の態度も與つて大である。石油や屑鐵を賣らないと云はれては、吾々は他に之を求めざるを得ない。こゝに南洋が浮び上つて來た譯だが、最初は焦點がハツキリしなかつた。それが有田ハルの聲明戦でビタリと蘭印に集中されたと思つたら佛印進駐でそちらへ向いた。こんどは泰、佛印問題でタイが入り新嘉坡は前々からである。不思議と比律賓が問題となつてゐないが、これも太平洋戦の問題と共に遠からずフット・ライトを浴びるであらう。かうして或は政治的に、或は軍事的に考へれば南洋の何處が重點と定め兼ねるが、經濟的に見れば文句なく蘭印である。これは單に日本の見地からばかりではない。

事新しく列強争覇戦の原理を持出すまでもなく、高度資本主義世界経済に永遠の「平和」などあり得ない事は事實が證明してゐる。今次の戦亂は「持たざる國」が「持てる國へ」の資源再分割戦だといふ人がゐる。成程、さうも云へるかも知れないが、併し、假りにこれが獨逸側の勝利に歸して、植民地等の再分割が行れたとしても、更に再々分割への要求が生れることは必至だ。資本主義國家は停滯的ではあり得ないのだから。

この場合蘭領印度は實に列國争覇の對象たるに適切な條件を具へてゐる。第一に本國和蘭が武力的に弱いことだ。個々の和蘭人は強いかも知れないが、國としての武力の程度は、現に吾々が見た通りである。「蘭印の危機」は何よりもこの點に胚胎する。第二には蘭印の位置である。比律賓に隣り印度洋に面し、印度と濠洲の中間に位する。領有者が和蘭だから無事であつたが、若し獨逸などであつたら、蘭印問題は少くとも七年前に起つて居り、その性質も正反對で、どうして蘭印を「保護」するのではなく、逆に之を抑へるにはどうしたらいかゞ問題となつてゐたであらう。第三が經濟的價値だ。流行的に表現すれば「資源」だが、近頃は資源なる語を亂用し、人的資源といふ言葉さへもある。人間が用ゐるからこそ物が「資源」となるのだから、人的資源などいふのは悲しむべき言葉の亂用である。第一人間まで資源の中に入ると、一億の人口を有する日本など甚だ資源に恵れたことになつて、物が話しづらくなるから、これは除外したい。加之、農産物や畜産物も資源と云ひたくない。資源と云へば、各種の礦物や水産物や、或は發電用に用ゐるべき河川の如く、人力で作られたものでないものを言ひたい。蘭印には錫がある。ボーキサイトがある。石炭もある。鐵もある。これ等は明に「資源」だが、その外、ゴム、規那等を産

する。これ等は「原料」ではあるが資源と云ふ可きでない。ゴムの如きも自然林の産物ではない。だから私はリザと蘭印の資源と云はないで、經濟的價値といふのだが、これが蘭印危機の第三因だ。要するに、非常に大切な場所に、結構なものが澤山あつて、持主が弱いとすれば狙はれるのが當然であらう。この基本的事實は今次大戦が何れの勝利に終つても變る筈はない。さうとすれば蘭印問題の將來は吾々にとつて、いよいよ眞剣なものとならざるを得ず、従つて國民の向心の昂揚は當然である。

併し近頃までの南洋行進曲にはジャズの輕薄さが感じられた。南洋に關する一應の知識もなく、ましてや準備など眼中に置かず、たゞたゞ南へ南へと叫んだ。まるで盲目の燕だ。併しそれでは問題は解決しない。苟くも南洋問題を口にする限り、その經濟に就いて多少の理解を有してゐなければならぬ筈である。かゝる自明の事を強調する所以のものは、今日でも、尙「議論は無用だ」と稱して研究を輕視する風が跡を絶たないからである。併し、研究と云ひ理解と云つても種々あらうが、いづれにしても多少統一あるものでなければならぬ。それには蘭印經濟の發展を「植民地的地域に於ける資本の運動」として見るのが一番端的だと思ふ。

然るにこゝ三四年「金の經濟」と「物の經濟」といふ言葉が生れて、時代は「金の經濟」を離れて「物の經濟」に入つたとさへ言はれる。特に「物動計劃」が強調されたりフランクの廣域經濟論が現れたりして、この傾向は一段と激しくなつてゐる。「配給券」の種類が殖える毎に、國民は益々「物」を痛感する。かうした物資不足が戦争、軍備、國際關係を契機として惹起されたことは無論であるが、他の一面に於て、生産にしる配給にしる依然として營

利を原則として行はれて居り、従つて利益が薄ければ生産をしないといふ事情にあることを看過してはならない。營利主義排撃の聲は高いが、多くは國民道徳の立場からか、若しくは儲けようにも儲けられないところから發した自棄的な叫びで、實績はまことに怪しい。全國の株式會社の配當額だけを合計しても利潤高は餘程巨大なものであらう。この様な「物の經濟」などは有り得ない。矢張り今は「金の經濟」である。たゞ現在では物が無い爲めに、物の一面がハデになつてゐるだけだ。フンク經濟相の御高説もつまりはドイツに金が無いからのことである。

併し今の世を漠然「金の經濟」と呼ぶことは、非常な誤解を招き易い。何故ならば金は要するに鑛物の一種にすぎないのだから、如何に山吹色に光つてゐるからとて、それだけで魔の力を持てる筈はない。之を持たせたものは資本主義制度である。金だけではない。米にしても炭にしても、今日の日本の米、日本の炭は盡く日本資本主義の現状と不可分に結びついてゐる。この事をもう少し廣く云へば、一國の生産はその國の經濟一般の發展度合と不可分に結合してゐる。所謂「蘭印の資源」にしても、之を利用し得てこそ資源だが、どこまで利用出来るかは先づ何より蘭印經濟の現状如何に懸ると共に、更に之を開發する國家の經濟力にも依るのである。

ところでこんな蘭印問題とは縁遠いことを何故長々と述べ立てたかと云へば、餘りに素朴な「物の經濟」論が、獨り蘭印に限らず、凡そ南洋論の中に幅を利かせてゐるからである。

滿洲事變の前後から「資源」への希求は漸次に擴大して、こゝも一に資源、二に資源で、却つて一脈のうそ寒さを感じさせる程にその聲は熾である。武士は喰はねど高楊子の氣持も少しはあつても良ささうにさへ感じる。

タツキリ金山の時など、私はつくづくものゝあはれが身にしみたのである。併し、タツキリ話はいはゞ感傷だからどうでもいゝが、滿洲から北支、北支から中支南支と帝國の勢力が擴がる毎に、いつも「無盡藏な資源」だとか、「天然の寶庫」だとかいふ形容に出會はないことはない。海南島でさへ「寶の島」となつて了つた。隨分寶が出来た譯なのだが、物資不足は益々激しい。例へば石炭にしても北支や滿洲にはいくらでもある様な話であつた。事實あるに違ひない。それなのに樺太の封鎖炭田を開くといふ。封鎖炭田といへば山内一豊の奥さんの「虎の子」と同じものだ。凡そ分らんと云つてこれ位分らん話もないが、要するに地の中に鐵や石炭があつても、それだけで資源があることにならない。利用出来なければ無意味である。それにも拘らず、又もや同じ様に素朴な「寶庫論」が南洋に向けられ、之に基いて勇壯活潑なる「南洋行進曲」が奏でられてゐる。對南問題はラジオ體操ではないから勇ましい軍歌の伴奏だけではどうにもならない。もつと緻密な考慮が必要である。偶々あつても、或鑛山から製鐵所までの距離はいくらであるかといふ様な經營技術の方面が問題とされるに過ぎない。併し先刻から述べてゐる通り、一定の物質的存在をどこまで「資源」となし得るかを根本的に決定するものは、經濟の基礎構造である。更にこの基礎構造を決定するものが何かの問題は姑く措くとして、社會の富の量と質とは、その社會の經濟機構の許す限度を越え得ない。だから蘭印の「資源」にしても、その經濟機構に制約されざるを得ない。かうした見地から、蘭印經濟の姿をボンヤリと乍らも寫してみようと試みたのが本書である。

第一章 人・土地・政治

第一節 土地と人

印度から遠く濠洲のほとりまで延びてゐる一連の島々、これが「エメラルドの帯」と呼ばれるインドネシア群島である。蘭領印度はその大部分を占め、大スンダ群島、小スンダ群島、モルツケン群島、ニウギニア及屬島の四群島から成り、ムルタトウリイは之をインスリンダと名付けた。一百平方糎以上の島が三百五十程あり、全面積は百九十萬四千三百平方全糎、日本の二・八倍あり、地球上最大の島嶼群である。人口は七千五十萬。海南島とはチト譯が違ふ。蘭印問題即時解決論者などこの點を省みられたい。島々は明かに南北の二列に分れてゐる。北のグループはボルネオ、セレベス、モルツケン、ニウギニア、南のグループはスマトラ、爪哇、チモルで、ジャバ海及バングラ海が之を隔てゝゐる。全體としては東經九五度から一四一度、北緯六度から南緯一度の間に在る純粹な熱帯

國である。

緯度からみれば大凡北緯六度から南緯十一度に及び正真正銘の熱帯だから暑いことは勿論だが、電線にとまつた雀が焼鳥になるといふお嘶が暗示する程のことではない。殊に大陸でない爲めに非常に緩和されて、首府バタヴィア最高で三十五六度である。東京でも昨夏は三十五度近くまでなつてゐる。但し一年を通じて暑い。夏と冬の差が二度位である。年中、白服で間に合ふ。今は南支戦線に出てゐる友人だが、ボルネオに永く住んでゐて、年の暮に歸つて来たが、何と神戸の波止場に降りたつた彼は、師走だといふのに純白な夏服にヘルメット姿だつた。大急ぎで宿屋のドテラに着換へて洋服屋を呼び、出来上りまで三日の間、江戸つ子の彼は、やけつく様な都への憧れを抱いたまゝ宿屋の一室で悶々の日を送つたのである。

映畫のお蔭で南洋と云へばスグにスコールを想ふ。正にその通りであるが、年中スコールが来るのではない。インドネシアは一般に季節風の影響を受けて雨期と乾期に分れるが、スコールは雨期のもので、バタヴィアで云へば十二・一・二の三ヶ月が雨期、七・八・九が乾期である。雨期と云つても平均日照率五二%だから梅雨の様にジトジト降りはない。總てスコールである。テニスをしてゐる時にスコールが来る。しばらく憩んでゐるとカラリと霽れてチキ地面が乾くので、またプレイが出来る。併し何と云つても雨期は湿度が高いから身體にはこたえる。無風帯に屬するから航空は至極安全である。

人口は一九三〇年の國勢調査で六千餘萬中、土人は五千九百萬で九八%を占め、その中、爪哇族が二千七百萬で

土人全體の六六%、之にスンダ族とマドラ族を加へると土人々口の九七%強に達する。別に支那人が百二十萬、歐洲人(大部分が和蘭人)が二十餘萬、東洋外國人が十一萬餘となつてゐる。丁度、昨年が國勢調査の年に當つてゐたが、勿論この騒ぎで中止となつたから、現在人口は推定人口であるが、蘭印中央統計局の發表によると一九四〇年の總數七〇、四七六千人、その中、爪哇及マドラ四八、四一六千人外領二二、〇六〇千人となつてゐる。密度及地域別數字(一九三〇年)左の如くである。

	面積	人口	人口密度
爪哇及マドラ	一三三、一七一 <small>平方千米</small>	四一、七二八、三六四	三一五・六
スマトラ	四七三、六〇五・九	八、二五四、八四三	一七・五
ボルネオ	五三九、四六〇・〇	二、一六八、六六一	四・〇
大東州	七五九、一〇六・七	八、五八五、三六五	一一・三
(セレスその他)	一、九〇四、三四五・七	六〇、七二七、二二三	三一・九
計		六〇、七二七、二二三	三一・九

(一九三〇年 Indisch Verslag)

この表で見られる通り、爪哇及マドラ(マドラは爪哇の北岸にある小島)と他の島々とは人口密度に大差があり、従つて政治・文化・經濟等の發達程度も爪哇及マドラと他とは非常な隔りがある。そこで爪哇及マドラを除いた全地域を特に「外領」又は「外州」と呼んでゐる。蘭印を論ずる場合、この區別は非常に重要である。

第二節 政治

和蘭に依る東印度の統治は和蘭東印度會社に始る。東印度會社は表面は一個の商事會社であつたが、實際は和蘭政府の代理人として植民地行政の任に當つた。而も和蘭本國の議會は植民地行政に對し何等の權限を有せず、且つ當時の議會なるものは今日のそれとは異り、會合も二年に一度ぐらいのものであつたから、植民地行政は全く國王の手中に置かれてあつた。然るに千八百四十八年の憲法に依つて、植民地に關する重要な法規は和蘭議會の承認を受けねばならぬこととなつた。更に植民地豫算も亦同じく議會の協賛を要することに改め、以て植民地行政に關する政府の權限を抑制せるのみならず、千八百五十四年には東印度條例を發布して、東印度行政機構を整備したのである。

今日の蘭領印度の行政は總督及その下にある各省長官によつて行はれる。總督は和蘭國王の任命にかゝり、蘭印の憲法とも云ふ可き蘭領印度統治法並びに國王の指令に従つて政治する。總督の權限は頗る廣汎で立法、司法、行政及び兵馬の權をも掌握する。現在の如く戒嚴令を施してゐる際には特に權限は強大である。總督の最高諮問機關として蘭領印度評議院があり、國王の任命する副議長一名、議員四名乃至六名より成り、議長は總督自身である。議員は全部和蘭人である。一定の事項に關する限り諮問を受ける權限及び總督に提案する權限を有するが、一部の

事項を除き、決定權は總督にある。

別に國民參議會なるものがある。六十名の議員があつて外見は議會の如く見えるが、實は何等の權限を有しない機關である。それは議員の構成を見てもわかる。議員六十名中、總督の任命する者二十二名、選出議員三十八名であるが、人種別の割當があつて少くとも二十五名は和蘭人と定つてゐる。東洋人の外國人が最高五名、残る三十人が土人議員である。別に國王任命の議長議員が一名ゐる。依つて土人が過半數を獲得するには和蘭人なり又は東洋人の外國人なりを味方にしなければならぬが、土人議員自身も三十名中、十名は總督の任命に依るのであるから事實上政府に反對して過半數は得られない仕組である。國民參議會の有する重要な權限としては總督令の制定に參與する權、一般行政法及豫算の先議權等であるが、之等もいはゞ形式だけの事である。豫算の先議權にしても、單なる先議權で、最終の決定權は和蘭本國の議會が握つてゐる。だからどんな豫算案を參議會が通しても、本國議會が否決すればそれまでのことで、總督に文句を付けてみても「本國議會」の行動だから仕方が無いことになる。總督令の制定にしても、成程、參議會の同意が無ければ總督令としては成立しないが、その場合、國王の命による一般行政法として制定されればそれまでである。とは云ふものゝ土人議員は議場で文句だけは云へるし、政府のいやがる案を提出することも出来るから、デモンストレーションの政治的效果はある。それも本國の力が強い場合は仕方ないが、現在の如き情勢下では決して無効ではない。

次に地方制度に就いて一言すると、元來東印度會社そのものは商事會社たる本質から最初の目的を貿易に置き、

貿易獨占及商業據點以外には領土的野心なしといふ譯であつたが、輸出生産物確保の爲めに、漸次に内部行政に容喙するに至つた。併し、一般的には土着人の統治は土着人を以て當らしめる原則を採つて來た。従つて和蘭の行政的支配は直接には土着人中の支配階級に向けられたにとゞまり、直接支配は行はれなかつた。東印度會社の統治はひたすら輸出農産物の獲得に向けられ、一般土着人の福祉に就いては洵に冷淡であつた。然るに土着人の支配階級はたゞ東印度會社の命に服するを事とせるのみでなく、會社の勢力を背景として一段と苛酷な政治を行つた爲めに土着人の窮乏はその極に達した。其後に自由主義的思想の發達に影響されて、多少緩和されるに至つてゐる。

爪哇と外領とは行政機構が違ふが、爪哇では全島が東部、中部、西部の三個の省と二個の土侯領地とに分けられてゐる。土侯領は別として、省を治める者は總督任命の知事(Gouverneur)で各省は更に理事州(Residentie)に分けられる。理事州の長官は理事官(Raad van Indische Bestuur)で知事の命に従ふ。知事も理事官も和蘭人である。理事州は副理事州に分れ、更に土人理事州に分れるが、その長官たる土人理事官は土人で政府の任命にかゝる。以下、更に土人副理事州及び區(District)に分れ區は分區に分區は村(Dorp)に分れ、デサが行政の細胞となつてゐる。いづれも土人が治めて居る。之によつても解る通り、爪哇の直轄三省では和蘭人は統治の上層機關を掌握し、下部行政は一應土人をして之に當らしめる方法を採用してゐる。

之に對し外領では和蘭人の直接支配が遙に下部組織に浸透してゐる。外領全地域はスマトラ省、ボルネオ省大東省の三省に分れ、省は更に理事州に、理事州は副理事州に、副理事州は區(District)に分れ、區は分區に分れその下にデサがあるが、村長以外は總て和蘭人で、知事(Gouverneur)、理事官(Raad van Indische Bestuur)、副理事官(Vice-Resident)、副知事(Vice-Gouverneur)、と呼ばれてゐる。

かゝる行政組織の外に土人州(natie states)が特殊の地位を占めてゐる。これも爪哇と外領とは事情が違つて、爪哇の土人州たる所謂王領は前記の爪哇三省の管轄地域とは別にジョクジャカルタ省及びスラカルタ省となつてゐるが、外領では省の中に土人州がある。この土人州の地位も様々であるが、爪哇のソロのス、ナン領、ジョクジャのサルタン領及び外領に在る土人州中十三州は政治的協定に依つて中央政府との間に権限が協定されてゐる。之に對し外領の他の二百五十三州は政府から一定の権限を與へられた太守が治めて居り、現在では一九三九年一月一日施行の土人州令に據つてゐる。爪哇のマンクネガラ及バクアラムの兩者は前記二種の土人州の中間的地位を占めてゐる。

土人州の首長は州民に對しては立法者たると同時に執行者であり、たゞ爪哇に於ては裁判は州判事によつて行はれる。土人州は州自體の豫算を立て、之を施行してゐるが、無論その豫算は和蘭官吏の承認を要する。土人州行政に於ける和蘭官吏介入の度合は、前述した土人州の地位如何や、土酋の教育手腕等によつて一様でない。尙、土人州首長の行政其他の権限は土人に對するもので、歐洲人及之と同等に待遇されるアジア人には實施されない。

大體右の如き機構となつてゐるが、更に之に自治行政の形式が部分的に加へられ、地方議會が設置されてゐる。爪哇では省議會、土人理事州會、市會があり、外領では一部の都會及區域に幾分自活的な制度があるに過ぎない。構成や権限に夫々差違があるが、議員が和蘭人、土人、非土人の三種に區別されてゐる點だけは共通してゐる。

惟り蘭印の政治機構のみならず、社會制度を見る場合にも最も重要なものは村即ちデサである。村は種屬社會た

ることもあり、亦、地域の社會たることもあり、一種の村落共同體で、傳統と共同的精神とに支配されてゐる。村長、長老會及村會があつて村の行政を行つてゐる。外領のデサは形式も様々で爪哇のデサより大きいのが多い。今後蘭印經濟の近代化が進むにつれ、かゝる傳統的生活單位の崩壊は必至と見られるが、それは亦蘭印政治機構の根本的變改を意味するものと云はねばならぬ。

第二章 蘭印と國際資本

第一節 南洋に於ける國際資本

第一項 國際資本の進出

南洋が國際經濟の舞臺となつたのは第十六世紀の中頃からであるから四百年ほどにもなる。英蘭佛三國が互に東印度會社を作つての力戦は幾多の血腥ぐさい場面をも織り込んで相當はなやかなものであつたが、之等の所謂「冒險商人」の活躍を中心とする經濟戦は結局商業戦であり。貿易戦であつた。「貿易は軍艦旗に従ふ」といはれたのもこの頃で、南洋諸地に貿易地點を獲得し、肉桂、香料其他の南洋特産物や珍奇なものを歐洲に輸入するのが主眼であつた。次いで歐洲工業製品の市場としての一面が擡頭して來たのであるが、いづれにしても貿易戦である限り、争ひが如何に激しくとも、資本主義國家の經濟戦として未だして、投資戦となり資源獲得戦となつてこそ初めてそ

これは本格的なものと云ひ得る。といふのは説明するまでもなく、資本主義發達の最高段階は獨占資本主義であるが投資戦や資源獲得戦はこの最高段階に至つて始まるものだからである。「資本に國境なし」といふ諺もある通り、資本の國際的移動は本來超國境的なもので、苟も多額の利潤を取得する見込が確實なる限り、資本は世界の隅々まで流れて行くといふが、これは原則論で、實際に之が實現されるためには相當の前提條件が出來上つてゐることが必要である。國內で高率競争利潤が稼げる場合には如何に超國境的性格を有してゐるにしても、資本の國外流出は阻まれ勝である。従つて或程度國內で高率競争利潤の獲得にブレイキがかゝつて來ることが必要である。然るにこのブレイキがかゝるのは國內資本の蓄積が巨大となつた時であるから、どうしても實際問題としては資本主義が獨占段階に入つた後でないといふ大がゝりな對外投資即ち資本輸出は困難である。資本輸出は獨占資本主義的特徴的現象だと云はれるのも之れが爲めである。従つて獨り南洋とは限らず一般に外國投資が目立つて來たのは十九世紀の末期からである。

然らば現在、南洋にはどれ位の外國投資が行はれてゐるか？、之が先決問題であるが、元來、投資金額を明確に知ることは非常に困難である。殊に過去何十年に涉つて南洋各地に行はれてゐる投資の總額を、多少とも正確に知らうなどいふことは、正直に申せば不可能である。極く大雑把に見て金平價で百三、四十億圓見當でもあらうか。この中四十億を華僑投資と見積れば、それ以外のものが約百億となる勘定である。この百億は英、蘭、佛、白、米等々各國に分れるが、第一位を占めるのは恐らく和蘭であり約六十億、之に次いで英國が二十三、四億、第三位は

佛蘭西であらう。佛蘭西の對南投資額は英蘭よりも一層ハッキリしないが、一九三三年にデリナー教授の發表したところでは佛印への投資が百億法を超えてゐる。佛蘭西の對南投資が殆んど佛印に集中されてゐる點からみて、この數字は佛蘭西の南洋投資の全額に近いものと思はれる。米國の投資家は比律賓を主として大約三億二、三千万弗、日本の投資は二億數千萬圓乃至三億圓程であらう。

之等の投資の地域的分布は之亦各種の調査數字があつて一様でないが、蘭印の第一位は動かない所、之に次いで英領馬來、比律賓、タイ、佛印の順序であらう。これはタイ國の投資を十億圓といふ通説に従つての順序である。

第二項 英國資本

先づ英國資本を採り上げてみよう。英國の海外投資はナポレオン戦争（一八一七年）の直後に始ると云はれるが、之が英國經濟に對して重要意義を有するに至つた事は一八七〇—一八〇年代と見られる。第一次世界大戰の開始時に於ては世界第一の投資國となつてゐた。海外投資進展の速度は第二世紀に入るに及んで非常に増大してゐる。一九〇〇年には年々の投資の略八割が國內で二割が海外であつたのが、一九一三年には逆轉して二割が國內八割が海外投資となつてゐる。この投資の地域を見ると、當初は歐洲及び米國が中心であつたが、獨逸及合衆國の經濟的發達の進展に押されて漸次に南米及太平洋方面に向つて來てゐる。一九一三年には南洋への投資は九億四千萬磅と計算されてゐる。然るに大戰で列國の投資關係は非常に變化し、戰前債務國であつた合衆國は一舉に世界第一の債權

國となり、他方、英國の投資は全體として漸減的傾向を辿り、たゞ屬領への投資のみが漸増する大勢にある。英國の對南洋投資は馬來及蘭印に對して一億八百萬磅タイ國に對しては錫工業に七千萬磅、チーク材工業に二千一百萬磅別に公債投資九千萬鎊がある。比律賓には林業及び栽培業を主とする七千萬弗見當のものが行はれてゐる。蘭領印度に對する投資では農業に對する二億八千萬ギルダールと石油等に對する一億二千四百萬ギルダールとが特出してゐる。農業投資では和蘭の七五%に次いで一三、五%で第二位に在り、和蘭資本が壓倒的に優勢な糖業投資を除けば二〇%に達する。主要なものはゴム業投資でゲルデンに依れば少なくとも四七%を占めてゐる。其他金額はズツト下るがコーヒー、茶、キナ等の生産にも投下されてゐる。石油投資では蘭印最大の石油會社バターフェの資本三億圓の四割がブリテイッシュ・シエルの所有に屬する。其他バターフェ社を通じてニューギニア石油會社・蘭領印度石油會社へ參加してゐる。後述する米國資本と共に、蘭印石油業は殆ど完全といつてもいい位に英、米、蘭三國資本の支配するところである。邦人資本ではボルネオ石油會社（資本金二百萬盾・三井物産、日本石油・オースト・ポルネオ三社）によるものがあるだけである。

第三項 佛蘭西資本

次は和蘭資本であるが之は後に詳述するからこゝでは省略し、たゞ和蘭資本は殆んど蘭印に集中されてゐる事だけを述べて置く。之に次では佛蘭西であるが、御承知の如く、この國ほど「金利生活者國家」の性格が濃厚な國は

ない。國民が非常につましく貯蓄心に富んでゐることは前々から有名だが、その反面に消費生活の趣味性は非常に發達してゐる。パリの「流行」は勿論として、郵便切手のデザインもいゝし、銀一色のレチオンドノール勳章など洵に瀟灑なものである。つまり「ゲイジュツの國」なのである。そこで「花の都」のパリを愛する連中など大いにこの「文化」を尊重し、獨逸の勝利は北方の野蠻性のお蔭だとさへ言つてゐるが、この「文化」こそ佛蘭西資本の強烈な高利貸性の産物なのである。敗戦の眞因もその邊に求められねばならないのだと思ふ。それは餘談だが佛蘭西の對南投資はこゝも問題の佛領印度支那に集中されてゐるが、この地と佛蘭西との經濟的接觸は、一六六九年の夏に佛蘭西船が東京海岸に到達した時に始るが、確固たる地歩を占めるに至つたのは一八六二年の西貢條約以後のことであり、今日佛領印度支那と稱される地域の統合を完了したのは更に三十一年後の一八九二年にラオスを保護領化した時である。爾後今日まで五十年間に涉つて開發が續けられ、前述の如くデリナー教授の調査に依れば總投資額は百億法を超えてゐるが、その半分は利權屋の懐に入り、實際の投資額は五十億法位であらうと云はれてゐる。

第四項 米國及支那資本

以上に述べた英、蘭、佛三國は南洋投資國中の一流に位するもので三者合計では全南洋國際投資の七、八割にも達するであらう。残る二、三割を日、米、獨、白、支、スペイン等が分擔してゐる。米國の南洋投資は比律賓への二

億六千萬弗蘭印への一億數千萬ギルダー、計三億二、三千萬弗見當であらう。比律賓に就いてはその二割が公社債投資であり、直接投資は砂糖、コ、ナツト、纖維工業、木材業、鑛業等に分散してゐる。フランクローリング及びベンドルフマンの調査發表（一九三九年）によると産業投資總額は一億九千二十餘萬弗で内譯の大略は左の如くである。

鑛	業（十七社）	七五、八八一千比
製糖	業（十社）	四四、八五〇
農	業（二十七農園）	三九、四九〇
ホテル	業（四十九軒）	三〇、〇〇〇

この表にも現れてゐる通り、米國の對比投資の特徴は投資が比較的各種業務に分散してゐることである。問題は一九四六年の比島獨立に對して米國投資がどういふ傾向を辿るかである。獨立延期論もあるやうだけれどもケソンが三度大統領に就任する限り、國際情勢が非常に切迫して、太平洋の波濤が荒ぶれば別だが、先づ獨立は成就するであらう。併し政治的獨立と經濟的獨立とは別だ。現に比島政治の中樞は後者の確立に目覺しい活躍を續けてゐるが、こゝ僅かに六ヶ年の歳月を以て之を成就することは不可能なるのみでなく、經濟的獨立の中核たる各種工業の開發そのものに多額の資金を要する。民族資本の蓄積に乏しい比島がこれをどうして調達するかである。刻下の世界情勢から推測すれば結局、米國資本に頼るより仕方がないのではあるまいか。米國にしても、投資が同時に政治的勢力の浸潤を齎らすものである以上、比島を外國資本の手に委ねることに堪えられまい。従つて比島の經濟的獨立が大いに促進せられたとしてもそれは單に産業面に止り、一步その裏に入つて見れば米國の支配が却つて強力

となるの結果を招來するのではあるまいか。私は之を憂へる。蘭領印度に對する投資は石油と二、三の工場とに對するもので、合せて一億七八千萬ギルダーであらう。最大なものには石油投資でスタンダード系のネーデルランシセ・コロニアル社を中心に一億一千万盾に及ぶ。工業投資としては爪哇にジェネラルモーターズ系の自動車組立工場とグットイヤーのタイヤ工場とがある位のものである。

捉へ難いものは「支那」だといはれるが、南洋投資でも「支那」は把握し難い。今日六百二十萬を超える在南華僑は牢固たる地盤と強い勢力とを有して居り、その投資も頗る巨額なものがあらうと思はれるが、數字的には何等據るべき資料がない。或る調査數字に依るとタイ國を除き、支那投資は十億圓近くとなつてゐるが、別に福田省三氏に依れば華僑投資は四十億圓といふ。單純に加算すれば五十億圓といふ譯だが、さううまくは行かない。それは華僑投資即ち支那投資と云ひ難いからである。勿論華僑と云へば支那人だが、他の在南外人に比較して著しく國際人的である彼等は、夫々の居住地に於てその國民生活の裡に融け込み、之が一部となつてゐる傾きが強い。従つて華僑資本中、支那から持出されたものでなく、夫々の土地で蓄積されたものが多いことは十分に推測される。之を一概に支那の投資と稱するは如何なるものであらうか。華僑資本は華僑資本として一種獨特なものと考えより外あるまい。華僑が在住地の國民化してゐる點から華僑資本に一つの特性が生れてゐる。それは投資部面が經濟生活の各方面に互つて居り、特に中少商工業及庶民金融に深く入つてゐる爲めに之を通じて土着産業に強力な支配權を把握してゐることである。

第五項 日本資本

最後に日本の投資を見ると、總額三億圓内外といはれてゐる。投資対象は栽培業の一億四千萬圓見當を第一位とし、鑛業、林業が之に續いてゐる。地域別に見れば比律賓が最も多くダバオのみで一億圓といはれる。對蘭印投資は三一年の蘭印政府發表數字に依れば農業へ二千萬盾となつてゐる。主として糖業である。鑛業ではボルネオ石油への十八萬盾爪哇スラカルタ州ケルトモコの石原産業の銅山に對する公稱資本五十萬盾であるが、實際には少なくとも二、三百萬盾を投じてゐると思はれる。其他太平洋鑛業が鐵採掘をやつてゐるし、協和興業（資本金二千萬圓）がボルネオで石油の採掘を進めてゐるが、現在、採掘にまでは到つてゐない。林業ではボルネオ物産、南洋林業、龜田木材、雪本商會があり、護謨栽培では南國護謨、南國産業、野村東印度殖産、日沙商會、ボルネオ護謨、スマトラ拓殖、昭和護謨其他數社がある。英領馬來に於ては鑛業關係では飯塚鐵鑛、石原鑛山、石原産業公司、日本鑛業等であり、ゴム栽培では日本産業護謨、昭和護謨、馬來護謨公司其他を合して十一社、外に木材關係一社等である。總投資額は七、八千萬圓といはれる。比律賓ではダバオ中心でダバオに於ける投資は、農業三九〇〇萬比、商工業九五〇萬比、林業二〇〇萬比、漁業三〇萬比、道路其他三〇萬比、計五二〇〇萬比となつてゐる。この外に四千數百萬比が鑛業、林業、農業に投下されて居り、比島全體としては一億比近い。邦價換算二億圓ばかりである。之を企業に就いてみれば林業關係が十一社、鑛業では石原産業其他數社であるが、最も盛なのは麻栽培で太田興業以下

三十會社を數へる。佛印、タイ國に於ては例へば前者では臺灣拓殖が鐵の採掘に従事してゐるが、その他特に取立て、擧ぐべき程のものはない。

右の如く列國の對南投資に比して、日本の投資は洵に貧弱であり、従つて南洋に對する日本の經濟的威力は決して力強いものでない。之は深く考ふべき一事である。

第二節 蘭印と國際資本

第一項 産業資本

植民地に於ける資本活動を述べるに當り、第一に問題とすべきは民族資本であるが、蘭印には民族資本は僅少である。貧窮な生活に喘いでゐる土人が蓄積など出来る筈はないからである。これは蘭印に限らず、タイ、佛印、馬來みな然りで、比較的多いと認め得るのは比律賓ぐらいのものである。南洋で民族資本と云へば華僑資本しかない。福田省三氏の說に従ふと十年前で約四十億圓に及ぶ。この華僑資本が現在の蘭印にどれ位あるかは全然不明である。一般的に云つて、華僑が蘭印經濟に占める地位は非常に強固なものではあるが、その資本は商業資本を中心としてゐる事實を銘記して置かねばならぬ。

華僑資本を別とすれば、他は盡く外來資本である。その總額に就いては諸説あるが、和蘭資本をも含めて總額五十八億盾といふ計算は他の説に比べて比較的確實な基礎に基いてゐる。即ち私的投資三、三一七百萬盾、政府直接投資一、〇〇八百萬盾、公債一四六七百萬盾あり、その内譯は左の如くである。(一九三〇年)

私的投資額	三、三一七百萬盾
政府投資額	一、〇〇八
計	四、三二五

(一) 私的投資

農業投資	二、一〇〇百萬盾
鑛業會社拂込資本金	四三〇
鐵道	二一五
船會社	三九
其他商業保險倉庫會社拂込資本金	三三
小計	二、八一七
右會社々債借入金及個人事業資本金	五〇〇
計	三、三一七

(二) 政府投資

(イ) 鐵道其他官營事業

鐵道其他	六一〇、七五五千盾
港灣	一一八、九一五
浚渫作業	一二、二五六
印刷局	二、四〇〇
運送事業	二、二五二
郵便電信電話	七五、九七七
水力電氣	一八、七九三
小計	八四一、三四九

(ロ) 生産事業

ゴム及ガタパーチャ	一〇、二一〇千盾
金	五、四八四
錫	一八、一九二
石炭	二九、三七五
石油	一五、〇〇〇
鐵	一一一
小計	七八、三七二

第二章 蘭印と國際資本

(ハ) 專賣事業

鹽業	九、四〇四千盾
阿片業	四、三二九
質業	七四、七九一
小計	八八、五二四

更に之を投資國別に見たいがその數字を得られないから、農業及び鑛業に於ける數字を示して置く。これでは不完全なことは勿論であるが、和蘭資本を除けば外來投資の大部分が右二産業に投下されてゐる點からみて、大勢を窺ふには充分であらう。

國別		農業(A)	鑛業(B)
和蘭	一、五三五、八三〇(千盾)	三〇九、四二八(千盾)	
英及佛國	二七八、〇五三	一二四、二〇〇	
白米	一一一、八二八		
日本	五三、〇三五	一一〇、〇〇〇	
日逸	一九、六二八	一八〇	
獨逸	一七、九〇五		
瑞西	五、二一三		
伊太利	二、一九四		

支那	八五〇
小計	五四四、七一二
政府	五八、四一八
其他	四一、〇九七
計	二、〇六四、七八二
其計	六〇三、一〇三

(註) A 蘭印農商工部發表(一九二九年末現在) B 臺灣總督府(一九三七年)

更に右の内譯を示せば

(イ) 蘭印農業投資表

國別	砂糖	護謨	煙草	油椰子	茶	纖維	古椰子	ガム	珈琲	規那	計
和蘭	七九、六六八	三三、三五四	二六、二五〇	五、〇三三	一四、九六六	四、〇三六	三、三七八	—	八九、三二六	一九、六六九	一、五五、八三〇
英國	一〇、一〇九	一三、七七一	—	三、〇一〇	四、五五九	—	一、四七〇	一、〇〇〇	三、八三三	二、六三三	七、八、〇三三
佛・白國	—	六六、〇三三	三、〇〇〇	二、七、七〇九	六、五八八	—	—	—	八、三六六	一、天	一一、八六八
米國	—	五、〇三三	—	—	—	—	—	—	—	—	五、〇三三
日本	三、七六六	一三、八三三	—	二、五〇〇	四、〇三〇	—	—	—	—	—	一九、六六八
獨逸	—	六、〇三三	—	二、五〇〇	六、六六〇	—	—	—	—	—	一、三、三三三
瑞西	—	三、〇三三	—	—	—	—	—	—	—	—	三、〇三三
伊太利	—	二、一三三	—	—	—	—	—	—	—	—	二、一三三
計	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	二九

第二章 蘭印と國際資本

其他 一三、八五 一 一 一 一 八、三四 八八、〇七

總計 七五、五八 六〇、三三〇、〇〇〇 八、八七〇 三〇〇、一〇九 四、〇三六 四、八七五 一、〇〇〇 三〇、一四四 三、〇八〇 二、〇四、七三三

(註) 「國際經濟上より觀たる蘭領印度の意義」 (一九三一年農商工務部發行) 單位=千盾

(ロ) 蘭印鑛業投資表

國別	石油	石炭	錫	金銀	其他	計 (千盾)
和蘭	二四八、四八〇	一一、四七〇	一七、五〇〇	一四、二二〇	一七、八一二	三〇九、四八二
英國	一一三、六〇〇			六〇〇		一二四、二〇〇
米國	一一〇、〇〇〇					一一〇、〇〇〇
支那					八五〇	八五〇
日本	一八〇					一八〇
計	四八二、二六〇	一一、四七〇	一七、五〇〇	一四、八二〇	一八、六六二	五四四、七一二

イ表の數字は十年前のことであるから少々舊いので或程度の修正が必要なることは勿論で、ゴム事業に於ける米國の地位の如きはもつと上昇し、約四〇%を占めるものと考へられるが、基本的な傾向に變化はない。ロ表の石炭及び錫に外國投資の數字が無いのは、両者が半政府事業となつてゐる爲である。

轉じてこの蘭印投資が南洋全體の國際投資に於てどんな地位を占めてゐるかを見るに、之亦各種の數字があつて取捨に悩むが、参考の爲めその二三を掲げて置かう。

南洋各地に於ける地域別投資總額表

地方別	調査出所	臺灣總督府調査 (B)	「地理教育」掲載
蘭領印度	南洋栽培協會調査 (A)	三、四六〇、四〇〇千圓	四、八〇〇、〇〇〇千圓
英領屬領地		一、〇五四、一〇〇	一、〇八〇、〇〇〇
英領馬來		不明(除ク)	
英領ボルネオ		八〇、〇〇〇	
サラワク		六〇、〇〇〇	
比律賓		二、〇〇〇、〇〇〇	一、〇九四、〇〇〇
タイ		不明(除ク)	
佛領印度支那		七〇〇、〇〇〇	二、九八〇、〇〇〇
總計		九、一四〇、〇〇〇	九、九五四、〇〇〇

第二項 金融資本

之等の産業投資の外に、國際資本は亦、金融部門に於て左の如き決定的の勢力を有してゐる。

第二章 蘭印と國際資本

國籍	銀行名	本店所在地	公積資本	拂込資本	積立金	預金
和蘭系	爪哇銀行	バタビア	九,000,000盾	九,000,000盾	六,九七,000盾	三,四九,000盾
和蘭系	和蘭貿易會社	阿姆斯特ダム	六五,000,000 (減資後の分)	三三,000,000 (減資後の分)	五,000,000 (取崩後の分)	二六,八三,五三六
和蘭系	蘭領印度割引銀行	バタビア	二〇,000,000	三,五〇〇,000	二,七〇〇,000	五,八六一,四三三
和蘭系	蘭領印度商業銀行	阿姆斯特ダム	一〇〇,000,000	五五,000,000	三六,六三,三三〇	九〇,三三〇,三三九
和蘭系	拓殖銀行	バタビア	二五,000,000	一六,五〇〇,000	八,二一六,000	一,三三〇,000
和蘭系	ロッテルダム國際金融組合	ロッテルダム	二〇,000,000	一五,000,000	八,七五七,000	—
和蘭系	阿姆斯特ダム商業組合	阿姆斯特ダム	八〇,000,000	四〇,000,000	二一,五九〇,000	—
和蘭系	蘭領印度勸業銀行	バタビア	五〇〇,000	一〇〇,000	七〇,〇〇〇	—
和蘭系	爪哇勸業銀行	スラバヤ	一,000,000	一,000,000	三六,000	一〇〇,000
和蘭系	De Credit Bank voor N. I. 對自治機關貸付	バタビア	四,000,000	二,000,000	—	—
和蘭系	一般貯蓄預金銀行	香港	五,000,000	二,000,000	四,二〇〇,000	—
英國系	香港上海銀行	香港	五〇,000,000 香港幣	二〇,000,000 香港幣	六,〇七,五六〇 香港幣	三,七〇,〇〇〇 香港幣
支那系	查打銀行	倫敦	三,000,000 磅	三,000,000 磅	三,000,000 磅	四六,四八,四四四 磅
支那系	華僑銀行	新嘉坡	四〇,000,000 弗	一〇,000,000 弗	—	二六,四二,一六〇 弗
支那系	Bank Vereniging OeiTiong Han	普通通新嘉坡	一五,000,000 盾	四,000,000 盾	—	—
支那系	バタビア銀行	普通通バタビア	—	五,000,000 盾	三六,三〇〇 盾	五三,〇〇〇 盾

(註) 獨軍の和蘭占領後、本店を蘭印に移したものが多し。

本邦系銀行としては臺灣銀行、横濱正金銀行、三井銀行、華南銀行の各支店出張所が八ヶ所ある。

右の諸銀行中、蘭印特有のものとしてクルチュール・バンク即ち拓殖銀行がある。これは農業金融を行ふと同時に、自ら栽培業をも經營してゐる。我國の東洋拓殖會社の如きは、クルチュール・バンクを真似たものである。その發達は一八五三年以後のことに屬し、私的栽培企業（當時は強制栽培が行はれてゐたが、之と並行して私的自由企業もあつた）が發達し資本需要が増加した爲めに、和蘭貿易會社（N・H・M）が糖業金融に乗出したのが始まりである。前掲の銀行一覽表に貿易會社の名があるのは一見奇妙であるが、その由來はかうした譯なのである。（クルチュールバンクの發達に就いては次節に述べる）

之等の大金融機關の外に、庶民金融機關として、官營の庶民金融銀行、村落銀行、官營質屋、村落米穀銀行、漁業組合、當舖、信局等があるが、之等は一括して第四章第二節で述べる。

第三節 資本ルートの發展

第一項 資本主義前奏曲

前節に述べた如き資本は如何なるルートを通つて蘭印に入つて來たか、これを尋ねることは即ち蘭印資本主義發

達の跡を辿ることである。蘭印經濟の機構を一言にして云へば、非常に幼稚な生産技術の上に立つ土人産業と資本主義的經營とが並列して居り、今や兩者の矛盾が漸次表面化し、この矛盾解決の途が「より一層の資本主義化」に求められつゝあるのである。之を具體的に云へば、農業では一方には輸出を主とする煙草、砂糖等の農園農業があり、他方には内需を主とする米や大豆を作る土人農業がある。工業では石油、石炭、錫等の鑛業が大經營であるに對し、それ以外の工業は殆んど土人手工業である。かゝる對立の處へ近時織布工業其他が近代化され始めて、土人工業を次第に壓迫してゐるといふ状態である。

蘭領印度が歐洲資本主義に接觸し始めたのは希望峰迂回航路が開拓され、スペイン・ポルトガル等の東洋貿易が開始された頃であるが、之が本格的となつたのは第十六世紀の末葉から第十七世紀の初頭へかけてである。この頃三つの東印度が設されてゐる。

一六〇〇年には英國東印度會社が一七〇四年には佛蘭西東印度會社が設立され、而して一六〇二年には和蘭東印度會社が創立されてゐる。資本金六百六十萬ギルダで貿易及び行政の實權は固り、兵權をも掌握して大いに勢威を振つたのであるが、その經濟活動は貿易に限られ、内部開發は觀られなかつた。然るに英國の擡頭によつて商權地域の範圍が制壓されるに及び、特殊産物の増産を圖らんとして強制栽培其他の手段に訴へたけれども、成功を見ず、遂に一七九九年多額の負債を残して解散の止むなきに至つた。

然るにナポレオンの爲めに和蘭が征服されるや蘭印も一時佛領となつたが、英國の勝利と共に再び蘭領となり、

カペレン總督の下に農業の開發が行はれた。併し最も強力な政策と發展とを齎らしたものは一八三〇年——一八四〇年に互るファン・デン・ボツシユ總督の政治であつた。

ボツシユ經濟政策の根本は、強制栽培と委託販賣とである。土人はその耕作地の五分の一を藍と砂糖の栽培に充てることを強制され、その産物は政府の手に收得された。そして和蘭貿易會社に依つて輸出される仕組である。この政策は和蘭の立場から見れば非常な成功を收め、一八三〇年に於ける商品輸出は僅かに一千二百九十萬フロリンに過ぎなかつたものが、三五年には三千二百六十萬フロリンに、四〇年には七千四百二十萬フロリンとの五倍餘に躍進して爪哇は魔術師の杖の如く母國に富を注ぎ入れたと稱された。而もこの間生産方法の改良は殆んど行はれてゐないのであるから労働收奪の劇しさを思ふ可きである。煙草及び茶にも強制栽培が施行されたが、これは所期の成功を得なかつた。いづれにしても斯の制度が多大の經濟的貢獻を本國和蘭に對してなし得た事は云ふまでもないが、ボツシユの考へとしては本來蘭印の開發が目的であつたと云はれる。

蘭印開發の爲めには多額の資本を必要としたが、不幸にして和蘭自身の政治的事情と、和蘭資本家がかゝる遠隔未開の地に投資することを好まなかつたことゝの爲めに、蘭印は資本を輸入することが出来ず、勢ひ蘭印自身で之を造出しなければならなかつた。そこで之が手段として強制栽培と和蘭貿易會社とが作られた譯である。今日の言葉で云へば資金の現地調辨手段であつた。然るに和蘭の政治經濟の危機増大のために、これが和蘭自身の救濟手段になつたのである。

第二項 栽培業の資本主義化

ポツシュの成功に依つて在歐和蘭資本家連はこの東洋の島が案外に有利な投資地たることを知り、次第に民間資本がこの地に吸収され始めた。投資の対象は勿論砂糖、コーヒー等の農産物である。ゴムはまだであつた。民間資本が活躍を始めるならば有力な官業の存在は却つて之が障碍になるところから、ポツシュの退場と共に、一九四〇年以後は漸次に自由主義へ移行して行つた。この過程は糖業の歴史が最も良く示してゐる。甘蔗の栽培そのものは強制され官業として行はれてゐたが、之が精製事業は多くは政府の貸下金で始めから私的企業として營まれて來たやがて一八七〇年頃から官業栽培が順次に私人企業に移され、遂に七九年に至つて、爾後強制栽培を年々十三分の一づつ私人企業に移し十三年間に之を全廢することが決定され、その結果九一年を以てポツシュが創始せる甘蔗の強制栽培は、和蘭資本家に對する原始蓄積の役割を果して終末を告げ、資本主義蓄積の時代に入つて行つたのである。

併し、右に述べたところは主としては爪哇糖業に關するもので、又、爪哇糖業こそは蘭印糖業を代表するものであるから、つまりは蘭印糖業の發達の勢を示すものであるが、私的農園糖業は必らずしも強制栽培から發達したもののみは云へない。同じ爪哇でも強制栽培の實施されなかつたスラカルタ及びジョクジャカルタ州には既に一八五七年に四個の自由栽培の農園が經營され、二十年後の七七年にはスラカルタニに十九、ジョクジャカルタに九つ

計二十八となり生産高も三十一萬二千餘ピクル（一八七五年）に達してゐる。

此等の當初から自由栽培として發達して來たものと、強制栽培から自由栽培へ移されるものとの漸増とに依つて、糖業の資本主義化は漸時に増大して來たけれども、之を決定的ならしめたものは一八八三年以後糖業を襲つた不況である。この不況は二つの原因を有してゐる。一つは歐洲に於ける甜菜糖の發達で、之が爲めに既に八三年に於て世界の砂糖生産は過剩に陥り糖價は激落を演じてゐる。この打撃に加ふる爪哇の甘蔗はセレ病と稱する萎縮病に襲はれ、中部爪哇の甘蔗の三分の一は之が被害を蒙つたのである。

この爪哇糖の恐慌は一方に於て科學者の努力によるセレ病の克服、他方に於て有力なクルチュール・バンクの發達を促した。

クルチュール・バンクは蘭印特有の企業形態で、前述の如く一面に農業金融を行ふと共に、他面に自ら栽培業を經營する。クルチュール・バンクの起源は私的企業が發達し資本需要が増大したところにあるので、一八五三年以後の事に屬しN・H・Mが單なる貿易會社から變質して糖業金融に乗出したのが始りである。一八六一年迄に同社は十七の砂糖工場に金融してゐる。これに刺戟されて五七年にはN・I・Escompto Mij（蘭印割引銀行）が設立され、引續いてロッテルダム銀行、蘭印商業銀行、Int Credit en Handelsvereniging等のクルチュール・バンクが作られた。之と共にチャータード銀行がバタヴィアに支店を開き、一八六八年に始めて私人手形の取引を開始し、かくて一八七〇年までに農業金融も一應形をなしたのである。

右の如くいはゞ飛躍の體制が整つたところへ一八六九年にスエズ運河が開通した。この開通が東西兩洋の連絡を著るしく強化し、蘭印のみならず、南洋經濟全體にとつて劃期的事件となつたのは云ふまでもないが、フアニヅアルが言つてゐる如く、この變化を良く利用して和蘭及蘭印經濟を盛ならしめたものは自由主義であつた。自由主義の下にどんなに農園農業が發達して行つたかの史的發展を辿ることは後に譲り、こゝでは現状の一斑を記して置かう。一九三八年に於ける蘭印のエステート數二、四〇二、之が面積總計は二百二十萬ヘクタール（一エステート當り面積九三二・三ヘクタール）この中、開墾地面積百九十五萬ヘクタールである。この農園から生産されるものは

ヘヴィアゴム	一五三、五三〇千疋
ガタバチヤ	一一〇千疋
珈琲	四〇、三三三千疋
茶	七一、九九一千疋
煙草	六〇、五七五千疋
キナ	一一、八七八千疋
ココ椰子	二七、七三八千疋
砂糖	一三、七五五、一〇〇千キントル

等々である。之等を産するエステート農業への投資は和蘭十五億四千萬盾、英國の二億八千萬盾を主として二十億

盾邦貨換算約四十億圓が投下されてゐる。日本は二千萬盾程度である。之等の生産物は殆んど全部輸出される。従つてエステート農業の産物が増加しても蘭印在住民の物資生活が豊になるのではなく、僅かに賃銀收入の増加を齎らすに過ぎない。企業利潤も大部分が投資國に吸収されることは三八年の商品輸入を除く對外支拂額三億三千九百萬盾中、配當及利潤送金が一億六千七百萬盾に達する一事で充分相察され得るであらう。従つて稍誇張して言へば蘭印はエステート農業に對して土地と勞力との提供者たるに過ぎないのである。

第三項 鑛業の資本主義化

農業に次いで資本主義化したものは鑛業である。現在近代的經營を行つてゐるのは錫、石炭及石油である。錫は世界第三位で四千萬噸近くを産するが、これはブリトン鑛業會社と政府との獨占事業となつてゐる。パンカ島の錫採掘は全く官營で他はブリトン鑛業の支配する處であるが、別に政府出資一千万盾ブリトン社出資六百萬盾でブリトン共同鑛業會社を作り政府は蘭印錫鑛業に強力な支配權を振つてゐる。蘭印石油業への資本主義の侵入は一八八〇年代に始り、和蘭資本に屬するドルフセ石油會社、ムアラ・エニム石油會社、スマトラパレンバン石油會社、ムシ、イリル石油會社、ブラク石油會社、コーニングレック社等が相次いで爪哇及スマトラに設立されたが、この中、コーニングレックの活躍目覺しく、新設會社を次々と傘下に收め、一九二四年迄には爪哇及スマトラの石油業を獨占するに至つた。他方ボルネオに對しては英國資本が侵入した。即ち一八九八年シエル・トランスポート社の

出資に依つて蘭領印度産業貿易社が設立され、着々として業績を擧げた結果、コーニングレーク會社をも凌ぐに至つた。そこで兩者は一九〇七年合併して資本金三億盾のバターフェ石油會社(B・P・M)を設立して蘭印石油の獨占的支配を行ふに至つた。

然るに一九一二年スタンダード石油會社の手によつてネーゼランシエ・コロニアル油會社が設立された爲めにB・P・Mの獨占は破れたが、他面新油田開發の爲めに協同出資が行はれ、蘭領ニューギニア石油會社が設立された。其他B・P・Mと政府との共同出資になる蘭印石油會社がジャンピー油田の採油に従事してゐる。要するに蘭印の石油業は當初から大資本的經營として發達し、事實上、英、蘭、米三國資本の支配するところとなつて居る。蘭印鑛業投資は六億盾を超えるが、その大半たる三億一千万盾は和蘭資本、一億二千四百萬盾が英國資本、一億一千万盾が米國資本となつてゐる。日本の投資額は不明であるが數百萬盾を超えまいと思はれる。然るに蘭印政府の鑛業法は外國資本の侵入を困難ならしめる様に規定されてゐるが、日、蘭印經濟の緊密化が要求されてゐる現狀に於て、之等規定の改變も當然考慮せらるべき問題であらう。

第四項 工業の資本主義化

先づ栽培業へ、次いで鑛業へ侵入した資本主義は、今や最後の舞臺として製造工業へ向つてゐる。蘭印の工業も農業と同じく、小規模の土人工業と近代的工業とに分れるが、農業の場合と異なり前者が内需向で後者が輸出向と

いふ區別はなく、殆んど大部分が内需向である。工業全體としては未だ手工業の方が機械化工業よりも遙かに優勢で、兩者に於ける主要工業たる織布工業を比較しても、年々の生産物價値は手工業の方が二倍ぐらいである。蘭印工業の資本主義化は現在二つの方向を採つてゐる。その一つの方向は外國(和蘭をも含む)資本及華僑資本に依る近代的工業の建設である。主たるものは織布工業でその他にジェネラルモーターズの組立工場とか、グツドイヤーのタイヤ工場とかである。

之等の近代的工業資本の十五、六割が和蘭資本、二十二・三割が華僑資本、残りが外國資本である。第二の方向は手工業が漸次にその經營規模を擴大してゐることである。現在この擴大過程を擔當してゐる者は華僑で、この資力に依つて獨立の職人を糾合して數百人を同一職場に蒐める迄に至つてゐる。換言すれば家内工業又は家庭工業から工場制手工業へ轉換が行はれてゐる。この轉換は未だ資本主義化とは云へないが、その前段階への過程であり、その意味に於て資本主義化の過程と考へねばならぬ。

別言すれば蘭印工業には今や産業革命が開始されてゐる。綿布の輸入が減少して綿織絲の輸入が増大してゐる事實は、這般の消息の一端を示めすものである。現在のときろ蘭印政府は資金を設けて小規模工業の發展を奨励してゐるが、その目的は蘭印工業化といふことよりも寧ろ爪哇の過剩人口を捌く手段としてである。蘭印の工業は未だ幼稚である。併しその將來の發展は資本主義發達の必然の經路として最も注目し値する。

蘭印資本主義化の過程を極く大雑把に書けば右の様であるが、以下もう少し詳細に、生産に主點を置いて述べ

てみよう。それには先づ和蘭東印度會社の活躍を一應回顧すべきは常識である。何故ならば蘭印經濟の開發即ち資本の侵入は前述した如く、この時に始るからである。

第三章 商人資本の侵入

第一節 東印度會社の設立

「大海原を拓け」これは和蘭東印度會社の封印に刻まれた言葉であるが、この「會社」の本質と目的とを最も良く表はしてゐる。會社の成立は一千六百二年三月三十一日であるから、英國東印度會社一六〇〇年よりは二年遅れ、佛蘭西の東印度會社（一六〇四年）には二年を先んじてゐるが、和蘭の東印度貿易はこの時に始つたのではなく、之に先だつ二十年程前から所謂「冒險商人」の手で行はれてゐたのである。併し彼等を驅つて東印度に至らしめたのには、一つの政治的理由がある。それはスペイン王フィリップが一五八〇年にポルトガル王となるに及んで、和蘭船のポルトガル諸港に出入するを禁じたことである。之が爲めに、從來、香料其他の熱帶物産をポルトガルの港から北歐へ仲介貿易をやつてゐた和蘭商人は全然商賣が出来なくなり、爲めに勢ひ直接に東印度へ向はざるを得なくなつたのである。一五九五年にアムステルダム商人達は二十九萬フロリンで *Compagnie Van Verre* を作り三

隻の船と一隻のヨットから成る船隊を東印度に派遣した。これは遂に爪哇に到達して九七年に歸還した。この成功に依つて東印度熱が一時に昂まり四、五年の間に同様の會社が十個も出來上り、合計六十五隻の船を派遣したが、その中五十四隻が無事に歸つて來た。之等の冒險商人達は何を賣買したかと云へば、東印度の香料買付けが主で、それに歐洲の製品を土人に賣付けてゐた。この商賣は非常に儲かるが反面に非常に危険の多いものであつた。何分にも和蘭と東洋との距離は遠いし、航海術は發達して居らず、貿易とはいふものゝ時にはスペインや英國の「冒險商人」や海賊と闘はねばならず、従つて相當に儲らなければやれる商賣でもない。一面にこれ等の危険の度を減ずると共に、他面に歐洲への輸入品の價格を維持する爲めにはどうしても獨占組織を作らなければならない。これは和蘭だけの事ではなく、當時の歐洲諸國の冒險商業がいつれも特殊會社の手で行れたのをみてわかる。

かくてアムステルダム商會、ゼーラント商會、ロッテルダム商會、デルフト商會、ホーン商會、エングホイゼン商會の六商會が合計六百四十二萬五千盾の起業費用を出して茲に和蘭東印度商會を結成し、和蘭聯邦議會から特許狀を交附されて東印度貿易の獨占的遂行に乗出したのである。

會社經營の中樞機關は各商會から選ばれた十七名の理事團 (Heeren Zeventien) で、これが和蘭本國に在つて會社の主要事項を決定する。之に對し現地には總督と印度總督府を置いた。が(但し總督の任命は一六〇九年)總督は最初は理事團の推舉に依つて聯邦議會が之を任命し東印度方面に於ける「總ての要塞、總ての重要地、總ての商館、總ての會社關係人及び會社關係商業の總司令總督」たるものであるが、議會と理事團と總督との實際關係から

みると、聯邦議會の權限は形式的で總督は理事團の下に屬するもので、理事六名の署名ある召還狀を受けた時は總督は直ちに之を遵奉しなければならず、亦、理事團は種々の訓令を總督に發し、聯邦議會は殆んど之に無關心であつた。議會の關心したところは、東印度の會社屬地に對し議會が主權を有せることを明白ならしめるに在つたにすぎない。他面、會社も總督をば現地に於ける獨裁者たらしめることなく、一六一七年以後は總督は九名の印度評議會に依つて選任され「會議員は商業戰爭、政治、行政民事刑事に關する法律上の事件に就いて行爲若くは議論を以て總督を補佐す」ることに定めたのである。其後一七四九年即ち會社の衰退期に入つてから、聯邦議會其他の壓迫に依つて、和蘭王ウキルヘルム四世に「會社總裁」なる地位が贈られるまで大體右の制度が維持されたのである。之に依つて明かなる如く、東印度會社は目的は商業獨占に在つたにしても、之を確保し發展させるに必要な一切の權力を把握し、事實上東印度の統治者たるものであつた。これは當時の事情からみて大體に於て無理からぬことでは、何分にも本國との距離遠く航海に多大の日子を要したのであるから、到底本國側から細かい指揮など出来るものではない。加ふるに東洋貿易は文字通りの商戦で、和蘭東印度會社は幾度も英人その他と現地に於て戰闘を交へざるを得なかつたのである。就中、現今の首都バタヴィアの建設者たるクーンの如き、或は陸に英人士人の聯合軍と戦ひ、或は海上に英國艦隊を撃破する等大童の奮闘をしたものである。

私はこゝで和蘭東印度會社興亡史を述べる心算はないが、一六〇二年に於ける創立から一七九八年の解散に至るまで二百年間に涉つて會社が行つて來たことは、蘭印經濟の性格に決定的な影響を及ぼしてゐることは間違ひない

ので、その點を多少明にして置く必要があると思ふ。

第二節 原始蓄積

繰返す迄もなく第十六、第十七の兩世紀は商人資本主義が歐洲に榮えた時代であり、和蘭は之が指導者たるの觀を呈し、當時の後進國たる英國の如きは専ら和蘭經濟の行きかたを真似してゐたのであつた。和蘭東印度會社は一〇〇%にかゝる時代の子たる性格を持ち、その性格より發する政策によつて、亦、蘭印經濟の性格をも決定したのである。

和蘭東印度會社は獨占商事會社であり、その資本は獨占商人資本である。だから會社の政策は總てこの立場から割出されてゐるのであり、之を理解するにも、この立場から眺めねばならない。

東印度會社の業務は、要するに東印度の産物を買集めて之を歐洲市場で賣捌くにあつた。たゞこの「貨物を買集める」爲めに種々な強權的方法が採られたのである。その方法は大體に於て土侯から「協定」に基いて一定量の生産物を一定の値段で交附を受けたのであるが、その「協定」なるものが本來の自由なる協定ではなくて多くの場合「強制」であつた。例へば「一定量」は屢々一方的に決定されたのみでなく、それを供給する爲めに必要な栽培が強制された。或は反對に、生産過剰と見れば容赦なく生産制限が強行された。引渡の値段にしても會社が自己の意

思で定めた値段であつた。併し之を實施するに當つては、會社は出来るだけ土民一般との直接折衝を避けて土侯等の支配階級とのみ接觸し、彼等を通じて會社の政策を實施するといふ方法を選んだ。引渡數量の強制や値段の強制にしても、直接には之は土侯や酋長等に向つて爲され、これによつて土侯や酋長等が土人に強制するといふやり方であつた。勿論これは一種の煙幕であるが、同時に、商業資本たる性格上、自ら生産行程を擔當する方向には進み得なかつたからでもある、であるから、その「搾取」は幾段もの中間搾取階級を通じて行れたのであるが、中間階級自らも相當なもので、一、二の例を御目にかけよう。

これは珈琲の例であるが、一七六四年に船積の場合一ピクルは一二六封度と定められた。ところが買付の際の一ピクルは一四〇封度であり、その後、地方の倉庫からバタヴィア迄の輸送中の損失や乾燥見込として六封度が認められたから、結局、最初の買付と船積とでは一ピクル毎に二十封度の差があつて之が大體、會社々員の役得となる而も一七九七年には前記の六封度は一舉に十四封度引上げられて二十封度になつた。然るに耕作者に對する賠償は十四封度あればいゝのであるから、何のことはない、會社はロハで珈琲を捲上げることになつた譯である。本家がこの有様であるからレヘント（州理事官）も之に倣ひ一ピクルを二七〇封度と定めた。その結局、一二六封度輸出される毎に、土人は二七〇封度引渡さねばならない。そして受取る代價は十四封度分の價格に過ぎない。よくもこゝまでやつたものだと思れるよりも寧ろ感心したくなるくらいのものである。併し何もこれは和蘭資本だけのことではない。英國東印度會社にしても同じことだ。南米へ奴隸を送る爲めに、投縄を以て文字通りの「土人狩」をア

フリカでやつたのも當時の「資本」である。之を目して歐米諸國の罪惡などといふが、成程罪惡には違ひないが、凡そ資本といふのは、大なり小なりかゝる性格を有するものである。時代が進めば遣方は巧妙になつて行くから表面には現れないが、「資本」たる限りその根本的性格に變化があらう筈はない。闇取引などはまだ可愛いゝみたいなものである。公益優先では手緩いから公益一貫で行けなどいふ議論が今日現れて來た所以も之であらう。話が横道にそれたが前述の珈琲などはまだいゝ方で、アムボイナに於ける丁香の栽培に至つては更にひどい。一六五六年に十二萬本の追加植付が強制され五八年には更に六萬本の増加が強制されたが、九二年と九七年には反對に伐倒されて了つた。

之等はほんの一二の例だが、かうした亂暴な強奪經濟が永續し得る筈はないので、東印度會社の没落は當然の事であるが、併し同社の没落が單にこの點にのみあると考へるならばそれは非常な誤りである。寧ろ上述のことなどは末節的理由で根本は別にあるものと見ねばならない。

それは時代の轉換である、とだけでは漠然としてゐるが、つまり歐洲に於ける「産業革命」の進行である。會社閉幕の二十餘年前、即ち一七七六年に政治的自由主義の最初の一大警鐘として、アメリカの「獨立宣言」が現れてゐる。又同じ年に經濟的自由主義の聖書アダム・スミスの「富國論」が出版され一舉に歐洲の紙價を高からしめたものである。のみならず、産業革命の根本動力となつたジェームス・ワットの蒸氣機關も、亦、實にこの年に完成されてゐる。一七九八年は佛蘭西大革命の年である。澎湃として湧起つた自由主義のかゝる怒濤の中に昔ながらの

「獨占商業」を生命とする會社が存続し得べき理由はないのである。

かゝる激しい收取の下にあつても、蘭印特に爪哇は或程度の經濟的進歩を示した。人口も増加し、砂糖や藍の生産も行れた。彼等に珈琲の生産を教えたのも和蘭人であつた。蘭印全體として、最初最も注目された香料諸島の生産物は第十八世紀には最早重要な地位を占めて居らず、胡椒はまだ相當の輸出を見てゐたが、既に第一の輸出品は珈琲であつた。爪哇からは可成りの量の砂糖と藍が輸出され、外領からはカツチ(註)が輸出された。支那茶の輸出も大きかつた。

(註)單寧原料にして阿仙藥ともいふ。

之に對して輸入の方はコロンデルから布が、支那からは陶器が入つて來た。歐洲品の輸入は東印度會社の獨占であつたが、これは主として東印度會社及會社關係の在留歐洲人の需要に應ずるもので、帆布、ロープ、家具、靴酒などで、船舶の數も少い故もあつたが、いづれにしても大したものではなく、土人市場は全く問題にされなかつた。

併しこの様な「發展」は蘭印經濟に幾多の變化な齎らした。この中でも大きな變化は米作農業が輸出農業から内需農業へ轉換したことである。轉換といふよりは顛落と云つた方がいゝであらうが、東印度會社の行つた作物の強制引渡し強制栽培によつて、從來、米作に向けられてゐた土地と勞力の大きな部分が會社の要求する作物の栽培に向けられるに至つたからである。之に伴つて米作を基礎とした社會關係が急速な弛緩と變化とを示し始めた。從來、

土侯は直接の搾取者として専制権を振つてゐたのであるが、一度和蘭人の勢力下に置かれるや、忽ちにして中間搾取者に低落して専制権を喪失したけれども、土着民に對する暴威といふ點では却つて増大したかの觀があつた。成程、土侯は從來と雖も専制者であり、その意思は直ちに法律であつたけれども、同時にその勢力は自己に從屬する土民の「力」に依存するものであり、その限りに於て之に制約されてゐた。ところが會社の勢力が侵入するに及んで、土侯の勢力は會社の意向に押され、内部に於ては、土民の生産そのものが會社との「契約」によつて會社に支配される様になつた爲め、内的な地盤を失ひ、こゝに土民と土侯との社會的紐帶は、全然絶たれるには至らなかつたが、大いに弛緩し、封建的諸關係は著るしく改變されざるを得なかつたのである。一言にして云へば、封建的農業關係を基礎とした封建社會は、強制輸出農業を賦課された植民地農業社會へと變つて行つたのである。今日蘭領印度が農業國だといふ意味は、かく解されなければならぬ。

第四章 農業現勢と農業資本

第一節 現 勢

灼熱の太陽と豊かな雨とに恵まれ、而も暴風の無い蘭領印度は何よりも栽培業に適した國である。有名な砂糖やゴムは勿論のこととして、煙草、コーヒー、茶の如きサロンに缺く可からざるものを始めとして、主要食料たる米を産する。勿論所謂「外米」だが、當今吾々の憎惡の的となつてゐる不味い「外米」ではない。爪哇の米はもつと美味しい。あれは佛印やビルマ邊の下級米だ。大豆、サツマ薯にジャガ薯も豊かに産する。「代用食」にも恵まれてゐる譯だ。ジャガ薯はジャガタラ薯のことだが、ジャガタラとは現今の首都バタビア附近一帯の地名である。私の母などは「おジャガ」と稱して馬鈴薯などとは云はなかつた。牧野富太郎博士のお話によると、馬鈴薯は支那のものでジャガ薯とは全然別のものだそうである。子供の時から馴染の落花生と肉桂も産する。つまりナンキンマ

メとニツキだ。嚼るとピリツと舌に來てほのかに甘いニツキの味は、少年時代への郷愁を感じさせる。矢張り澱粉の一種であるタピオカも産する。夏向きの嗜好品で、三越の食堂にもあつたが、最近はどうであらうか？ 枕や蒲團に入れるパンヤ、綿其他の繊維、油椰子、コ、椰子、アイスクリームや曹達水の味付にするヴァニラ、それから肉荳蔻（ニクヅク）其他の香料、單寧を含むガムビル、サゴ、マラリヤの特效薬キナ等々數へれば實に多い。

之等を生産する栽培經營は農園農業と土人農業とに二大別される。農園農業は巨額の資本を以て經營される資本主義的農業であり、ゴム、茶、砂糖、規那等の世界商品を生産する。従つて生産物はいづれも輸出が主眼である。之に對し土人農業は自家消費又は内需を第一とし、幼稚な生産技術に立つ小規模な封建的農業である。然るに近年の傾向として土人農業の或部門が次第に輸出と結付いて來た。特に之はゴムに於て著るしいが、敢てゴムと限らない。コブラや落花生の如きも左様である。現在の農業輸出に於ける農園生産物と土人生産物との金額を比較すると爪哇では四九對一二、外領では一四對三七、蘭印全體では六三對三七でエステート農業が優勢であるが、連年の數字に現れたところを見ると、爪哇では土人農業生産額の%が漸増し、外領では反對にエステート農業生産額の%が殖えてゐる。これは爪哇では人口が稠密な結果、可耕地面積が相對的に減少して地價が高い。然るに外領では人口稀薄の結果地價が安く、従つて大經營に適するからである。處で蘭印の農業とか農産資源とかいふ場合、問題になるのは殆んど農園輸出生産物に限られる。蘭印は多額の國際投資を受けてゐる關係上、國際收支から見て輸出は蘭印經濟の生命であるが、その輸出の六割は農産物であり、石油を除けば實に九割に達する。この一事からでも蘭印

經濟に對する輸出農業の重要性を看取出來るが、蘭印國民六千數百萬の經濟生活からみれば、之を養つて行く内需農業の意義を輕視することは許されない。更にその社會生活に思ひを廻らせば土着人の文化なり習俗なりは、彼等の生産生活即ち土着人農業に深く根を下してゐる。かゝる意味から云つて、土着人農業はもつと重要視されていゝのである。例へば原始生産に従事してゐる人口の中、爪哇及マドラでは八三・八%、外領では八五・九%が内需向農業に従ひ、砂糖其他のエステート農業に働くものは夫々一〇・二%及八・一%に過ぎない。一九三〇年同じく爪哇及マドラに於ける土着人の農耕地面積は八、〇一七、三〇〇ヘクタール即ち約八百萬ヘクタールであるが、農園農業の面積は一、二七八、八〇〇ヘクタールであるから、前者は六倍半に當つてゐる。（一九三八年）
如上の意味で先づ土人農業から書かうと思ふが（ゴムのみは農園ゴムの個所に併記す）、その前に、一言土地制度に觸れて置かねばならぬ。

第一項 土地制度

資本が農業に投下されるに當つて、第一に考慮されることは、使用土地に對し如何なる支配權を確保し得るかであらう。依つて先づこの問題を簡單に述べて置く。

元來、インドネシアの地權に關する思想は一つの傳説に基いてゐる。昔、男も女も定住の地を得んが爲め叢森に往き、そこを耕して自分の耕地としたといふ。これよりして、他人の耕してゐない土地は何人と雖も之を耕す權利

があるといふ觀念が發達した。これから生じたものが土地の「使用權」である。これは土地の一時的利用權であり、更に永續的利用に關しては「所有權」が發生する。尤もこの所有權なるものは複雑な慣習上の制限が多く、西歐の意味に於ける所有權とは著るしく異なる。この所有權は土侯の領有地に於ては「耕作權」として現れる。これは「所有權」は土侯に存するからである。その外に「處分權」があるが、これは基本社會（それ／＼の土地の風習に依り、或は種屬的共同體たることもあり、或は地域的共同體たることもある）のみが有するものである。基本社會又は共同體の領有地は家族の所有をも包含するもので、大體之を三つに分けてゐる。

- 一、何人も耕してゐない原始森林は之を豫備地とする
- 二、嘗ては何人かゞ耕作したけれど、その後放棄された土地
- 三、現に利用され、耕作され人が住んでゐる土地

之等の權利は原則として家長が代表する家族に屬するが、豫備地の管理は利益社會に依つて共同的に行はれてゐる。例へば狩獵をする爲めとか、或は薪を獲る爲めとかのものである、かゝる土地に關しては共同體が「土人所分權」を有してゐる。

「土人所有權」は前記第三の土地に關し存在するが、それは一家族に屬することもあれば村落共同體に屬することもある。例を挙げればスマトラのメナンカバウ族では家族に屬し、爪哇では地域的な村落共同體(Desa)、ボルネオではダヤク族の種屬的な村落共同體に屬する。極く大體を述べれば右の様になるが、實際は其土地／＼に依つて



上 爪哇娘の稻刈姿

下 マラバル高原の茶摘女





右 コーヒーの花

左 スマトラのデリー煙草の葉



右 爪哇規那の母樹

左 油椰子



農具五種



くわ

さらえ



まぐわ

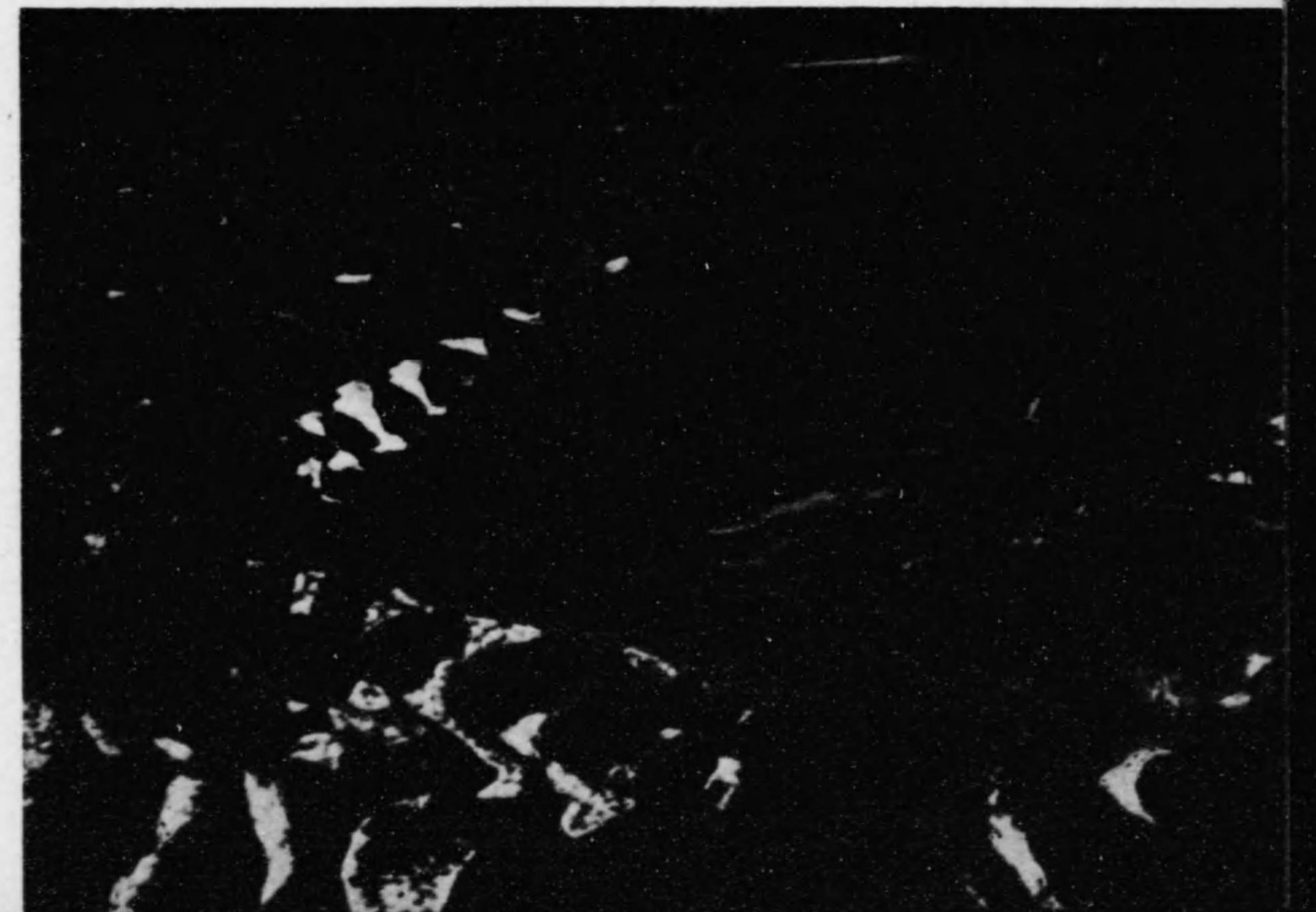


杵

下階段式米田



臼





金銀細工四態

習慣や歴史的事情の差に依つて非常に複雑になつて居る。

之に對し歐洲人の土地所有權は東印度會社によつて一部の人々に附與されたるに始り、次いで東印度會社の衰滅後、ダンデル總督が始めて廣大なる土地を拂下げたので、私有地面積は著るしく擴大した。更にドウ・ブス總督の時代に入つて二十五ヶ年期限で政府所有地を借地することを認めた。然るに次の總督が強制栽培で有名となつたフアン・デン・ポツシュであつた爲め「生産主義は民間企業者に土地を與へる方針とは兩立せず」との理由によつて、一切の土地貸與は廢止されて了つた。

然るにポツシュの退陣と自由主義の擡頭とは再び土地問題を前面に押出すと共に、一八六〇年には二十ヶ年期限で未墾地を歐洲移民に貸與することゝなつた。而して十年後の一八七〇年土地法と呼ばれる法令の發布によつて土地問題は初めて原則的解決を得たのである。印度統治令第六十二條は左の如く規定してゐる。

總督は何れの地たるを問はず之を賣拂ふ事を得ず。

但しこの禁止中には都市及村落擴張の爲め並に工業上の施設建設の爲に使用する小地所を包含せず。

總督は一般法令に依りて定めらるべき規定に準據して土地を貸付の爲下附することを得べし、但し之等の土地の中には土人の開墾せる若くは共同牧場又は其他の名儀を以て村落に屬する土地を包含せず。

總督は一般法令を以て定むべき規則に準據し七十五年を超過せざる期間の永租借 (Fis-pacht) として土地を下附することを得べし。總督は土地の下附が必ず土人の權利を損傷せざる様配慮すべし。總督は自家用の爲土人の開墾

せる土地若くは共同牧場として又は其他の名義を以て村落に屬する土地に付ては第七十七條に基き公益の爲及當該規定に據る官營栽培の爲にして且相當の賠償を爲したる後に非れば之を處分することを得ず。

土人が世襲個人使用地として占用する土地は適法なる占有者の請願に基き國家及地方團體に對する義務並に非土人に對する賣却の權能に關し一般命令を以て定められ及名義證書に記入せらるべき必要なる制限の下に之に所有權を下附す。土人の非土人に對する土地の賃貸 (Verhuur) 又は使用許容 (Ingebruik-govins) は一般法令を以て定めらるべき規則に準據して行はるべし、この印度統治令第六十二條は自治領主と政府との政治協約と共に、土地に關する蘭印法規の根源を爲すものである。右の印度統治令第六十二條中、重要な事項は七十五年期限の永租借を認めたること、土人の非土人に對する土地の賃貸又は使用許容を制限したることである。

この統治令に基いて一八七〇年に爪哇の直轄地に對し土地法 (Agrarisch Postuif) が制定された。

元來、和蘭人は蘭印に於ては商業上の關心は有したけれども領土的關心は持つてゐなかつたので、土侯に對する關係は二つの主權者間の關係として、相互條約を締結したものであるが、蘭印に對する和蘭の關心が昂るにつれて條約は發達して聯合となり同盟となつた。其後和蘭人が内部行政に干渉するにつれて、和蘭と同盟關係に在る土侯は次第に獨立性を喪失して所謂「大名」の地位に近づいて行き、遂に自治領に於ける土人理事官として蘭印行政機構の中に編入されて了つた。之に對して、和蘭主權を承認しなかつた土侯の土地は漸次に征服され所謂直轄地となつた。この周知の歴史的事實は今日の蘭印土地制度の一つの基礎となつてゐる。自治領に於ては所謂農業租借地

(Landbouw-Concessien) なる名稱の下にレヘントが土地を賃與したのであるが、一九一五年の國王令に依つて農業租借地の賃與が禁ぜられた爲め、其後は自治領に於ても直轄地に於ても、永租借 (Perpetuif) の形式に於てのみ土地を借受 (Huurgrond) けることが出来る様になつた。

如上の制度を通觀するに、所有權の證明されない土地は總て之を國有と定め、土地國有主義の原則を立て、他面私有地は年々之を買い上げる方法を探つてこの原則を現實化するに努めてゐる。従つて蘭領印度には所謂土地兼併の事實が無いし、地主階級の發達といふことも無い。現在殘存してゐる小許の例外を除けば少くともエステートたる土地は一定年限の後に政府に返還せねばならぬ。租借の繼續は許されるから、エステートの經營には支障ないとしても、社會經濟殊に私有財産權發展の見地から見る場合、之が蘭印の社會及經濟の上に重大な意義を有する事は云ふまでもあるまい。

右の如き土地制度を基礎として、現實の土地の分配状態はどうかといふに、不幸にして爪哇及マドラに關する以外は總括的な統計が見當らないから、こゝではこの地域に就いてだけ述べることにする。爪哇の土地を三種に大別して面積を示すと左記の如くなる。

甲、土人農業地及漁業用地
乙、農園用地
丙、官有山林

八、〇一七、三〇〇ヘクタール
一、二七八、八〇〇
三、〇九三、四〇〇

丁、用途別に分類し得ざる土地
夫々の内譯概要を示せば

一三、二一七、四〇〇ヘクタール

五八

(甲)

A、土人農業地

- 一、永続的使用
- 二、一時的使用
- 三、バンナム州に於けるフマブロック

七、八八二、三〇〇
一七、六〇〇
一一七、四〇〇
八、〇一七、三〇〇

計

一時的に農園に譲れるもの

一〇四、〇〇〇

(イ) 借地令に基き一九三九年に農園に賃貸せるもの

三一、七〇〇

(ロ) 一九三九年に於て土人州で農園の使用せるもの

一三五、七〇〇

計

一、一四三、一〇〇

一、永続的に農園用地たるもの

二、永続的に使用せざるもの

三、土人に譲れるもの

(丙) 官有森林

土人の使用せるもの

(丁) 用途別にし得ざる土地(建築物敷地、都市、市場、河川、湖沼、道路等々)

一、〇〇五、七〇〇

一、一四三、一〇〇
一三五、七〇〇
二七三、一〇〇
三、〇九〇、九〇〇
二、五〇〇
一、〇〇五、七〇〇

地理的面積

一三、二一七、四〇〇

第二項 土人農業

土人の農業は米を第一とし、玉蜀黍、落花生、ジャガ薯、甘藷、カツサバ、大豆等の食料農産物、煙草、茶、など嗜好品、或はカボック、椰子等を産する。土人の耕地面積は爪哇及マドラのみで七百八十九萬ヘクタールを超えてゐる。外領の分はバリ島及ロムボック島(兩者計で五十二萬八千七百ヘクタール)のみ知られてゐるが、その他は不明である。外領は土地廣く人少くして焼畑農業が行れてゐる程であるから、之を確定し難いのである。

	灌溉米田	非灌溉農地
西部 爪哇	一、一三六、〇六二ヘクタール	一、二八一、九九二ヘクタール
中部 爪哇	八六五、〇九六	一、〇五二、九〇九
シヨクジャカルタ	六四、六五一	二一三、五一八
スラカルタ	一九〇、一四一	二六三、五六九
東部 爪哇	一、一二一、三三四	一、七一〇、六三三
爪哇及マドラ計	三、三七七、三三四	四、五二二、六二一
總計	七、八九九、九一五	

之を作物の種類別耕作面積からみると

穀物
球莖植物

六、〇五七、六二四ヘクタール
一、三二三、〇五七

第四章 農業現勢と農業資本

五九

年度	穀	(陸稲)	玉蜀黍	計	サカ バツ	甘 藷	ガシ 薯ヤ	「其他 」の	計
1939	3,652,968	375,047	2,029,609	6,057,624	992,452	197,323	7,818	125,464	1,323,057
1933	3,571,066	388,983	2,006,085	5,966,134	948,123	184,095	7,643	122,016	1,261,877
1937	3,475,823	391,212	2,069,055	5,936,090	949,693	180,976	10,532	120,538	1,261,739
1936	3,475,341	397,762	2,229,227	6,102,330	869,614	206,340	13,003	120,795	1,209,752
1935	3,395,671	387,013	2,087,811	5,870,495	788,698	205,014	12,552	119,983	1,126,247
1934	3,333,125	392,471	1,848,209	5,578,806	763,848	163,156	14,311	110,110	1,051,425
1933	3,323,585	454,340	2,204,471	5,922,396	700,685	159,846	15,009	104,828	980,368
1932	3,262,649	427,340	2,001,509	5,691,498	717,217	145,059	20,377	106,292	988,945
1931	3,072,688	439,996	1,962,157	5,474,841	699,413	142,518	15,459	97,750	955,104
1930	3,122,735	436,376	2,025,032	5,584,137	653,322	160,220	15,523	100,046	929,105
1929	3,019,980	403,419	1,726,622	5,150,021	715,031	132,016	16,496	97,684	961,227
1928	3,094,217	431,941	1,885,987	5,421,145	744,169	150,157	18,380	98,090	1,010,796
1929 ヨリ	3,305,766	411,891	2,016,018	5,733,675	780,564	167,924	14,085	110,009	1,072,582
平均									

落花生	大豆	豆其 類他	計	煙土 草人	人其他 物土	面總 收穫
240,584	414,563	206,488	861,599	139,267	557,324	8,938,871
261,688	379,518	195,589	836,795	146,935	555,979	8,767,620
234,845	353,357	210,195	798,397	150,180	556,248	8,702,654
224,585	343,432	216,344	784,361	131,308	550,390	8,778,141
195,172	306,873	234,379	736,424	147,295	523,147	8,403,608
207,864	271,332	228,103	707,299	167,612	506,213	8,011,356
218,053	280,495	226,557	725,105	129,757	493,552	8,311,178
214,460	237,931	221,289	673,680	141,616	495,779	7,991,518
192,684	193,557	225,640	611,881	171,819	473,657	7,687,338
224,614	207,563	220,278	652,455	149,680	496,345	7,811,722
213,654	186,226	197,243	597,123	146,481	462,249	7,317,101
228,741	204,501	218,867	652,109	176,739	476,739	7,728,528
215,467	258,527	219,889	693,883	151,249	503,432	8,074,314

更に詳細なる数字を挙げれば(単位ヘクタール)

計
其他土人農作物
煙草
豆科植物

八、九三八、八七一
五五七、三二四
一三九、二六七
八六一、五九九

之が生産高は次の如くである。(單位十萬疔)

年度	籾(水稻)	籾(陸稻)	玉蜀黍	パカッサ根	甘藷	落花生	大豆
1939	79,148	4,458	19,852	83,113	12,676	1,815	3,176
1938	78,661	4,771	19,259	81,488	12,060	2,018	2,876
1937	74,470	4,419	20,369	76,347	11,823	1,807	2,689
1936	74,761	5,093	22,230	74,808	13,166	1,666	2,474
1935	72,258	4,527	19,892	63,431	13,596	1,436	2,027
1934	66,237	4,622	17,197	57,935	10,688	1,494	1,754
1933	70,074	5,253	21,268	58,313	11,420	1,608	1,815
1932	68,844	5,433	19,023	62,220	9,578	1,615	1,490
1931	64,826	5,320	19,308	59,256	9,660	1,421	1,285
1930	67,256	5,799	20,219	52,290	11,021	1,660	1,278
1929	62,763	4,849	15,849	51,468	9,256	1,567	1,066
1928	64,385	5,282	19,582	61,845	10,087	1,633	1,171
1929 ヨリ 1937 平均	70,015	5,009	19,459	63,758	11,227	1,627	1,875

(註) (Indisch Verslag 1940)

(4) 米

前述した如く土人農業の王座を占めるものと云へば米作である、或地方で二年に五回收穫を見たこともあるが、それは例外で、雨に恵まれた西部爪哇の水田では年二回の收穫があるが、其他では概ね一回である。十月から十一月に植付け、西季節風の間に育つて四ヶ月乃至六ヶ月で收穫する。栽培法としては水田と陸稻だ。水田耕作は直接に種穀を田に蒔くのもあるが、多くは日本のやり方と大同小異で苗代を作つて之に種穀を蒔き、後に苗を植付ける耕耘の技術も水牛に鋤を牽かせて行くので、水牛と牛との違ひはあるが、日本の田園風景に似た風景が爪哇の水田地方にも展開される。ところが陸稻の方は全く違ふ。尤も、デカに種穀を土に埋める點はもち米の栽培と同じだが、一口に云へば焼畑法(Ladang)を用ひてゐる。森林の一部を切倒して焼き雨期に臨んで種を蒔き、草取り以外は收穫時まで何等手をかけない。一般に土人農業は人造肥料を使はないが、草を植えることはある。焼畑法ではそれも行ふ必要がない。新しく切拓いた土地には自然の肥料が自ら豊かであるからである。經濟的なこと此上なしであるが、幾年も續けてゐる譯に行かない。精々三年位のもので、従つて別の場所へ移轉して從來のものは數年放置して再び草木が繁茂するまで使用出来ない。資本も勞力も非常に僅かしかかゝらないが、土地に餘程の餘裕がないと出来ない。グレッツフェルの言葉で云へば土地集約的耕作(Bodenintensive Landbau)である。外領では土地が廣く人口が少ないので、多くこの方法が用ゐられるが、人口稠密な爪哇では殆んど水田(Sawah)栽培である。

Sawah と Ladang を比べると後者は著るしく粗放農業であり、反當り收穫高も大差がある。平均して水田の方

は概にして一ヘクタール當り二千一百疔を超えるが、Iadangでは一千二百三十疔程度で、半分でもないが六割に足りない。土地に餘裕の多い外領では Iadang が一般に行れてゐるが、人口稠密な爪哇では Sawah が多く既に一八七四年に許可なくして Iadang を行ふことを禁じると共に、その反面に灌漑事業が進められた。

何分にも土人農業關係の統計は爪哇及マドラに關するものを除けば甚だ乏しいので、精しく書けなかつたが、元來米は爪哇及マドラが主産地であるから、以上の叙述に依つて米作が土人農業の王座に位することは了解出来ると思ふ。それならば蘭印は米に困らないかといふと、さうでない。一九三八年度白米輸入數量三三四、二〇六千疔、粳、白米、碎米及米粉輸出が五〇、〇七九千疔、差引輸入量は二八四、一二七千疔ばかりである。同じく一九三九年度は輸入二七八、一八四千疔、輸出五〇、五一〇千疔、差引輸入量二二七、六七四千疔である。この點で蘭印の米作は佛印やタイの米作とは趣を異にする。兩地共米は主要な輸出品でいづれも全輸出の五割に及び、佛印にはエステート米田もある有様である。従つて米作が蘭印土人經濟に對し非常な重要性があることは論ないが、佛印やタイの米作に比べれば、重要さの程度と意味とに違ひがあることを注意して置かねばならない。

(ロ) 玉蜀黍とカツサバ

代用食の一流に位するものが玉蜀黍とカツサバであり、之に次ぐものが「いも」類、「豆類」であることは前掲統計に現れた通りであるが、有難いことには蘭印では之が豊富で、ジャガイモは五百目しか賣らないとか、大豆は概ね品切れなどといふことは無い。

玉蜀黍は爪哇では水田米作の裏作として作られてゐるが、スマトラのカロバタク地方では陸稻米作の前作となつてゐる。爪哇の産額其他は右記の通りである。

外領では前記スマトラのカロバタク地方以外にセレベスに多く、大量をモルツケン群島に輸出してゐる。バリ及ロムボックには約六萬ヘクタールほど玉蜀黍が耕作されてゐる。

カツサバは爪哇の土着人耕地の一割に及ぶ廣さに作られてゐる。その根をとつて澱粉を作る。カツサバでは知る人も極く稀であらうが、タピオカと云へば「あゝあれか」と首肯される方も少くあるまい。アメリカ人は丸い小さい半透明な形から Fish-eye pudding と呼んでゐる。併し商業的に販賣されるカツサバ粉が盡く「魚の眼のプディング」になるのではなく、むしろ糊になつたり、壁紙の光澤付けになる方が多い。カツサバは畑に挿枝で栽培され七ヶ月乃至九ヶ月で根を採取することが出来る。爪哇と異り外領ではカツサバ栽培は比較的重要な役割を演じて居らぬ。カツサバを處理してタピオカ粉を作る作業は土人が家庭工業としてもやつてゐるが、支那人の經營する小工場が數多くある。歐人經營の工場でも行れてゐる。これは近代的工場組織である。

(ハ) 薯 と 豆

甘藷||甘藷の説明は不要であらう。蘭印では多くは米の裏作として水田で耕作される。土人の重要な副食物ではあるが、カツサバ根の様に永持ちがしないので主要食料とはならない。

ジャガ薯||説明無用の點ではジャガ薯も同様であるが蘭印での耕作は比較的に新しい。これは歐洲人が輸入した

ものであるが、その爲めに値段が高いので生産が刺戟され一千メートル乃至二千メートルの高地で栽培されてゐる。暑い海岸近くでは異常に成長してつて根が張らないから、折角作つても「イモ」のないジャガイモでは意味が無いことになる。土人は一般的にはジャガ薯を喰べないが、テンゲル人（東部爪哇のプロボリンゴのモンゲル高地住民）は之を茹でて潰して玉蜀黍と混ぜて食べる。更にパプア人の中では主要食料となつてゐる。

落花生Ⅱ「落花生」といふよりも、ピーナツツと呼んだ方が通りがいかも知れないが、チェリーが「櫻」となり、ゴールデンバットがどういふわけか蝙蝠から勿體なくも「金鵝」に昇格する御時世だから、矢張り元の通り落花生と日本語で呼んだ方が新體制的であらう。地に落ちて埋れた花から實る面白い生立ちをもよく表してゐるではないか。これも、亦、主要土人作物の一である。多く水稻收穫後の田で栽培されるが、スマトラのアチエに於ては反對に畑に植えられ水田で作られることは甚だ稀である。屢々ココ椰子栽培地に植えられ、又、ヘヴィア栽培地設定前に一二度栽培される。セレベスではボネ及ソベンの一部にあるが重要なものではない。

大豆Ⅱ大豆も亦落花生と同様に多くは水稻の裏作として作られる。三四ヶ月の短期間で成育する。年産二億疋に及びヘクタール當り收穫も漸増して六百六十疋に達してゐるが、滿洲大豆のヘクタール當り二千疋に比すれば遙かに下位に在る。爪哇に於ける收穫面積は僅かに三十萬ヘクタールを超えたにすぎず、而もその六割以上が東部爪哇に在る状態からみて面積擴張の餘地は多いと見られてゐる。外領では大したことはない。

上述した重要食料農産物の生産高がどの程度に國內消費を満してゐるかは、内需農業にとつて必要の問題である。

年によつて豊凶があるので一、二年の短い年月では何とも云へないから一九二一年以降の數字を掲げて大勢を示すことゝしたい。

年	國內需要に對する生産高 (%)						
	米	玉蜀黍	カツサハ	甘藷	ジャガ薯	落花生	大豆
一九二一	八二・五	九九・九	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇三・三	一一二・九	五・九
一九二二	八九・五	一〇〇・六	一〇〇・一	一〇〇・〇	一〇一・〇	一〇九・三	四三・七
一九二三	九〇・〇	一〇一・三	一〇四・四	一〇〇・〇	一〇一・七	一一三・〇	四七・六
一九二四	九四・三	一〇〇・五	一〇四・四	一〇〇・〇	一〇三・三	一一二・九	五三・四
一九二五	九四・一	一〇〇・六	一〇八・八	一〇〇・〇	一〇三・八	一一六・八	五六・六
一九二六	九三・三	一〇一・四	一〇七・九	一〇〇・〇	一〇三・八	一一三・五	五三・四
一九二七	九二・二	一〇一・〇	一一一・四	一〇〇・〇	一〇三・八	一一九・八	五四・三
一九二八	九二・八	一〇四・四	一一九・一	一〇〇・〇	一〇三・〇	一二〇・〇	五四・九
一九二九	九一・一	一〇四・四	一二六・五	一〇〇・〇	一〇三・〇	一二七・八	五四・九
一九三〇	九〇・三	一〇四・三	一〇四・四	一〇〇・〇	一〇一・八	一二七・七	五四・七
一九三一	九〇・〇	一〇四・四	一〇九・八	一〇〇・〇	一〇一・四	一二〇・九	五四・八
一九三二	九〇・三	一〇六・二	一一〇・一	一〇〇・〇	一〇一・八	一二八・四	七三・三
一九三三	九〇・九	一〇〇・〇	一〇四・四	一〇〇・〇	一〇一・七	一二五・五	七三・九
一九三四	九二・三	一〇一・六	一〇四・一	一〇〇・〇	一〇一・四	一二六・三	八七・九

一九三五	pp-r	10li-iii	10p-iii	100.0	101.0	119.8	99.4
一九三六	10li-p	10k-p	11i-r	100.0	102.4	121.1	101.4

(Netherlands Indies, July August, 1937)

(二) 煙草

蘭印の土人は實に煙草を喫ふ。いかに未成年禁煙法が無いとは云へ、小供まで喫つてゐる。かうした姿は洵に異様に見えると共に従來の所謂「植民政策」への強い反省を促がされる。併し兎に角、廣汎な需要があるから、土人産業としての土人煙草栽培は重要な地位を占めるものである。

土人煙草は Native cut とクロソク又はリーフ煙草に大別される。Native cut は全く國內用で葉の厚い黒ずんだ色をした相當に強い煙草で嚼煙草又は土人用シガレットとして用ゐられる。クロソク又は葉煙草は輸出用である兩者は煙草の種類も違ふが、又 Native cut 用に栽培したのもでも、下葉は薄くて色もうすく、雨の多い年には中葉も同様になるので、之等は Native cut に使へない代りに、クロソクにはいゝ。特に雨の多い時のものは好適である。

煙草は水田でも畑でも耕作されるが、面積からみると後者の方が五割方多い。爪哇及マドラの土人煙草は大部分が、Native Cut でクロソクは副産物となつてゐるが、ブスキ及マランではクロソクを多く産する。大體、爪哇の煙草栽培は西から東へ行くに従つて熾なのであるが、これは土壤と氣候の關係によるもので、概して云へば西部爪

哇では水稻耕作が廣く行れ、所謂裏作の重要性は比較的に少いが、中部爪哇及び特に東部爪哇に於ては裏作が非常に重要なところから、煙草栽培も盛に行れる譯である。ケヅー及ボジョネゴロは Native Cut の産地として最も重要なところである。爪哇の一九三九年の生産高は六萬二千七百米突噸である。

土人煙草ニ關スル統計

年次	水田		畑		栽培面積計 (ヘクタール)	生産高 (メートル噸)	輸出高	國內工場へ (直接消費)
	面積 (ヘクタール)	全栽培面積 ニ對スル%	面積 (ヘクタール)	全栽培面積 ニ對スル%				
一九三九	50,150	35.0	89,114	60.0	139,264	26,700	—	—
一九三八	53,603	35.5	93,333	64.5	146,936	26,100	3,300	3,450
一九三七	60,133	40.0	90,636	60.0	150,769	27,200	16,570	30,500
一九三六	51,911	39.1	80,018	60.9	131,929	25,100	12,191	19,800
一九三五	61,577	41.6	86,009	68.4	147,586	26,300	12,368	25,000
一九三四	55,577	39.1	91,053	60.9	146,630	25,800	12,777	22,500

上述したところは一年生植物の栽培だが、多年生植物の栽培に就いても、同じく生産の規模は小さく、自家用又は内國需要を主とし餘剰あれば輸出されるが、外領では或程度輸出目的に行はれてゐるものがある。多年生植物は米作の裏作に作るといふことが出来ぬ。従つて土地が狭く米作を中心とする爪哇では純營利的目的で栽培するには向かない。勢ひ土地の豊富な外領で行れることになる。

ところで土人栽培の多年生植物として最も注目すべきものはゴムであらう。それは何よりも輸出目的のもので、今後蘭印に大きなゴム工業が起らない限り内需を主とする様にはならぬ。従つて世界商品の性格を一〇〇%に持つてゐる。たとへばゴム工業が勃興したとしても、商品たるその性格に根本的變化は生じない。然るに生産の方法なり組織なりは甚だ幼稚である。そこで丁度吾國の養蠶業と同様に、世界商品を原始的な方法で生産するといふ矛盾は強く土人ゴム栽培にも感じられる。それだけならまだいゝが、同じく輸出商品でもコブラなどと違つて、元來がエリート農業が支配的な産物で、そこへ土人の方から喰込んで行つたものであるだけに内部的摩擦が強い。今後も益々強くなるであらう。

その現状に就いては、農園ゴムと比較する爲めに、本章後述の農園ゴムの處で述べることにしたい。

(木) 椰子

ゴムを別とすれば、第一に擧げるべきは椰子であらう。世間でも南洋と云へば椰子と南十字星がつきもので戀も椰子の葉蔭で囁かれることを必要とし、風景にしてもこれが無いと「南洋らしくない」と考へられる。又、實際、南洋には椰子が多い。併し椰子と一口に云ふがその種類は實に多く、世界中では千百餘種に上るといふ。巨大なもの、低いもの、刺のあるもの無いものなどいろいろだが、大きく分ければ葉が扇状になつてゐるものと羽状になつてゐるものと二種ある。實に無駄の無い植物で果實は食料になるし、油が採れるし、葉や幹は或は纖維を製し屋根葺の材料になる。椰子酒なども作れる。従つて土人の生活にピッタリ結びついてゐる植物である。さうした點から

云へばゴム樹などより遙に重要だと云へる。さりとて數多い椰子を一々述べる譯にも行かないから、その中でも重要なココ椰子、油椰子に就いて述べよう。

ココ椰子は凡そ土人の家でコ、椰子の無い家はないと云はれる位に廣く栽培されて居り、その意味で眞の國民的栽培物であると云つていゝ。一九一七年の調査だが、コ、椰子樹は爪哇に六千三百九十三萬本、外領に四千四百三十四萬本計一億八百二十七萬本となつてゐる。以てその普及振を推知することが出来よう。何に使ふかと云へば主としてコブラを作る。コブラとは果實の熟したものを採り、外皮を割つて中の仁を乾燥させたもので、これを壓搾して油を採るのであるが、六〇%以上もの油がとれる。これがコブラ油で、化粧用、人造バター、蠟燭、石鹼などに作られる。仁を細末にして乾かした干椰子は製菓原料になる。別にコ、ナツト油といふものがあるが、これはコ、椰子の生果を搾つたものでコブラ油よりは上等である。油粕は飼料及肥料になる。熟果の中には、二三合の液汁があるけれども不味で、却つて幼果の胚乳や汁の方が美味である。纖維は布に織られ、葉は編物となり、幹は柱や小舟を作る。肉穂花から採つた甘い汁を醗酵させたものが椰子油である。その他、根は收斂劑になるなど、實に用途の廣い植物である。

何分にも全國的に植えられてゐるし、自家用に供されることが多いから、コ、椰子の栽培面積やコブラ生産高統計など得らるべくもないが、土人が油を採るのに使用するコブラ量から推算すると、爪哇で十七八萬噸、外領で四十七、八萬噸であらう。そして輸出コブラの九四%——九五%は土人生産物である。

この小規模生産と輸出とを連結する流過程こそは原始的な形態の生産者が商業資本の搾取対象となる好個の實例である。輸出港又は製油工場と生産地との距離が遠い場合、生産者が個々に之を運搬する譯にゆかぬ。そこで之を買集める商人が現れる。日本の農村でも同じだが、この商人が同時に高利貸の役割を果すので、金を借りた土人はその生産したコブラを債権者に賣渡することになるのだが、この際に値を散々に叩かれる。いはゞ金で縛つて置く手である。併しこの商人自身も屢々更に上級の買付人に支配される。かくて生産者と輸出者又は製油業者との間に廣汎な中間搾取層が形成されてゐる。これの實權を握る者は支那人である。

併し生産者からの買取値段と製油業者又は輸出業者への賣渡値段の開きの大きいことが、總て「搾取」とは云ひ難いので、同時にコブラ取引がリスクの多いものであることを注意せねばならぬ。これは實の含油率が不同である爲めもあり、殊に土人が現金を手に入れた場合、充分に熟さない實を採取して賣るなどの事實があつて、その點からリスクが多くなるが、もつと大きな原因は採油原料として世界市場にコブラの占める地位が比較的低く、加ふるに蘭印は世界コブラ輸出の五分の二見當を占めるに過ぎないから、値段の決定に關しては全く受身の立場にあることである。領内消費の多い爪哇と然らざる外領とでは多少事情の違ひがあつて、世界市場價格の變動は外領の方により鋭敏に響くけれども爪哇とても無論その影響から免れるものでない。爲めに世界市場價格の變動は、迂回的ながら土人生産に傳播され生産形態と流通との矛盾が激しく起るのである。

コ、椰子生産物輸出高は之をコブラに換算すると五十六萬四千突噸餘であるが、その中土人生産は九四%に達

し、残り六%弱が農園生産物に過ぎない。生産物の大部分はコブラのまゝで輸出される。(單位メートル噸)

年	コブラ換算輸出高	土人生産	農園生産
一九三四年	四三三、七二〇	四二九、六一八	二七、六八五
一九三五年	五〇七、〇〇九	四九二、五四四	三一、〇二九
一九三六年	五一七、一九七	五一七、八三八	二九、五七八
一九三七年	五五七、四八二	五二五、四一七	三二、〇六五
一九三八年	六〇一、五三三	五六六、四五〇	三五、〇八三
一九三九年	五六四、三五〇	五六九、四四八	三九、八五一

(註) 三四・三五・三六・三九年度に於て、土人生産と農園生産の合計が移輸出高と一致せざるは右年度に於て、爪哇は土人生産が不足し外領よりの輸出の一部を消費したるによる。又、一九三九年土人生産は爪哇を含まず

年	コブラ	米突噸	趾	コ、ナット油	コ、ナット	個
一九三四年	四一七、四六四(六・九)	二、五九三、四七四	五二、三五一			
一九三五年	四八五、三九四(六・四)	八、四六二、一六三	八〇、〇七八			
一九三六年	五〇八、五二八(五・八)	五、九四六、四八二	六六、一五〇			
一九三七年	四九八、二四一(六・四)	二七、九五四、六一五	一一二、八四六			
一九三八年	五五六、四八四(六・三)	二〇、〇二〇、四三六	一五二、二〇四			

一九三九年 五二八、九五九
 (註) 括弧内ハ全輸出ニ對スル農園生産輸出物ノ占メル%
 地域的に見ると外領の移輸出が壓倒的である。

年	爪哇	外領	その中油
一九三四年	(一) 一九、六六三	四五三、三八三	(七〇七九)
一九三五年	(一) 一二、一五〇	五一九、一五九	(五八五八)
一九三六年	(一) 二六、八七五	五四四、〇七二	(五七二三)
一九三七年	三六、一八二	五二一、三〇〇	(三一五〇)
一九三八年	八、五八三	五九二、九五〇	(六〇〇二)
一九三九年	(一) 四九、八六四	六〇四、二一四	(單位—米突噸)

移出を除いた純輸出に關する數字は左の如くである。

年	數量(千噸)	金額(百萬盾)
一九三三年	四九五・八	三八・五
一九三四年	四二三・九	一六・九
一九三五年	四九三・〇	二六・〇
一九三六年	五一六・九	四一・五

七四
 九、二〇四(噸) 九五(千個)

年	胡椒	其他
一九三七年	五〇六・一	六二・六
一九三八年	五六五・五	三八・三
一九三九年	五三七・〇	二五・四
一九四〇年	二八一・八	一三・二

(ハ) 胡椒 其他

胡椒||これは蔓になる植物でマツチの頭より一周か二周大きい實が房になり、その實を採取するのであるが、昔埃及やフェニキアの黄金時代にはベルシヤ、アラビヤを通つて陸路アレキサンドリアに運ばれ、そこからギリシヤ商人の手でローマ市で賣られといふお話は割愛して土人の栽培法に入らう。何分にも資本のない土人のことであるから、金のかゝらない事が第一である。従つて經營の粗放なことは例によつて例の如しである。先づ森林を焼く。雨を待つて陸稻の種穀を蒔き、その間に支え木 (Dakar) を植える。これは胡椒の蔓を絡ませる爲めで、エステート農業ならば支柱を建てるが、費用がかゝるので代用させるのである。尤も木材の安い所では柱を建て、居るボルネオの一部には鐵木を使つてゐるところがある。米を收穫してから、玉蜀黍其他の作物を栽培し、次の雨期に再び米を植える。こうして支へ木が成長するのを待つて、胡椒を挿枝する。時には胡椒の高さが許す間、食用作物を植へつゞけることもある。植付後八ヶ月乃至十二ヶ月経つと地上三四十纏のところまで蔓を切る。さうすると蔓は支柱の周圍に圓筒形に繁茂する。かうなつてから始めて收穫をするので、それ以前には開花しても花を除いて了ふ

のである。肥料は使はない。従つて集約耕作に比べて收穫率は遙に低く、黒胡椒がヘクタール當り一千乃至二千八百疔（一本當り〇・三——〇・八疔收）收穫される。

白胡椒と黒胡椒とは、別段、種が違ふのではなく、殻をとるかとならないかである。實が充分に熟するのを待つて採取し、果房を水に浸して置いてから殻を除いたのが白胡椒である。

胡椒栽培は大部分土人の手で行れてゐるが、ベンカ島では主に支那人がやつてゐる。これは土人に比べれば遙に集約的に經營してゐて、ヘクタール當りの收穫も白胡椒七五〇——三、二五〇疔を産し、農園の壽命も、二十年乃至二十五年は保つ。

丁香Ⅱ肉荳蔻は省いて丁香を書かう。丁香の本當の故郷はモルツケンの北部であるが、ポルトガル人が現れるよりも前にアムボンに移植されてゐた。今日ではザンジバルが最大な生産地だが、蘭印ではモルツケン、ベンクレーン、メナドなどが主産地である。

カボツクⅡカボツクも重要な物産である。高い木の枝に出来る實を採取するのは一寸難かしい仕事だが、子供の時から之に習熟してゐる専門の採取者が居て木に登り、長い棹を用ゐて採取する。蘭印は世界のカボツク生産の八割内外を産するが、その中、九割は土人生産である。用途は綿の代用品だが枕のクツション等に用ゐられる。外領よりも爪哇に多く、ジャバラレンバン、マラン、スマランを主産地として、バリ、ロムボツク及スマトラのアチエにも産する。セレベスにもある。

カボツクの木は到る處に植付けられて居り、村の境界線になつたり、時には電柱代りに使はれる。廣く普及してゐる點ではコ、椰子やバナ、と似てゐるので、栽培面積の見積りは困難だが、一九一一年の數字として爪哇が二一三四五ヘクタール、外領が一、七四一ヘクタールと言はれてゐる。一九三九年度輸出高は八、五八五千盾であるが自家消費が非常に多く「全土人はカボツクの上に座し、眠る」と云はれてゐる位だから、右の輸出數字と生産額とは甚だ縁遠い。

第三項 農 園 農 業

(4) 總 說

(一) 投資其他 エステート農業は何を栽培してゐるか。先づこれから述べよう。第一に甘蔗糖が擧げられる。次いでゴム、煙草、煙草、茶、油椰子、ココ椰子、規那、カボツク、カカオを主とする。其他サイザル、マニラ麻などの纖維植物、丁香等の香料植物、カムビル、コカ等の藥用植物が作られるが、要するに作物の種類から云へば主要食料を除く土人作物と大差ない。

これ等のエステート農業の生産物は殆んど輸出される。従つて農園生産物によつて土着人の物質生活が直接に豊富になるといふことはない。少し極端に云へば蘭印は土地と勞力とを提供し、之に對し借地料と勞賃を受取るといふ關係しか無い譯である。ではどれ程の土地と勞力とを提供してゐるか。

先づ土地から見ると農業年報に依ればエステートの数は二千三百八十四、その面積は二百四十五萬四千ヘクタール弱である。尤もその全部が耕作されてゐるのではない。開墾地面積は百九十五萬ヘクタール強であるから、約八七・二%に當る。そしてこの開墾地の四八・八五%たる百十四萬五千ヘクタール強の土地に植付が行れてゐる。従つてエステート面積の四二・六%だけが植付面積である。この外に面積三萬一千二百ヘクタール強（植付面積二千五百八十八ヘクタール強）の政府農園がある。農園面積を爪哇及マドラと外領とに分けると、前者一、二六二、九八〇、後一、六四三、一九〇ヘクタールとなり、夫々四三%強及五七%弱となる。

次に努力は？ これは統計の新しいのが無いから一九三〇年の數字に頼る外ないが、それで見ると甘蔗栽培に約五十三萬、其他のエステートに約八十二萬計百三十五萬一千餘人となつてゐる。

それでは投下資本はどれ程になつてゐるか。蘭印農商工務部發行の「國際經濟より見たる蘭領印度の意義」なる小冊子によると、約二十一億盾となつて居り、之が地域別事業種別數字は左表の通りである。

全投資額に於ける農業投資の地位

農業投資	二、一〇〇百萬盾
鑛業會社拂込資本金	四三〇
鐵道	八二六
船會社	三九
其他、商業、保險、倉庫、會社拂込資本金	三三

小計

右會社々債、借入金及個人事業資金

計

三、四八二
五〇〇
三、九二八

種別	ゴム	煙草	油椰子	茶	纖維	ココ	ガム	珈琲	規那	砂糖	合計
スマトラ東海岸	三三、三〇一	一三〇、〇〇〇	八三、七〇三	四、三八八	四、〇〇〇	四、八七〇	一、〇〇〇	—	—	—	六〇、四三三
スマトラ南部地方	三九、一四	—	五、一三三	一四、七六三	一、〇〇〇	—	—	三三、〇三三	五、三三四	—	六〇、四三三
スマトラ合計	三九、四一五	—	八八、八三五	五、九一五	四、〇〇〇	四、八七〇	一、〇〇〇	三三、〇三三	五、三三四	—	一二〇、〇〇〇
爪哇	三九、八八八	—	—	一四、九六一	—	—	—	一〇九、〇九一	一〇、〇九六	七三、五〇八	一、三三三、〇九一
總計	六〇、三〇三	—	八八、八三五	二〇、八三〇	四、〇〇〇	四、八七〇	一、〇〇〇	一三〇、一四四	一五、四三〇	七三、五〇八	一、三三三、〇九一

右の地方別投下資本は栽培會社の資本金又は帳簿上の資産を基礎としたものではなく、各種栽培物の植付面積及び一ヘクタール當りの資本價值を基礎としたもので、各栽培物一ヘクタールの平均見積資本價值は左の如くである。
スマトラ東海岸——油椰子一、五〇〇盾、護謨一、四〇〇盾、纖維二、〇〇〇盾、茶二、〇〇〇盾、ココ椰子六〇〇盾。

南部スマトラ——護謨一、五〇〇盾、珈琲一、二〇〇盾、茶三、五〇〇盾、規那二、〇〇〇盾、油椰子一、五〇〇盾、纖維二、〇〇〇盾。

爪哇——砂糖四、〇〇〇盾、護謨一、〇〇〇盾、珈琲一、一〇〇盾、茶一、五〇〇盾、規那一、二〇〇盾。

以上は主要栽培地域における主要栽培物に對して投下された資本の概略で、爪哇における纖維及煙草に對する投資額は、勿論、ボルネオ、セレベスその他諸島における投資額はふくまれてゐないが、若しこれらの投資額を加へるならば蘭印農業投資總額は先づ二十二億盾前後と見てよからう。
かゝる巨大な土地勞力及資本はどれ程のものを生産したか。

砂糖	二九、〇一一、四〇〇百疋	護謄	一五四、二二一千疋
珈琲	五五、二八〇千疋	茶	五八、九九八
規那	一一、八八四	油椰子	七、〇六五
ココ椰子	八、五二〇		

(Statistisch Jaaroverzicht van N.I. 1929)

農園農業たる性質上、生産は直ちに輸出に結付く。そこで輸出を見よう。(一九二九年)

輸出數量	金額 (千盾)
護謄	三〇六、九五七(二一・二七)
砂糖	二四六、一六八
珈琲	八三、四〇四
茶	八二、七七九
煙草	七五、三六〇

右は投資金額の調査が一九二九年末であり、勞力は三〇年の數字である爲めに、生産及輸出高も二九年を以てしたのである。數字は古いが之に依つてエステート農業の規模がどんなものであるかの大要は知り得られると思ふが更に生産及輸出に關してエステート農業の重要性を示す新しい二、三の數字を附加へるならば、蘭領印度が農業國といはれる所以も一層明かになり、且つ同じ農業でも、内需専門の日本農業とは非常に違ふことも判然とするであらう。蘭印に於けるエステート農業なるものは大體右に述べた様なものであるが、勿論この十年前の事情がそのまゝ今日に受け継がれてゐるのではない。例へば二九年の輸出金高で二一・二七%を占め、第一位に在つた砂糖が三九年には一〇・三二%で第三位となり、代つてゴムが進出して二六%餘となつて遙かに砂糖を超越したが、石油生産物の躍進は更に急速で、一九三八年には二四%で第一位、三九年は二一%で第二位となつた。依つて近年の状況を次に示さう。

(二) 生産及輸出 先づ農園面積を調べよう。一九三九年に於て次の如き數字を示してゐる。

永租地	計		農業租借地	其他	官營農園	總計
	大農園	小農園				
爪哇及マヅラ	五九、一四三	二、四〇〇	六〇、五四三	—	二〇、五八三	一、三七八、七五
外領	五八、七八一	六六三	五八、四四四	—	三、四三九	一、六三三、八四九
計	一、一七、九四	二、三、一〇〇	一、一八、〇四四	—	六六、〇二二	三、三、三六九

之が實際の植付面積及生産面積を示せば次の通りである。

品名	植附面積	年との対比	
		一九二一年	一九二二年
ヘヴィアゴム	六一五、六七二	一六六・九	五二〇、九六六
砂糖	九四、九四七	六〇・五	五、七一四
珈琲	九九、一六七	七四・三	九六、四六五
茶	一三八、三八八	一五一・三	一三六、九三七
規那	一七、〇四九	一〇三・〇	一四、八一七
油椰子	一〇五、〇九三	八一二・二	七六、〇一五
爪哇及マドラ	七一、一五九	一二六、九二七	一九八、〇八六
ガタバーチヤ	一九八	七、〇八〇	一九八
珈琲	五一、二三九	一八、七五三	五八、三一九
茶	六四、四〇六	一三、七六三	八三、一五九
煙草	二五、二四〇		三九、〇〇三

(單位—千疋)

で、逐年異常の發展をみて、今日に及んでゐるが、油椰子の如きは一九三九年において一九二一年植附面積の八倍餘に達し、生産面積に於ては實に二十二倍を超えてゐる。然らばかゝる巨大の面積から、どれ程の生産物が收穫されるか。

品名	植附面積	年との対比	生産面積	年との対比
規那	一一、七一一	六八〇	一一、三九一	
ココア	一、七二八	一〇	一、七三八	
椰子	一九、〇六〇	三五、三三四	四〇、四三五	
椰子油	一、一四四	二四二、五五七	二四三、六八三	
椰子實	一、一四四	二四二、五五七	二四三、六八三	
豆	一四六	二四三	三八九	
豆實	二四六	四三	七〇	
豆乾燥皮	二、四四七	二八	二、四七五	
纖維核	四、五〇五	五六	四、五六一	
胡椒	五一	四二	九三	
胡椒	五一	四二	九三	
シトロネラ	七三〇	一	三、二六二	
砂糖	一、五六二、四六二千疋		七三〇	

(註) 砂糖中には土人よりの買入、六、八四〇疋を含む。(Indisch Verlag 1940)

ざつとこんなものである。そしてその大部分が輸出される。数字ばかり並べて恐縮であるが左に、生産高に對する輸出高の%及び世界輸出に於ける%を擧げて、以て蘭印エステート農業の世界及國內に對する地位の一斑を示すことゝしたい。

品名	世界輸出に於ける%
イム	三七
珈琲	四
茶	一九
規那	九一
ココ椰子油生産物	〇・二
油椰子生産物	二七
カボック	二四
胡椒	七二
胡椒	八六
砂糖	三三
砂糖	六

世界輸出に於ける%

之を爪哇と外領に分けてみれば (單位千メトリック噸)

年度	爪哇	外領	總計	一九二七年との對比%
一九三七年	二、四六二	一、五一七	三、九七九	一〇五%
一九三八年	一、九五八	一、四六一	三、四一九	九〇%
一九三九年	二、四〇六	一、五二三	三、九一九	一〇三%

また、これが輸出額は(單位百萬盾)

年度	爪哇	外領	總計	一九二七年との對比%
一九三七年	二三三	四二八	六〇六	五一%
一九三八年	一八二	二四四	四二六	三三%
一九三九年	二二七	二六八	四九五	三八%

で、近年に至り數量、金額共に低下しつつあるのは一に世界的需要不振、従つて市價の下落乃至は生産制限等の諸事情によるものである。併し試みに蘭領印度全輸出貿易における農産物の地位を見れば、

(單位は百萬盾—蘭印農業年報一九三九年)

年度	農産物金額	礦産物金額	其他金額	合計金額
一九三一年	五七	一八	五	七〇
一九三六年	三三	一四	三	五〇
一九三七年	六〇	二九	三	九二
一九三八年	四六	三〇	四	八〇
一九三九年	四九	三三	三	八五

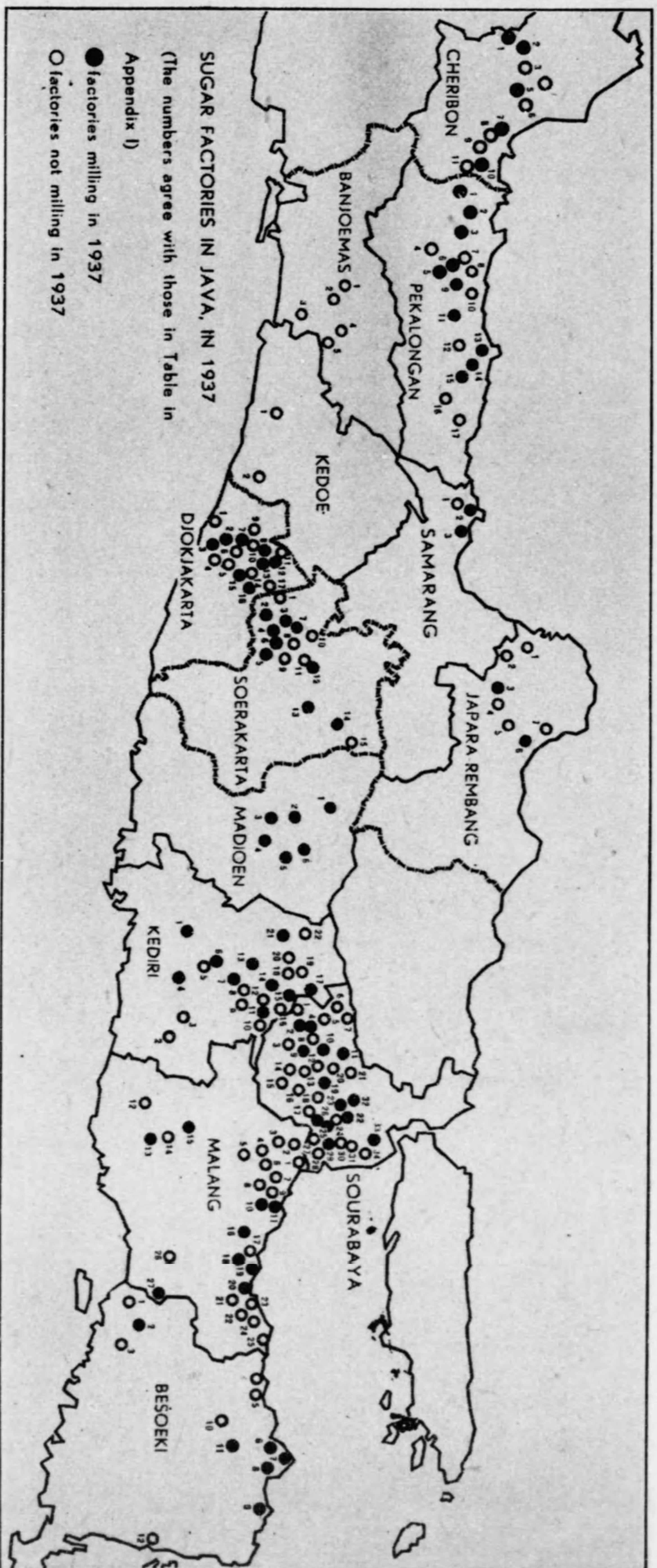
蘭印輸出貿易上依然として七〇%近くを占めてゐる。以て、蘭印農業の重要性を容易に察知し得るのである。エステート農業を總括的に述べれば、大體右の如くである。次には主要生産物に就いて個別的に検討しよう。

現在では砂糖は蘭印農林産物輸出中、第二位又は三位にあるが、一九三三年迄は常に第一位を占めてゐた。産地は殆んど爪哇である。その歴史も舊く、恐らくガンヂス河の流域から印度人又はアラビア人に依つて爪哇に齎られたものであらうといはれてゐる。そして土人は原始的な方法で砂糖を得てゐたのである。東印度會社の支配下に在つた時代に最初の製糖所がバタヴィア附近に多く支那人の管理の下に存在してゐたが、併しこの時代には大して發展を示さず、寧ろ反對に一八〇〇年以後は、ナポレオン戦争に基く通商障害の爲めに砂糖の生産は退歩してゐる即ち、

一七七九年	一〇〇、〇〇〇ピクル
一八一三年	一〇、〇〇〇ピクル
一八一五年	二〇、〇〇〇ピクル

其後一八三〇年迄は依然振はなかつたのであるが、この年にファン・デン・ボツシュが強制栽培を行つたのである。この制度に依れば爪哇住民の大部分は耕地の五分の一を砂糖栽培の爲めに保留し、命によつて之を耕作しなければならない。

前述した如くボツシュの強制栽培制度は蘭印栽培業の、従つて蘭印經濟の基礎を確立したものととして特筆大書に値するものであるが、其後漸時に強制は廢止され一八九一年を以て終末を告げた。この間、次第に自由栽培が發達

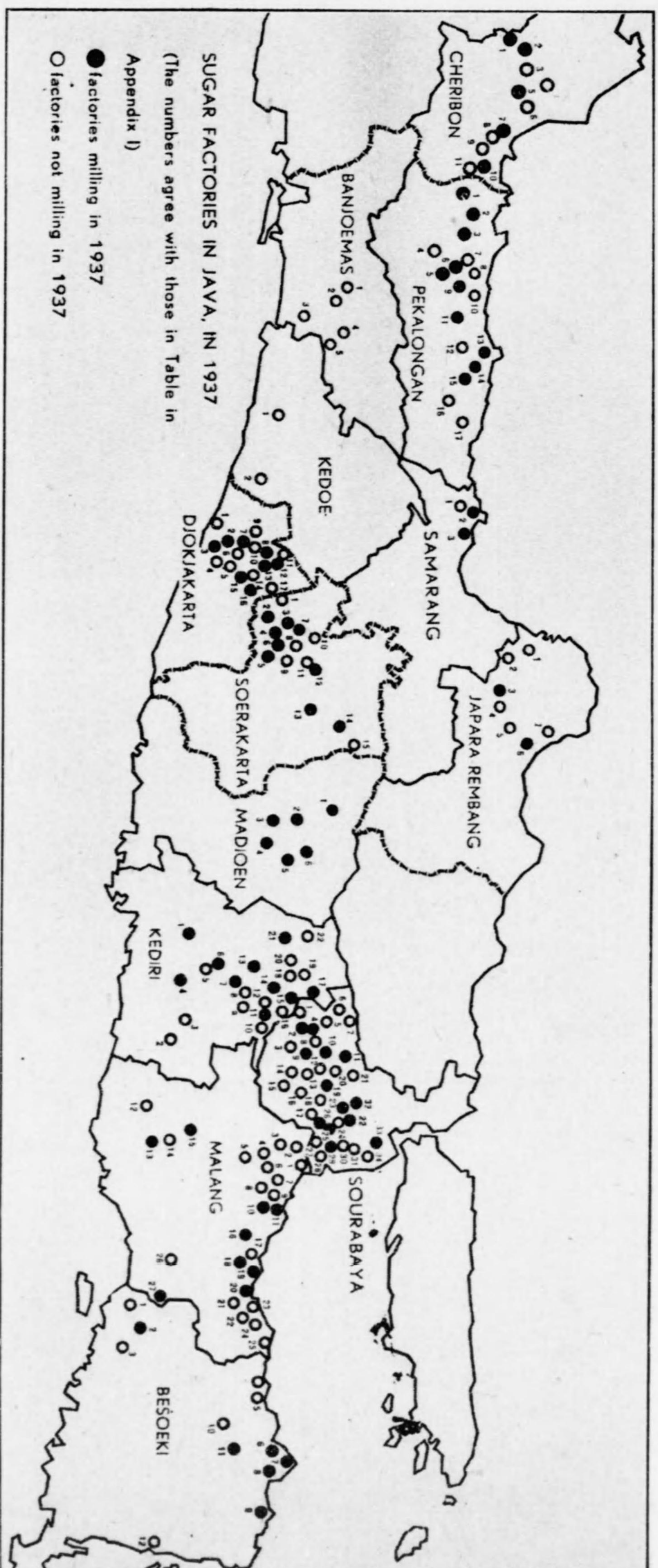


現在では砂糖は蘭印農林産物輸出中、第二位又は三位にあるが、一九三三年迄は常に第一位を占めてゐた。産地は殆んど爪哇である。その歴史も舊く、恐らくガンヂス河の流域から印度人又はアラビア人に依つて爪哇に廣らされたものであらうといはれてゐる。そして土人は原始的な方法で砂糖を得てゐたのである。東印度會社の支配下に在つた時代に最初の製糖所がバタヴィア附近に多く支那人の管理の下に存在してゐたが、併しこの時代には大して發展を示さず、寧ろ反對に一八〇〇年以後は、ナポレオン戦争に基く通商障害の爲めに砂糖の生産は退歩してゐる即ち、

一七七九年	一〇〇、〇〇〇ピクル
一八一三年	一〇、〇〇〇ピクル
一八一五年	二〇、〇〇〇ピクル

其後一八三〇年迄は依然振はなかつたのであるが、この年にファン・デン・ボツシュが強制栽培を行つたので著るしい進歩を示すに至つた。この制度に依れば爪哇住民の大部分は耕地の五分の一を砂糖栽培の爲めに保留し、命によつて之を耕作しなければならない。

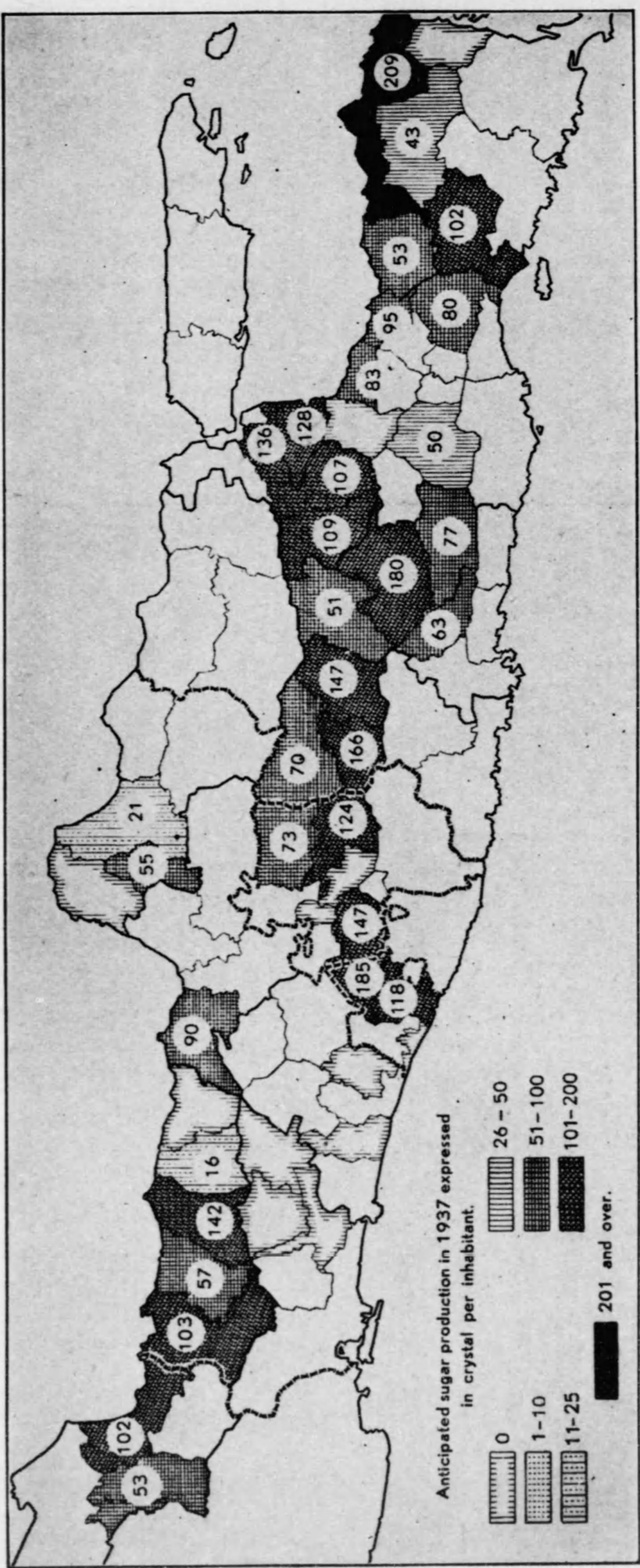
前述した如くボツシュの強制栽培制度は蘭印栽培業の、従つて蘭印經濟の基礎を確立したものととして特筆大書に値するものであるが、其後漸時に強制は廢止され一八九一年を以て終末を告げた。この間、次第に自由栽培が發達



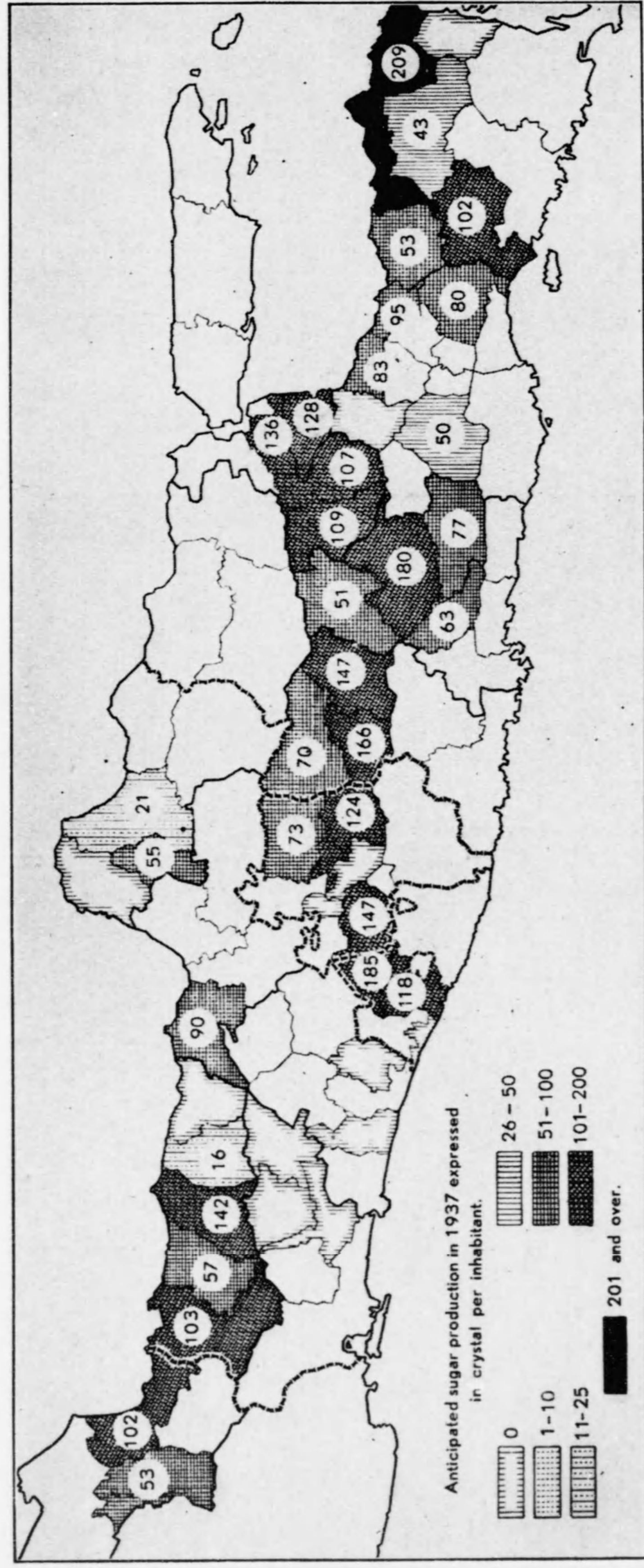
SUGAR FACTORIES IN JAVA, IN 1937
(The numbers agree with those in Table in Appendix I)

● Factories milling in 1937

○ Factories not milling in 1937



し一八七五年にはスラカルタに十九、ジョクジャカルタに九つの砂糖栽培企業があつて三十餘萬ピクルの砂糖を生産してゐる。之に對し、強制経営下に在る製糖場は同年に於て百七十四萬ピクルを生産してゐる。其後、自由製糖場の數は三十九に増加したに關らず、生産は二十三萬ピクル餘に減じ、強制製糖場の生産は二百五十七萬ピクルに増加してゐる。一八七九年に至り、強制栽培を年々十三分の一づゝ減少し十三年後、即ち一七九一年を以て之を全廢する法令が設定され、こゝに漸く民業としての糖業發達の基礎が確立されたのである。不幸にして之を阻害する二つの事情が発生した。その一つは歐洲に於ける甜菜糖の發展で之が爲めに一八八三年の頃に遂に過剰生産となり糖價は激落して製糖業は非常な損失を蒙つた。もう一つの事情はセレ病の發生である。これは一種の萎縮病で殆んど全爪哇の砂糖黍を襲つたと稱して差支へない程猛烈を極めたのである。(中部爪哇では收穫は約三分の一となつた)。セレ病に對しては學者技術者の努力が集中されて流石のセレ病も數年後に完全に征服されたが、前者に對しては經營の集中化を以て對抗した。具體的に云へば經營は有力な農業銀行(クルチュールバンク)の手に移り、之に依つて新たな資本を砂糖栽培及製糖に投下する可能性を作り出した。近代的な製糖技術と合理的經營とは爪哇の糖業を再び有利なものたらしめたのみでなく、之を重要な産業として確立せしめたのである。この恐慌によつて糖業聯合會(一八九五年)が生れ、爪哇糖業のカルテル化がその一步を踏み出したことは注目し得る。一八九八年米西戰爭が勃發してキューバ糖の生産が激減するや、爪哇糖に對する米國の注文が激増するの幸運に遭遇したが、原因が原因であるから永續きはせず、戰爭が終り一九〇三年米國がキューバ糖に對し二割の特惠關稅率を認めるに至つ



一八七五年にはスラカルタに十九、ジョクジャカルタに九つの砂糖栽培企業があつて三十餘萬ピクルの砂糖を生産してゐる。之に對し、強制経営下に在る製糖場は同年に於て百七十四萬ピクルを生産してゐる。其後、自由製糖場の數は三十九に増加したに關らず、生産は二十三萬ピクル餘に減じ、強制製糖場の生産は二百五十七萬ピクルに増加してゐる。一八七九年に至り、強制栽培を年々十三分の一づゝ減少し十三年後、即ち一七九一年を以て之を全廢する法令が設定され、こゝに漸く民業としての糖業發達の基礎が確立されたのである。不幸にして之を阻害する二つの事情が発生した。その一つは歐洲に於ける甜菜糖の發展で之が爲めに一八八三年の頃に遂に過剰生産となり糖價は激落して製糖業は非常な損失を蒙つた。もう一つの事情はセレ病の發生である。これは一種の萎縮病で殆んど全爪哇の砂糖黍を襲つたと稱して差支へない程猛烈を極めたのである。(中部爪哇では收穫は約三分の一となつた)。セレ病に對しては學者技術者の努力が集中されて流石のセレ病も數年後に完全に征服されたが、前者に對しては經營の集中化を以て對抗した。具體的に云へば經營は有力な農業銀行(クルチュールバンク)の手に移り、之に依つて新たな資本を砂糖栽培及製糖に投下する可能性を作り出した。近代的な製糖技術と合理的經營とは爪哇の糖業を再び有利なものたらしめたのみでなく、之を重要な産業として確立せしめたのである。この恐慌によつて糖業聯合會(一八九五年)が生れ、爪哇糖業のカルテル化がその一步を踏み出したことは注目に價する。一八九八年米西戰爭が勃發してキューバ糖の生産が激減するや、爪哇糖に對する米國の注文が激増するの幸運に遭遇したが、原因が原因であるから永續きはせず、戰爭が終り一九〇三年米國がキューバ糖に對し二割の特惠關稅率を認めるに至つ

て米國市場は失れて了つた。こゝに於て印度市場に力を注ぎ、爾來印度は爪哇糖の最大顧客となつた。そこへ一つ非常に有利な事情が現れて來た。それはブラツセルに於ける砂糖協定である。この協定に依つて、從來、甜菜糖に與へられてゐた輸出プレミアム其他の保護政策が廢止されたので、爪哇糖は全く甜菜糖と平等の立場に立つことが出來、之が爲めに爪哇糖は躍進的發展を遂げ、蘭印の最大なる産業となつたのである。

甘蔗農園生産統計

年 度	企業數	收穫面積 ヘクタール	生産額 千疋	一ヘクタール 當り平均生産高
一八四〇	1	三一、二〇〇	四七、〇四〇	一、五〇八
一八五〇	1	三二、六〇〇	八六、五一九	二、六五四
一八六〇	1	三四、三〇〇	一三六、八八九	三、九九一
一八七〇	1	三七、八〇〇	一五二、五九五	四、〇三七
一八八〇	1	四八、九〇〇	二一六、六三四	四、四三〇
一八九〇	1	七二、〇〇〇	三九九、九九九	五、五五六
一九〇〇	1	九一、〇〇〇	七四四、二五七	八、一七九
一九一〇	1	一二六、五〇〇	一、二八〇、三〇〇	一〇、一二一
一九一一年	1	一三五、八〇〇	一、四六六、五七〇	一〇、七九九
一九一二年	1	一四〇、三〇〇	一、四〇六、三四〇	一〇、〇二四
一九一三年	1	一四五、三〇〇	一、四六五、二八〇	一〇、〇八五

一九一四	一八六	一四七、五〇〇	一、四〇四、九四〇	九、五二五
一九一五	一八六	一五一、二〇〇	一、三一九、〇九〇	八、七二四
一九一六	一八六	一五七、四〇〇	一、六〇一、五〇〇	一〇、一七五
一九一七	一八五	一六〇、四〇〇	一、七九一、一〇〇	一一、一六六
一九一八	一八六	一六三、一〇〇	一、七四三、〇〇〇	一〇、六八七
一九一九	一七九	一三七、七〇〇	一、三〇九、四〇〇	九、五〇九
一九二〇	一三八	一五三、四〇〇	一、五一六、二〇〇	九、八八四
一九二一年	一八四	一五七、〇〇〇	一、六五五、七〇〇	一〇、五四六
一九二二年	一八二	一六二、〇〇〇	一、七七五、七〇〇	一〇、九六一
一九二三年	一八〇	一六三、五〇〇	一、七六〇、九〇〇	一〇、七七〇
一九二四年	一八一	一七一、六〇〇	一、九六三、六〇〇	一一、四四三
一九二五年	一七九	一七六、三〇〇	二、二六一、一〇〇	一二、八二五
一九二六年	一七八	一七九、七〇〇	一、九四一、六〇〇	一〇、八〇五
一九二七年	一七六	一八五、七〇〇	二、三五一、二〇〇	一二、六六一
一九二八年	一七八	一九五、四〇〇	二、九二三、六〇〇	一四、九六二
一九二九年	一七九	一九六、八〇〇	二、八七〇、九八〇	一四、五八八
一九三〇	一七九	一九八、〇〇〇	二、九一五、八七〇	一四、七二七
一九三一	一七八	二〇〇、八〇〇	二、七七二、四四〇	一三、八〇七

第四章 農業現勢と農業資本

一九三二	一六五	一六六、一三八	二五、六〇一、八二九	一五、四一三
一九三三	一一六	八四、三四三	一三、七二五、八五〇	一六、二八二
一九三四	六二	三四、二一一	六、三六一、〇四〇	一八、六〇〇
一九三五	四三	二七、五七八	五、〇九六、五九〇	一八、四六六
一九三六	四六	三五、五七二	五、七四七、一〇〇	一六、一五六
一九三七	九五	八四、四九四	一三、七九九、二四〇	一六、三三二
一九三八	九四	八四、八二九	一三、七五五、一〇〇	一六、二一五
一九三九	一〇〇	九四、九四七	一五、五六二、四六二	

(註) 右表中、企業數ハ製糖設備ヲ有スル農園ナルガ、コノ外ニ斯設備ヲ有セザルモノニアリ(一九三九年)
生産高中ニハ、土人ヨリ購入セル甘蔗モ含まレタリ

右表を見ると大戦終結直後の一九一九、一九二〇、一九二一、一九二二の四ケ年は生産減を示してゐるが二三年は早くも戦前産額を超過し三一年に至るまで連続的増産である。これは戦後安定期の需要増加と大戦による甜菜糖の徹底的破壊に基くものであつた。一般的に農業恐慌は二八年後半に始つてゐるのであるから、三一年まで生産増加を続け得たことは不思議な位である。三一年に至つて世界の砂糖ストックは増大し、価格は暴落して産糖國は苦境に追込まれたが、就中打撃の甚だしかつたのはキューバで、遂にこの國がイニシエチーブをとつて一九三一年五月ブラツセルに於て生産制限及輸出制限に關するチャツドポーン國際協定が成立した。この協定によれば爪哇糖輸出割當高は一九三一年を二百三十萬噸として爾後年々十萬噸づゝ増加し、三五年には二百七十萬噸に達する譯であ

つた。然し第三期恐慌の深さと廣さは世人の豫想を超え、單なる景氣變動の波といふ如きものでなく、資本主義の根本を揺がす所謂構成的恐慌に進展したが爲めに、折角の限産案も奏效せず、三五年の生産高は三一年の五分の一以下に下り企業數も四分の一以下に減じた。この過程に於て砂糖資本及蘭印政府は一九三三年一月から砂糖管理法を実施し、之に基いて蘭領印度砂糖販賣組合(Nederlandsch-Indische Vereeniging voor den afzet van Suiker) 略稱ニヴァス(SIVAS) を作つて全糖業を統合し、政府は之に對して強力な干渉權を有することゝした。完全な強力國家統制であつたが、その結果は前述の如くである。止むなく政府は改めて各種の法令を公布實施して生産、輸出入の管理を一九四〇年まで續行することゝした。

上述の経過から見ても、嘗て砂糖が蘭印の主導農産物であつたことは推察出来ると思ふが、今後に於ける發展はどうであらうか？ 私は多くの期待を持たない。爪哇糖の發展を阻止してゐる事情、即ちキューバ糖及歐洲甜菜糖の存在は今後と雖も變化するものではないから今次の大戦後、一時的現象として爪哇糖への需要が増加することはあつても、恒久的傾向たり得ないと考へられる。況んや戦後世界經濟の激烈なる窮乏を想ふ時、一層この感を深くせざるを得ない。

(ハ) ゴム

一口にゴムと云つてもその種類は數多いが、大別して彈性ゴム即ち所謂ゴムとガタパーチヤに分けられる。所謂ゴムは弾力性と延びの利くものゝ代表者であるが、ガタパーチヤの方は延びは相當に利くが、普通のゴムの比でな

し、多少の屈撓性はあるが弾力に乏しい。弾まないゴムとは珍らしいと思はれるかも知れないが、齒醫者の使ふ「ゴム」は即ちガタパーチャである。電線の被覆となつてゐる「ゴム」も同じくガタである。

生産の大きさから見て、ゴムとガタとは勿論七面鳥とヒヨッコ程に違ふが、話の都合上ガタから書く。

ガタパーチャ||ガタパーチャ (*Guttia Percha*) といふ名前が、田舎の馬車を聯想させるので、甚だ非文明的に、従つて一部の人々には南洋の産物らしく思へるかも知れないが事實は非常に文明に役立つてゐる。之を始めて歐洲に紹介したのはウキリアム・モンゴメリイであるが(一八四三年)四年後にヴェルナア・フォン・ジーマンズ(往年ジーマンズ收賄事件として吾が朝野を震撼せしめ、山本權兵衛以下多數の海軍々人を失脚せしめたるジーマンズ)の創立者が地中海電話線の被覆に用ひてからその重要性が認識され、更に海底電線の被覆材料として無二のものだといふことが明になつて以來、世界の海底電線網は急速に擴大したと云はれてゐる。

當時はガタの樹を栽培してゐる者などはないから、スマトラ、ボルネオ、マラツカ等のジャングルから土人が集めて來たものである。その頃は木を伐倒して幹に傷をつけてガタを採取したものであるが、需要の増大につれて原木潤湯の惧が生じ、始めて栽培の必要が感じられるに至り、一八八五年に蘭印政府は西部爪哇のチベチル(*Tjibetir*)で各種の樹を試植したる後、一九〇一年同地に官營農場を設立した。

最初は立木の幹に切付(*Tapping*)をやつてゐたが收穫量が少い爲め、近年は葉から採取することになつた。極く大ざつばに云へば、茶の葉を摘むのと同じ譯なのであるが、茶は幼葉が上等であるのに、ガタは落葉する直前が

最上なのである。採取した葉を蒸氣と壓力とに依る物理的方法で處理してガタを取るのである。蘭印の生産は農園數三個所、植付面積一三〇五ヘクタール、生産高一〇百(一九三八年)である。

彈性ゴム||第十五世紀の終りに近く、コロンブスが初めてゴム球のことを歐洲人に紹介したと云はれてゐる。其後一七五五年にポルトガル王がゴム液を塗らせる爲めに數足の靴を南米に送つた話もあるし、一七六三年にはフォクソイがゴムをエーテルに溶かすことを發見して居り、一七七〇年には英國の科學者ブリーストリーは消ゴムを作つて *to rub out* (消ス)と云ふ意味で、*Indian Rubber* と名付けた。これから弾力ゴムのことを一般に *Rubber* と稱へることになつたといふ。値段は五分角のもので一個三志といふから平價に換算して約一圓五十錢、恐ろしく高い消ゴムだが、近頃は銀座の伊東屋でも一個一圓二十錢位する。ゴムの製法に關しては *Goodyear* は非常に貢獻して居り、和硫法を發明し(一八三九年)エポナイトを案出し(一八五二年)、又再生ゴムの特許を得てゐる(一八五三年)其他各種の發見や應用法が多數の人によつて行はれてはゐたが、原料生産の方面では天然に依存してゐた。最大の供給地はブラジルで主としてペラ港から輸出されてゐた。蘭印も古來、ガタパーチャ其他の野生ゴムの産地として知られてゐたが、栽培ゴムは比較的新しく、一八五五年頃にセアラ種が輸入され、次いで一八六四年に *インド・ゴム* (*Ficus Elastica*) が廣まれ、バタヴィアのスマンに私設栽培地が出來たが *W. K. G. Gretker* 博士に從へば、これは世界最初のゴム栽培である。南部スマトラのランボンでも試みられ、又、一八七六年にはメキシコ *haya* (*Gastillou elastica*) が中米から爪哇に輸入されたりしたが、蘭印栽培ゴムの發達上最も記憶すべきは一八

八三年爪哇のポイテンゾルフ植物園に於けるヘヴィア・ゴム (Hevea brasiliensis) (前記パラ港輸出品を産するものと同種なる爲め、パラゴムと通稱する) の試植である。これは一八六七年ヘンリー・ツイカム卿が初めてブラジルから種子を英國に廣らし、之がセイロン島のキウ植物園に送られて苦心慘憺の結果得られた苗木がもとである。一八八二年には初めて相当量のヘヴィアの種子が蘭印に廣され、これが成長するに至つて一八九〇年から一九〇〇年の間、毎年可成り多量の種子がポイテンゾルフから蘭印各地に配布されたのであるが、目立つた結果を廣らさなかつた。却つて *Ficus* や *Casillia* が盛つて一九〇一年には森林局は大規模の *Ficus* 栽培を行ふといふ有様で、今日支配的地位に在る *Hevea* の價值が認められたのは一九〇九年以後に屬する。これは切付けの方法が悪くて採計量が少なくなつた爲めであつた。

獨り蘭印だけでなく、南洋のゴム業にとつて一九一〇年といふ年は發展の一大契機をなした年である。その年の四月に南米のパラゴムの倫敦相場は封度十二志六片と暴騰した爲め「東南アジアの到る處にゴム農園が一夜に簇生した」。年末には五志七片に暴落する騒ぎであつたが何分にもゴムは成長に時間がかかる。桃栗三年柿八年といふが、ゴム樹も柿と同様に七八年経過しなければゴム汁を採取出来ない。それから十五年目位までが最上と云はれ、二十年位で一回の終りとなる。こんな譯であるから、大根や午夢の様に、需要に應じて植えたり引つこ抜いたり出来ない。勿論市況の波につれて變化するけれども、好況を経る毎に漸増の大勢を示してゐる。ゴム農園植付面積及生産高の發達は次の通りである。

年 度	爪哇及マドラ	外 領	計
一九〇二	—	一七六	一七六
一九〇三	—	四二三	四二三
一九〇四	—	六五二	六五二
一九〇五	—	一、三三八	一、三三八
一九〇六	一〇、一一七	二、四二八	一二、五四五
一九〇七	一五、三七九	八、〇九四	二三、四七三
一九〇八	二四、二八二	一五、七八三	四〇、〇六五
一九〇九	四三、三〇三	二七、一一五	七〇、四一八
一九一〇	六三、九四三	四〇、四七〇	一〇四、四一三
一九一一	八四、一七八	六四、七五二	一四八、九三〇
一九一二	九三、〇八一	八九、〇三四	一八二、一一五
一九一三	一〇三、一五〇	九七、一二八	二〇〇、二七八
一九一四	一〇八、二〇四	一三〇、九一八	二三九、一二二
一九一五	一〇九、二一五	—	—
一九一六	一一七、三〇五	—	—
一九一七	—	—	二六三、〇五五

ゴム農園植付面積 (一九二〇年以後はヘヴィアのみ) 單位ヘクタール

一九一八	一五三、〇一八	一五九、三九〇	三一二、四〇八
一九一九	一五〇、八三二	一九〇、〇六八	三四〇、九〇〇
一九二〇	一五七、二九九	一九五、四一八	三五二、七一一
一九二一	一六四、五三二	二〇四、三九三	三六八、九二五
一九二二	一六六、九八五	二一〇、九九九	三七七、九八四
一九二三	一六八、八八一	二一三、三七六	三八二、二五七
一九二四	一七一、二七九	二二二、六六五	三九三、九四四
一九二五	一八〇、四七八	二三四、四七〇	四一四、九四八
一九二六	一九四、七二〇	二五一、一六七	四四五、八八七
一九二七	二一〇、六四二	二七四、八三一	四八五、四七三
一九二八	二二二、七八一	三〇二、八六五	五二五、六四六
一九二九	二二四、八四一	三二二、七一五	五四七、五五六
一九三〇	二二八、九二三	三四四、〇九一	五七三、〇一四
一九三一	二二九、〇一三	三五三、二六五	五八二、二七八
一九三二	二二二、七九九	三五九、三九七	五八二、一九六
一九三三	二二八、七六六	三六四、〇〇五	五九二、七七一
一九三四	二三二、九五〇	三六八、三三六	六〇一、二八六
一九三五	二三〇、一六二	三六五、一四七	五九五、三〇九

九六

一九三六	二三〇、〇七四	三六五、八八五	五九五、九五九
一九三七	二二七、三〇一	三六六、四三五	五九三、七三六
一九三八	二二八、九一一	三六六、八六〇	五九五、七七一
一九三九	二三五、三六〇	三八〇、二六七	六一五、六二七

右に對して土人ゴムの生産を見るに、その栽培は一九〇四年頃に始められたものらしい。A. Luyties の記述として The Netherlands Indies 誌の述べる處によるとウルスンゲイ (Oeloe Soengai) に於ける最も舊い土人ゴムの栽培はメツカ巡禮者がマレー聯邦から持歸つた種子に始るといふ。いづれにしても土人ゴムの栽培が先づ外領に興つたのはメツカ巡禮者及移民とボルネオ、スマトラ東海岸シンガポール及マラツカの貿易業者との關係が密接なること及び外領には米作が發達してゐなかつたことに依るものであらう。土人ゴムの場合にも一九一〇年のゴムの好況は大きく響き、頻りとヘヴィアを植えたものである。一九一五年末から再びゴム價が上向くと又もや栽培が擴張され遂に土人栽培物として不動の地位を確立した。第三回の擴張は二四—二七年で一九一九年の生産高一三〇〇〇メートル噸に對し二四年には五六、三四六メートル噸と猛進してゐる。

土人ゴムの栽培面積は精確に計量することは出来ないが、一九三六年に木の數を調査したところによると、約五億九千三十一萬本、之から推算された栽培面積は六十九萬六千二百ヘクタールである。土人栽培と農園栽培とは各種の條件が違ふから、面積だけ比べても仕方のないことではあるが、同じ三六年の農園ゴム栽培面積は五九五、九

五九ヘクタールである。これは蘭印に對する國際ゴム生産割當量に反映し

九八

土人ゴム	一九三六年	一九三七年	一九三八年(千疋)
農園ゴム	二六二、四四二	二七六、六六〇	二八七、三三四
	二四五、五五八	二五一、六六〇	二六一、三二六

となつてゐる。以て土人ゴムの擡頭を知ることが出来る。栽培地は主として外領で前記ゴム樹數の中九割八分六厘五毛は外領にある。之を外領土人ゴム輸出量に就いてみれば、

一	九	三	〇	九〇、四九六
一	九	三	四	一八五、八八七
一	九	三	五	一四四、八九二
一	九	三	六	一五一、三九八
一	九	三	七	二〇八、五五一
一	九	三	八	一四六、五九六
一	九	三	九	一八四、五九五

(千メートル噸)

地域から見ればボルネオとスマトラが多い。云ふまでもなくゴムの如き國際商品を生産する場合、その景況が土人經濟に及ぼす影響は可成り激しい。

(二) 煙 草

煙草はポルトガル人に依つて蘭印へ持込まれたものであらうと云はれてゐる。東印度會社時代に強制栽培をやつたけれども成績は頗る芳しくなかつた、これは土人の煙草製造技術が歐洲人の嗜好に適せず、加ふるに會社のスタッフは、煙草の栽培と製法に關して必要な知識を有してゐなかつたからである。一七八三年には政府が強制的に煙草栽培を開始し七四年には栽培法と製法とを研究する爲めに、役人がキューバに派遣されてゐる。併し政府が強制的に植えさせた煙草の品質は未だ甚だしく意に滿たないもので、二十年後に再びキューバへ研究員が派遣されたけれどもその結果は思はしくなかつた。レムバンとジャバラでは尙多少は栽培してゐたが、バシジュマスでは政府は煙草栽培を放棄してつた。一八六四年には全然官營煙草栽培は終熄を告げたのである。之に對し、民間側でも既に一八五五年にはレムバン及ブスキの借地 (Pachtland) に企業的栽培が行はれ、一八六一—六二年には六萬二千擔(一擔は八〇疋)を生産し、官營生産高一萬一千擔の數倍に及んでゐる。

王領たるスラカルタ及ジョクジャカルタに於ても歐人煙草栽培が行れて居り、ブスキに於ては土人煙草を買入れて歐人工場で加工してゐた。これは現在でも續けられてゐる。

併し蘭印の煙草が本格化したのはデリ煙草が始まつてからで、政府が煙草栽培を放棄した頃にスマトラ東海岸なるデリに煙草栽培が現れた。一八六九年政府と和蘭貿易會社との間にデリ會社設立の協定が締結された。これは外領に於ける最初の大栽培會社である。デリ會社の歴史はスマトラ煙草の歴史であり、同時にスマトラ東海岸の經濟

史であると云はれてゐるが、初めてデリのサルタンから會社が得たコンセツションは一萬バウ（七、〇九六・五ヘクタール）であつたが、今日ではデリ及ランカットのサルタン領に九萬四千ヘクタールのコンセツションを有してゐる。その後、デリ煙草の結果が良好だと判明するや多數の煙草農園が設立されたが、現在では主として四つの大會社が生産に従事してゐる。その急速な發展は恐らくデリ煙草が葉卷の上卷用として卓越し、品質獨占を有してゐることに依るものであらう。ボルネオにも栽培が行れてその結果も決して不満足なものではないが「デリ煙草」は途に出來ない。

今日蘭領印度で主要な煙草産地と云へば、スマトラ東岸（デリー、ミランケツト、セルダン）爪哇では王領とプスキ州である。

一九三九年の統計に依ると煙草農園數八十八の中、純煙草農園數七十一（その中、爪哇三十四、外領三七）栽培面積三六、五二〇ヘクタール（爪哇二三、〇二二、外領九、九二四）生産高は葉煙草二八、〇六九、一一九クロツツク煙草一〇、九三三二九〇匁（プスキの土人煙草の買入を加へて）となつてゐる。一見したところ爪哇が優勢である様に見えるが、品質の點では格段に劣る。

煙草栽培への資本流入は一八六〇年頃、土人栽培業者に對する貸付に始ると云はれ、ファニヴァルの如きは一八六三年の恐慌は主として右の貸付が不良であつた爲めだと云つてゐるが、これは稍々言葉が過ぎる。六三年の恐慌は一般栽培事業のブームに依るもので、敢て煙草に限らない。併し大資本の侵入は矢張り一八六〇時代の終りから、

七〇年代へかけての事で、前述のデリー煙草會社が一八六七年末に和蘭貿易會社の關係會社となつた如きその例である。輸出は左表の如くである。

一	九	三	三	年		
一	九	三	四	年	三三・〇	五〇・一
一	九	三	五	年	三六・八	四五・六
一	九	三	六	年	二九・三	五〇・七
一	九	三	七	年	三七・九	四九・八
一	九	三	八	年	四一・一	五〇・二
一	九	三	九	年	三八・九	五〇・三
一	九	三	〇	年	二六・九	三五・四
一	九	四	〇	年	三七・五	二九・四

(ホ) 茶

グレッツエルの記述によれば、蘭印に初めて茶の木を輸入した者は獨逸人の醫者ジーボルト博士で、長崎から茶の種子と苗とを爪哇に齎らし、ポイチンゾルフ植物園に之を植えたといふが、本當は一六九六年に支那から同植物園に移植されたもので政府は之が栽培を奨励したが失敗に終つた。近時の獨逸人の著書には兎角、「獨逸」を誇張する氣味があつてグレッツエルの著書にも各所にこれがあるが、このジーボルトの話などもその一例であらう。

ジーボルトが最初ではないにしても、この頃から茶の栽培が注目され出したことは事實で、和蘭貿易會社の「き」茶」系のヤコブソンなる者が之を擔當し、廣東に行つて一八二八年から三三年まで六ヶ年の研究後、政府監督官として爪哇各地で十三ヶ所に涉つて試植を行つた。之が蘭印茶栽培の基礎を据つけたものである。一八三五年十一月には初めて爪哇から和蘭に約二百箱の茶が輸出され一ポンド一五〇—三〇〇盾の高値で販賣された。一八四二年迄は茶は全然官業であつたが、併し官業としての茶は甚だ振はず、ファン・デン・ボツシユも茶には恵まれなかつた。當時、茶園は官有財産で私人企業者に賃貸され、生産された茶は總て一定の價格で政府に引渡されることになつてゐたが、その際、數量のみが注目されて品質は問題にされなかつた。これでは業績の擧らないのが當然で、一八六〇年政府獨占を廢止し六五年には全く官營をやめて了つた。政府の損失は六百萬盾に上つたといふ。一八六〇年の生産高八千萬匁と云はれ、政府買上價格は一匁一・四〇ギルダーであつた。

併し民間企業の方も最初の中は餘り香しい成績を示さなかつた。これには植付けた土地が悪かつたことや準備の不足などもあつたが、役人が官營珈琲に悪影響を及ぼすことを恐れて、之を妨碍したことも大きな原因となつてゐる。一八七〇年の農業法の制定が多少の好影響を與へたのは事實であるが、その發展は頗る緩慢であつた。然るに一八七七年に初めて爪哇茶がロンドン市場に賣出されたが、英國人は直ちにその商品の缺點を指摘し、製品改良に關して多大の注言を與へた。同時に支那茶よりも印度のアッサム種（アッサムとはヒマラヤ南面の州名）が優つてゐることに氣付き、翌年その種子を爪哇に輸入し種々改良を施したのである。爾來、アッサム茶は漸時に支那茶を

驅逐し現在では殆んどアッサム茶のみが栽培されてゐる。（このアッサム茶の輸入に就いてファニヴァルは一八七三年と書いてあるが、Netherlands Indies（一九三七年三月號）の記述の方が精しいから、こゝでは之に據ることとした）。アッサム茶になつてから爪哇茶の名は漸時世界市場に擴がり栽培も順調に進展して行つた。その躍進振は左表の示す如く相當のものであつた。

爪哇に於ける茶生産高	
一八六〇年	約 八〇〇噸
一八八五年	約 二、五〇〇
一八九五年	約 四、九〇〇
一九〇五年	約 一二、〇〇〇
一九一一年	約 二五、〇〇〇
一九一五年	約 四〇、九〇〇

右の表を見られると一九一一年は特に飛躍してゐるが、これは一九一〇年の茶ブームの結果で、この年は獨り爪哇だけでなく、蘭印全體の茶が大發展をした年である。茶の栽培は自然條件に特に支配されるものなので、爪哇では西部爪哇に集中して居るが、外領ではスマトラ東海岸に多い。スマトラ東海岸のデリを中心とする「エステート地帯」は敢て煙草と茶に限らず、各種のものが栽培されてゐるが、茶園の發展に就いては一九〇〇年頃英國資本が入つて來たことが大いなる貢獻をなしてゐる。左にこゝ數年の狀況を示して置く。

栽培面積 (ヘクタール)	生産高 (メトリック噸) (乾燥葉) %		
一九三五年	一三八、二二一	七一、四一五 (一二、六二二)	一七・七
一九三六年	一三八、七五〇	七五、五八一 (一二、六二九)	一六・七
一九三七年	一三九、〇三四	七四、五一六 (一二、一七〇)	一六・三
一九三八年	一三八、三一九	八〇、五三八 (一二、二六〇)	一六・〇
一九三九年	一三八、三八八	八三、一五九 (一二、五四八)	一五・六

(註) 括弧内数字は土人よりの買入葉額及全生産高に對する%

(ハ) キ ナ

キナもハル君の話に出てくる。キナの事を Cinchona といふが、この名の起りは一六三八年時の南米ペルー總督 Chinchona 伯夫人がマラリヤに罹り、このキナで治癒した爲め之を歐洲に紹介したからだといふ。この話でも解る通り、南米が原産地で、蘭印でも非常に之を欲しがつたが、南米諸國はキナ樹及種子の持出を許さない。やむなくポイテンゾルフ植物園のハスカールが變名してペルーに入込み、一年餘も採集に従事して得た種子が、今日世界の九割を産する蘭印規那のもとになつたのである。併しハスカールが採取した種類と現在のものとは異つてゐる。現在主として栽培されてゐるのはレッゲエリアナ種で、チャールズ・シツチャーがボリヴィアで集めた種子を、たつた百盾で蘭印政府に賣却したものから成育發展したのである。この種子をユングフーン等の學者、技術者が苦心して育てあげたのである。キナに限らずゴムにしても之亦南米原産のものを非常な努力で仕立上げたものである。蘭

印の資源を云々する時その蔭になされた政府及當事者の粒々たる辛苦を吾々は忘れる事なく、彼等に依つてかゝる資源が造出されたことを感謝しなければならぬ。

規那皮は現在では規那樹を伐倒して皮を剥ぎ、根は之を小刀を以て削るのである。規那皮から規那涅が作られるが、その製法は秘密にされてゐる。世界中で規那涅を作つてゐるのはキニーネ・トラストに加入せる十數個の工場に限られ、和蘭には三工場あつたが現在はどうなつてゐるか。農園規那皮生産高は左の如くである。

一九三六年	九、八七九千疋
一九三七年	一〇、四二五
一九三八年	一〇、九五五
一九三九年	一二、三九一

西部爪哇には土着人の栽培してゐるものが少量存在する。キナの生産及輸出は價格の低落を防ぐ爲め制限が設けられてゐる。左に輸出に關する統計を掲げて置く。

キナ皮及キナ輸出高	乾燥皮 (單位疋)	キニーネ (單位疋)
一九三五年	六、四九八、八二八	一〇一、九一七
一九三六年	九、〇六二、〇八〇	一九二、〇五八
一九三七年	六、三四四、九四四	二〇七、七八六
一九三八年	六、九五七、〇四二	一八二、二八七

一九三九年	六、三九三、五五三	一九三七年	一六三、三四八
キニーネ輸出先及輸出高(單位、担)			
和蘭	一九三五年 六二、三七五	一九三六年 一六二、〇一八	一九三七年 一六九、八四六
歐洲大陸	一二、五〇〇	—	九〇五
支那	一一、八八三	一三、八九六	一〇、四八九
日本	四、〇〇四	七、二四一	七〇九
英領印度	四、〇七七	四、六六七	一六、八二六
タイ	三、六四〇	一、九六九	三、一七〇
比律賓	一、三三三	一、〇六一	一、四九三
其他	二、一〇五	一、二〇六	四、三五八
計	一〇一、九一七	一九二、〇五八	二〇七、七九六

右の輸出表をみると米國が入つてゐないが、これは和蘭から送られた爲めである。ハル君が四角張つてゐる間に肝心の和蘭が妙なことになつて了つたのは一寸皮肉な氣がする。

第四項 人口過剰と灌漑施設

米作を主とする東洋民族の經濟及び社會生活にとつて、灌漑問題が最も重要な意義を有することは、例へば支那に

就いて明にされてゐる。同じく米作民族たるインドネシアンにもこれが適用されることは、灌漑が實に古くから行れてゐる一事を以ても容易に推測されるのであるが、私の研究は未熟でこの問題を論じ得るまでに至つてゐない。依つてこゝでは現在の施設の一斑を述べるに過ぎないが、現今爪哇で灌漑問題が特に重要なのは、單に地理的理由からばかりでなく、人口過剰問題に絡んでゐるからである。

凡そ人口過剰問題が議せられる時、定つて持出されるのは人口密度であるが、爪哇でもその通りである。成程、爪哇及マドラの密度は高い。一平方呎に付、三一五・六三人となつてゐる。多いところではスラバヤの五三九・九八人、ジョクジャカルタの四九一・九九九人、ベカロンガンの四六八・四四人、ケヅの四五七・〇六などで確かに密度は高い。この巨大な而も増加の急速な人口を如何にして養ふか。輸入貿易統計にみるも、食料の不足は争へない事實である。そこで第一の問題は如何にしてこの不足を補ふかである。考へられる道は耕作面積を擴張するか、收穫率を高めるか、それとも人口を外へ出すかこの三つ以外に出ない。然るに政府及政府的意見によると、爪哇に於ける耕作面積の餘裕は三十萬ヘクタールに過ぎないから、たとへ之を擴張するとしても、要するに焼石に水で、増加し來る人口に食料を與へる源泉としては不充分極るものだといふ。では收穫率の増加は如何といふに、この點でも多くの期待はかけられないと云ふが、これは必ずしも無條件には受入れられない。どうしてもこゝで爪哇の農業特に米作の技術が問題となつて來る。水稻と陸稻の收穫に大差あることは前述した通りだが、裏作の問題もあるし、逆に米が裏作になつてゐる場合もあるから、たとへ灌漑の問題を度外視しても現在の陸稻栽培地を盡く水田たらし

めることは出来ないが、それにしても灌漑施設の改良と擴張とによつて増収を圖り得る餘地は非常に多い。更に肥料其他の問題に至れば、土人生活の貧困が農業技術の向上を阻止してゐる點が充分に觀察され、かくて農業技術と増産の問題とは社會的富の分配問題に歸着し、人口過剩問題を單に人口密度と食料生産高とで理解しようとする技術的人口論の誤謬が明となる。もつと突込んで云へば、人口過剩問題とは實は貧困問題の別名に過ぎないのであるが、爲政者は常に之を回避し、飽くまで「人口と食物の問題」として了ふ。ではあるが肚の中では承知してゐるのだから、爪哇でも灌漑には随分と金を使つてゐる。尤も爪哇の政府事業の灌漑は甘蔗農園の爲めに行れたものが多いことを知つて置かねばならない。いづれにしても政府側の意見として收穫率の増加が困難とすれば、残るところは外領移民であるが成績は餘り香しくない。數字の上からでは外領の一平方軒當り人口は僅かに一〇・七三で爪哇及マドラの三十分の一近くである。多少とも人口密度の高いのはバリ及ロムボックの一七五・一八人ぐらいなものである。従つて机上の計算としては充分過ぎる餘裕があるし、氣候なども大して變化がある譯でなし、何故移民が成功しないかは私には充分理解出来ないし、亦、背筋に當る議論にも出會はない。爪哇人が故郷を離れたがらない事なども一因に數へられてゐるが、恐らくそれのみではあるまい。ジャングルを開拓する事の困難さや政府貸付の返済問題などいろ／＼な經濟問題がその背後にあるのではなからうか。併しともかくも移民は行れて居り、或程度の効果は擧つてゐる。ところでこの移民を行ふには移住地に水田を作り得る様にしないと、移民が喜ばない。かやうな意味からも灌漑問題が非常に重視されてゐる。

爪哇に於ける灌漑の起源は遠く古代の狹霧の中に蔭れてゐる。灌漑の遺跡として残つてゐるのはヒンヅー時代のものであるが、それ以前からあつた事は言語學上から證明されてゐる。かうした極く昔の話は別として、東印度會社時代にバタヴィアからウエルフレードンに至る運河が一七五三年に造られてゐるが、これは元來舟楫の便を目的とするもので、農耕に用ゐられたのは偶然の事に過ぎない。

多少とも大規模の灌漑施設が發達したのは、ボツシユの強制栽培制度によつて、甘蔗及藍の栽培が擴張されてからである。その一々に就いて敘する餘裕はないが、例へば一八四六年ケドウニカンダン水路に要する堰堤（長さ四七〇米、高さ六〇米）を築造せる時の如きは、使用土人延數八十萬人に及んだ。

一八五四年土木局が設置されるに及んで、灌漑施設事業は漸く本格的となり、工事の方法も歐洲化して來たのである。

原則として爪哇の河川は乾期には殆んど水が無い位だが、雨期にはバンジルと呼ばれてゐる洪水が襲ふ。而も熱帯の雨は激烈であるのに土は火山土であるから脆弱である。之が爲めに河川の運ぶ泥土の量が非常に多い。そこで河川の水を季節的に調節して灌漑することは、水と肥料と双方の點から見ると一石二鳥といふ譯である。

米作のところでは述べた如く、非灌漑水田の場合は、水は全く御天氣次第である。爪哇では降雨量は豊かであるが、その配分は必ずしも米作に好適に行くとは限らない。特に平原地方では左様である。濕潤モンスーン期に於ても幾日も降雨を見ない事がある。若し乾天十二日に及べば非灌漑田の作物は枯死の憂目に逢ふ。この意味から云つ

て雨期に於ても灌漑設備の必要があるのである。従つて土着人自らも種々に工夫して之を行つてゐる。

土人灌漑は石、木幹、竹等を材料として堰を作つてあるが、もとよりかゝるものは大洪水の暴威に抵抗し得べくもなく、屢々非常な損傷を蒙り又は全然破壊されて了ふ。亦、土人施設のダムはその水を配水溝の取入口が開放されたまゝである。之が爲めに、増水時に多量の水が流入して之を損ふ。或は又、誘水溝が相當の河路と交錯する場合には土人は之を技術的に處理し得ないので、代りに放出された水をダムで引かねばならないが、之亦、豪雨に際して誘水溝を傷ける。排水に關しても、水田から排出された水は多數のダムによつて排水溝から引出され、これを通つて再び他の田を灌漑する。然るにダムは不用水の適當なる排除を阻げ、その結果、特に平野では重土の灌漑が不適當となり、收穫に悪影響を及ぼすのである。

併し灌漑に對する土人の執着と努力は非常なもので、爪哇に於ては凡そ彼等の力で之が施設を爲し得る處では悉く行はれてゐると云つてもよい程で、爪哇及マドラに於ける土人灌漑面積は百五十萬ヘクタールに達する。従つて爪哇で新しく灌漑施設を施して相當の効果を收めんとすれば、今日では歐式施設に依る外はない。

歐式灌漑施設で多少とも重要なものが始めて設けられたのは前世紀中葉で、ブランドス河のシドアルジョ三角洲に於ける三萬四千ヘクタールの水田に對するものであつたが、工學原理に基く本格的なものは一八八〇年代のデマク灌漑施設を最初とする。これは約三萬三千八百ヘクタールの地域に完全な灌漑及排水施設を施さんとしたのである。この邊の土地は一體に濕潤で郵便路確保の爲に運河がつくられてゐたが、一八四八—四九年には凶作の爲めに

二十萬以上の土着人が死亡したと云はれる。これが發端となつて四十年後にはあるが九百萬盾を費して成つたものである。之を嚆矢として現に行はれてゐる灌漑施設の重要なものを挙げれば以下の如くである。

施設地	島名	灌漑面積(ヘクタール)
チウジヨン	爪哇	三一、八〇〇
チサダネ		四〇、五〇〇
チタロム		七〇、三〇〇
チマナツク		九二、五〇〇
ブマリ		三一、二〇〇
スラユ		一九、九〇〇
シドアルジョ		三四、〇〇〇
バル		二四、〇〇〇
ワイスカンボン	スマトラ	四二、六〇〇
サダン	セレベス	六三、九〇〇

蘭印全體の人工灌漑田面積は不明であるが爪哇及マドラに就いては一、二〇三、八五三ヘクタールある。

之を費用の點から見ると、政府が一九三八年末までに灌漑、排水、洪水防止施設の爲めに費したものは約二億四千五百萬盾に及ぶその中四千二百萬盾は一九〇〇年以前に支出してゐる。而して之等の數字には既存施設の維持費及修理費並びに常備官吏の俸給は含まれて居らぬ。之を爪哇及マドラと外領とに分けると、前者が二億二千八百萬

盾、残りが後者である。爪哇及マドラ（王領を除き）の科學的灌漑を受けてゐる水田は百二十萬四千ヘクタールであるから、平均費用は一ヘクタール當り百九十盾となつてゐる。尙、こゝで王領を除いたのはスラカルタ及ジョグジャカルタの科學的灌漑は國庫負擔となつて居らず、従つて前記の金額中に入つてゐないからである。

外領の同様費用は一千七百萬盾に過ぎないが、これは外領への移民計畫と關聯してゐる點が注目に値する。

度々述べた如く、爪哇農民は生地に非常な執着を持つてゐるが、生活苦の壓迫はこの執着を押切り、多數の極貧者が農地を求めて爪哇の中で比較的人口の稀薄な地に移動する傾向があつたが、この際彼等が灌漑施設の行はれてゐる地方又は之を行ひ得る地方にのみ移動する事實に鑑み、政府は之等地方の灌漑施設に大いなる努力を拂つたけれども、結局餘地に乏しい爪哇ではこの方法にも自ら限度がある。然るに外領ならば土地は廣大にして人は少い。従つて灌漑施設を行へば爪哇貧農を收容する餘地は無限と云へる程である。そこで一九二九年からスマトラ及セレベスに灌漑事業を施行して居る譯である。この外、地方農民の爲の灌漑擴張事業も行はれてゐる。

以上が灌漑事業の大要であるが、土人灌漑は別として、政府施設のものもは少くとも甘蔗農園の多い地域のものに關する限り、之と不可分の關係に在ることを一言せねばならぬ。或筆者の如きはかゝる地域に在るものは何等農民の福祉を對象とせず偏ら甘蔗農園の利益を慮つて造られたものと云つてゐる。これには事情があるので、土人は一八七〇年の印度土地法によつて、家屋、工場其他の建築用地としての狭い面積以外は、自己の所有地を外人に讓渡出來ない事になつてゐる。従つて甘蔗農園用地は土人から賃借しなければならぬ。然るに甘蔗は乾期に植付けて

次の乾期に收穫するのだが、西モンスーン期は米作の爲めに借地を利用出來ない。しかも政府は米作確保の必要上甘蔗栽培面積を普通に輪作法が必要とするよりも狭くせねばならなかつた。その結果、糖業者は集約耕作を行ふのだが、それには東モンスーン期の灌漑が絶対に必要となつてくる。従つて喜んで之が施設費の分擔をする事が多いので、勢ひ甘蔗地域に灌漑施設が多いことになるのである。甘蔗農園の灌漑は水溝から水を汲上げ之を作物に灌水する方法で行はれてゐるが、この作業は晝間にやるのが宜しい。そこで水の乏しい地域では所謂「晝夜法」を採用するに至つた。之によると晝間は甘蔗農園に給水し、夜間だけ土人耕作者の自由にするのである。不公平も甚だしいので近頃は溜池を作り、夜間にこゝへ水を溜め、晝間に之を配水溝へ送る方法が所々で採用されてゐる。

右の如く、灌漑事業は非常に重要なので、爪哇では灌漑行政も整備され、數個の灌漑區と機關とが設けられ、この事業を擔當してゐる。

第二節 資本ルートとしての農業

蘭領印度の經濟的發展が貿易資本の刺戟に依つて開始された事は屢々前説したところであるが、内部開發といふ點から見る場合、開拓事業の眞の擔當者は和蘭農業資本であつた。併し蘭人農業は最初から世界商品の生産を目指し、従つて大經營として成立したが爲め、その要する資本も、亦、自づから巨額であり、蓄積資本の無い蘭印が之

を賄ひ得る筈はなく、盡く和蘭本國からの輸入に俟つ外無かつた。かくて農業は資本の最初にして最大のルートとなつた譯である。併し何分にも地は本國から遠く、事は不馴れな熱帯農業である。幾多の技術上及經營上の困難が襲來したに拘らず、和蘭人と和蘭資本とは不撓の精神と果敢なる氣魄を以て之を凌ぎ、遂に後年の隆昌を招來したのである。固り本國の力に俟つものであつたが、同時に現地に在つて事に當つた人及機關の功績は没す可くもない。就中、クルチュール・バンクは現地機關の中核をなしたのもとして、亦、農業資本の活動機關として蘭印の農業及資本の發達といふ見地から見ても、最大の役割を遂行したものである。現にそれは蘭印エステート農業の柱石であり、之無くば世人の云ふ「蘭印農産資源」の生産は絶対に維持され得ない。日本が何等かの意味で蘭印農業の發展を考慮するに至る時、先づクルチュールバンクが注目せられなければならない。この意味をも含めて、以下少しく詳細に之が發達の跡を辿り度いと思ふ。

(1)

クルチュール・バンクとして數へらるべきものは和蘭貿易會社、蘭領印度商業銀行、蘭領印度農事會社、アムステルダム商事會社、王領地農事會社、ロッテルダム國際金融會社及びコロニアル・バンクの七行に達する。その業務は一般農業金融を行ふことは、吾國の農業銀行と異ならないが、その外に、自ら農場を經營する點が特徴をなしてゐる。その限に於て東拓と殆んど同じであり、亦アムステルダム商事會社、コロニアル・バンク、蘭印農事會社

及王領地農事會社の四行はこの通りであるが、更にこの外に、貿易業務や普通銀行業務を營んでゐるものがある點に於て、東拓と異つてゐる。

かゝる特異な經營内容を有する所以の一端を明かにする爲めには、蘭印銀行發達史の一斑を敘述しなければならぬ。

和蘭が蘭領印度に手を出し始めたのは十六世紀末のことである。その後、歐洲政治情勢の變化に依つて、或は佛領となり或は英領となつたことはあるが、いづれも短期間であつた。第十六第十七世紀といへば歐洲に商業資本主義が榮えた時代である。従つて本國と蘭印との經濟關係は貿易關係であり、活動せる資本は貿易資本即ち商業資本にすぎなかつた。一六〇二年に設立された和蘭東印度會社の活動振はかゝる事情を端的に反映せるものであつた。要するに一七八九年にこの東印度會社が商業資本の役割を果し終へて消滅した後は、和蘭資本はこゝに産業資本に變質して蘭印の内部開發に向はねばならなかつたし、事實、向つたのである。

併しかゝる轉換が本格的に實現されるまでには少くとも五十年の年月を要し、一八三〇年に於けるファン・デン・ボツシュ總督の強制栽培制度以後に至つて漸く實現されたものと考へられる。

ボツシュの強制栽培制度は實に蘭印農業生産に飛躍的な基礎を與へたものであり、従つてその經濟的價値が高く評價されるのは當然であるが、同時にボツシュに至るまでの政策動搖期に於ける各種の施設が、ボツシュの政策をして効果を擧げしめる基礎となつたことを忘れてはならぬ。往々にして「強制」が力説されるけれども、蘭印に於ては

強制生産そのものはポツシュに依つて創始されたものでなく、以前から存在してゐたものであるし、強制といふ政治的方法のみがそれ程の生産効果を挙げたものゝ如くに考へることは、餘りに單純である様に思へる。

ポツシュ政策に於て重要視すべきは、生産力發展策が組織的に大規模に行はれた點にある。それが強制耕作といふ「勞力政策」に集中されざるを得なかつたのは、一に産業資本の缺乏に依るものである。この産業資本の缺乏は政治的事情に基く和蘭の困難と、當時の蘭印經濟が多くの「収益」を示さず、爲めに本國産業を吸収出来なかつたことに依るものである。さればポツシュ政策に於ける資本の活動も依然として商業資本の範疇内に止つゐた。そのことは強制栽培に對する貿易會社の關係に良く現れてゐる。強制栽培制度の根本機構は、土人耕作地の五分の一に一定種類の輸出向農産物を強制的に栽培せしめ、之を政府が無償で收得して、和蘭貿易會社に委託販賣を行はせるのである。之に依つて和蘭貿易會社は手數料を獲得し、蘭印政府は利潤を收得するのである。

然るに強制栽培制度と雖も相當に巨額の費用を要する。この費用は強制栽培の利潤から支出される仕組ではあるが、その方法は引渡農産物を引當に蘭印政府が和蘭貿易會社から前貸を受ける。然るに漸次に「當座貸越」の金額は増大して行く傾向を示したのである。この前貸は一八三三年に始まるもので、この時が貿易資本が産業開發に乗出した時と云へるのであり、この意味に於て和蘭貿易會社は蘭印拓殖銀行の草分けと稱せられるのであるが、かゝる傾向が本格化したのは一八五三年以後の事である。これは同年に蘭印政府と同會社との契約が更改されるに當り、蘭印政府が農産物の一部を爪哇に於て賣捌き得ることゝなつたのみならず、政府が努めて同社よりの前貸を引

渡農産物の代價の範圍にとゞめて「當座貸越」を避ける態度に出たことに基く。之が爲めに會社は新たに投資の途を求めなければならなかつたが、恰もよし、私的農企業が次第に發達し來つて資本需要が頗る旺盛となつたのでこゝに和蘭貿易會社の資本は私的企業に投資されることになつた。一八六一年には既に十七個の精糖工場と及び珈琲その他の栽培企業に投資するに至つてゐる。

和蘭貿易會社の擧げた好成绩は直ちにこの方面へ和蘭資本を惹き付け蘭印割引銀行（一八五七年）ロツテルダム銀行、蘭印商業銀行、國際貿易會社が相次いで設立され、更にチャータード銀行のバタヴィア支店（以上、何れも一八六三年）も開設され、六八年には初めて個人ビルの取組が行はれるに至り、かくて一八七〇年までに蘭印農業金融制度は一應の完成を見たのである。

右の成立事情中、蘭印割引銀行を除く他のものが一齊に一八六三年に設けられたのは、當時資金需要が頗る熾んで爪哇銀行は兌換券發行制限額を七百萬盾から千二百萬盾に引上げ、和蘭貿易會社及び蘭印割引銀行も大いに融資に努めたが到底需要を充し得ず、爪哇銀行年報は「銀行の流動資金も剩すところ極めて僅少なり」と訴へ、遂に六二年十月十八日を以て爪哇の貿易業者等は「資金缺乏の救済」を知事に建議するに至つた。そこで一八六三年に諸行の一齊創立を見たのである。

右を以て拓殖銀行成立の第一期と看做するのであるが、かゝる銀行の發達をなさしめたと同時に、之に依つて發達せしめられたる産業は何であるか。

和蘭貿易會社にあつては最初は蘭印政府の委託販賣を支柱として發達したが之のみに依頼出來ず、結局企業投資に向つたことは一言した通りで、之を拓殖會社全般に就いて言へばその企業は糖業だといふことが出来る。ポツシュエ及それ以後、珈琲、煙草、藍等の栽培にも大いに努力したが、第一期銀行創設期にあつては充分の效果舉らず、却つて政府及拓殖銀行ともに之によつて莫大な損害を蒙つたのである。然るに糖業のみは駭々乎として發展を示すこと左表の如くであつた。

	一八四〇年	一八五〇年	一八六〇年	一八七〇年
栽培面積(ヘクタール)	三一、二〇〇	三二、六〇〇	三四、三〇〇	三七、八〇〇
生産高(千疋)	四七、〇四〇	八六、五一〇	一三六、八八九	一五二、五九五
收穫高(ヘクタール當り疋)	一、五〇八	二、六五四	三、九九一	四、〇三七

この糖業の股盛が和蘭貿易會社の經營業績に如何なる貢獻を示したかを明確に知り得るならば、蘭印拓殖銀行の發達に對する糖業の貢獻を判然と示すことが出来るのであるが、不幸にして同社の定期年報は一八七五年に至つて始めて發表されたが爲めに、之を爲し得ないのは遺憾である。従つて糖業と拓殖銀行との關聯を精確に示し得るのは後者發達の第二期からである。

(II)

一八三六年までを以て蘭印銀行立成史の第一期とすれば、第二期は一八八一年迄である。即ち一八八七年にはア

ムステルダム商事會社 (Handelsvereniging Amsterdam) が拂込資本百二十五盾を以て創立され、八〇年には香上銀行がバタヴィアに支店を設け、八一年には拂込資本五百萬盾の殖民銀行 (Koloniale Bank) が設立され、これで蘭印の銀行は一應出揃つたことになるから、一括してみると

- 爪哇銀行 (一八二八年)
- 蘭印貿易會社 (一八二四年)
- 蘭印割引銀行 (一八五七年)
- ロツテルダム銀行 (一八六三年)
- 蘭印商業銀行 (一八六三年)
- ロツテルダム國際信用商事會社 (一八六三年)
- アムテルダム商事會社 (一八七八年)
- 殖民銀行 (一八八一年)
- チャータード銀行 (一八六三年)
- 香上銀行 (一八八〇年)

右の中、最後に掲げた英國系二銀行を除けばいづれも直接間接に農業企業に多大の關聯を有したのである。

銀行發達の第一期と農業發展との關聯に就いては前に一言したが、第二期の發達も亦同じく農業の發達と不可分

の関係にあるもので、殊に第二期に於ける農業發展は、明確に蘭印農業の近代化を示す時期であるから、一言して置かねばならない。

和蘭が東印度の殖民事業に手を出して以來或は和蘭東印度會社の手に依り、或はポツシユ其他の總督の手に依り蘭印に發達を期待した主要栽培業は珈琲、藍、胡椒、肉桂、煙草、甘蔗の六つを數へるが、この中煙草、藍、胡椒、肉桂の四者は官の努力を以てしては遂に充分の成績を挙げ得ず、爲めに前二者は一八六四年に、他の二者は翌六五年に或は官營を廢止し、或は民間に之を開放して了つた。茶に至つては既に一八四二年に全島の茶樹を民間に讓渡し、單に生産物を政府に交附せしむる方法を探つたが依然成績擧らず、遂に一八六〇年政府は全然斯業から手を引いて了つた。よつて残るところは珈琲と甘蔗だけになつた。

珈琲が爪哇に傳來したのは十七世紀の初め頃であるが、珈琲樹が爪哇に輸入されたのは同じ世紀の末年たる一六九六年及九九年と云はれる。越えて第十八世紀の第十二年に初めて四四七疋の爪哇珈琲が和蘭市場に現れた。後、強制栽培が施行されたが、東印度會社が消滅し、英人ラツフルズの統治下に於てはプリアンガ州以外強制栽培を廢止し、珈琲栽培地は之を國有として賃貸する制度に改めたが、ポツシユ時代となつて再び栽培及生産物の政府引渡が強制され *Te Vrije* の推定では強制栽培に従事せる土人家族數の五％が珈琲栽培を行ひ、ヘルフェリツヒに依れば生産高も一八七〇年には百十四萬六千擔を超えてゐる。従つて政府の収入も多大なる爲め、強制引渡の形式に依る政府珈琲業は容易に廢止されず、やうやく一九一七年のプリアンガ州に於ける強制の廢止で幕を閉じた。

併し政府の強制制度の繼續は必ずしも民間事業としての珈琲栽培を禁止したことを意味しない。寧ろ政府は漸次に之を自由企業に轉換せしむる方法を講じたので、後述する甘蔗と共に拓殖銀行の投資對象となつたのである。

併し栽培業が民間企業として發達するには一つの大きな障礙があつた。それは地權に關する問題であつたが、之一八七〇年の印度統治令及爪哇直轄地に對する土地令で解決した事は前述の通りである。

之と共にもう一つの重要な法令が發せられた。それは砂糖法として知られるもので、その規定によつて官營甘蔗栽培は以後擴張せざるのみならず、既存のものも一八七八年以降毎年十三分の一づゝ之を縮少し一八九〇年を以て全廢されることになつた。

以上二つの法令が民間農企業に大いなる安定性と將來性とを與へたことは説明するまでもないことで、これと銀行發達の事實とを併せ考へるならば、後者の經濟的理由は洵に明白と云はねばならぬ。

次に之を具體的に説明すると共に、蘭印拓殖銀行の本質を明にする爲め、重要な諸行に就いて記述しようと思ふが、先づ八三年までの動向を述べよう。何故ならば翌八四年爪哇糖業は颯風的恐慌に襲はれ、之が爲めに拓殖銀行再編成を餘儀なくされたからである。

和蘭貿易會社——一八二四年に設立された和蘭貿易會社は、前にも一言した如く本來貿易會社であり、ポツシユの強制栽培制度の主要なる一翼として蘭印生産物の獨占權を與へられたものであつたが、一八五〇年頃から漸次に拓殖銀行たる一面を備へるに至つた。

この銀行の設立は和蘭東印度會社の解體によつて衰微の一途を辿つた對蘭印貿易を復興せんとする國策的目的に出でたものであり、従つて創立に際してはウキルヘルム一世自ら之を援助し、政府は一定年限の間配當を保證し、會社主宰者の任命は國王の特權としたる等、國策會社の色彩が頗る濃厚であつたに拘らず、會社經營に關しては實に自由を許し、國策會社に往々見る如き官僚的又は政治的干渉を殆んど加へなかつた點は、以て偉とするに足るものがある。それも會社の業績が當初から見れば別であるが、少くとも最初の五十年間は決して名譽あるものでなかつた。最初の拂込資本金三千七百萬フロリンといふ當時としては異例の巨資を擁したに拘らず、僅かに六年後の一八三〇年には二千一百萬フロリンに縮少せざるを得なかつた程の損失を重ね、纔かにポツシュ總督によつて與へられた「獨占」の手數料によつて救はれた有様であつた。

其後ポツシュ政策の漸廢と共に、會社は自己計算によつて貿易業務を擴張する一方、收穫に對する前貸や民營農企業生産物の委託販賣等に手を出し、之より導かれて企業の贊助、共營へと進み、次第に拓殖銀行の態様を備へるに至り、やがて「拓殖部」の設置を見ることゝなつた。

之によつて同社の營業は政府生産物の委託販賣、自己計算に依る輸出入業及拓殖關係の三本立となつた譯であるが、その中、自己計算による輸出入業務の成績は一八七五年八二年の間に於て尠からず損失を生じたものと推定され、一八八四年を以て蘭印よりの輸出業務は他店よりの委託に限り、輸入業務は全然廢止してゐる。

(註一) 註 右推測の基礎たる數字は左の如くである。

年	輸出	輸入
一八七五年	(+) 一一一、〇〇〇	(+) 一三七、〇〇〇
一八七六年	(-) 一四七、〇〇〇	(+) 五〇、〇〇〇
一八七七年	(+) 九七、〇〇〇	(+) 一〇〇、〇〇〇
一八七八年	(-) 六九六、〇〇〇	(+) 六三、〇〇〇
一八七九年	(+) 一一三、〇〇〇	(+) 八六、〇〇〇
一八八〇年	(-) 三八五、〇〇〇	(+) 七二、〇〇〇
一八八一年	(-) 一七七、五〇〇	(+) 六四、〇〇〇
一八八二年	(-) 三八三、五〇〇	(-) 二四、〇〇〇

(+) 利益 (-) 損失 單位 フロリン

之に反し政府生産品委託事業に於ては、同期間に四億五千フロリンの巨利を擧げてゐる。然らば問題の拓殖事業は如何。

既に一八七五年に於て同社は自營農場七、共營農場四、委託契約を結べる農場三十を數へるに至つてゐるが其内譯は左の如くである。

自營	共營	委託契約
珈琲四、藍一、煙草一	甘蔗三、珈琲一	珈琲五、甘蔗二十七、煙草三、香料二、茶二、苧麻一

之を資本的に見ると一八七五——八二年の八ヶ年平均で、企業投資三百九十萬フロリン、貸付七百萬フロリンに達する。これから生じた損益計算を明かにすることは出来ないけれども、煙草、珈琲、藍、に就いては、その數個を放棄した點から見て決して有利であつたとは考へられない。之に反し糖業は有利であつたものの如く、關係企業數を増加してゐる。全體としては漸次に緊縮方針を採用し、事業の堅實化に向つて努力した跡は歴然たるものがある。この結果として一八八年末に於て、拂込資本三千五百萬フロリンに對し拓殖投資は七百萬フロリンに過ぎず、別にその年から銀行業務をも開始してバタヴィア支店は二百三十萬フロリンの預金を擁するに至つてゐる。かゝる餘裕ある状態を以て同社は恐慌を迎へたのである。

蘭印商業銀行

一八六三年に於ける蘭印商業銀行の設立が如何なる情勢に基くものであつたかは、既に概要を記述したからここには省略することとして、公稱資本金千二百萬盾（拂込資本は六四年から六七年まで九百貳萬五千盾）なる此の銀行は、前述の和蘭貿易會社の如く國策的色彩を帯びて出現したものでなく、純然たる企業精神に基くものである。加之、當初から拓殖銀行として生れた最初のものであるといふ點で重要視されねばならない。その創立條款を見るに設立目的として左の五つが擧つてゐる。

- 一、廣義に於ける銀行業務
- 二、農拓事業及之に關聯ある企業に對する貸付業務
- 三、商工業其他一般の利益を増進すべき企業の發起、設立及援助

四、不動産又は法律に依りて不動産と認められたるものを保證低當として低當證券を發行すること

五、東印度物産の賣買

この外にピリトン鑛業會社及和蘭汽船會社の代理業をまで引受けたのである。

然るに純然たる銀行業務及貿易業務は頗る振はず、就中後者の不振甚だしく遂にこの方面から手を引くに至つた。之に反し拓殖事業は非常な繁榮と擴張とを示してゐる。之を二、三の數字で略示しよう。

一八六九年末

糖業八、煙草農場三、珈琲農場五、藍農場六、茶農場三、伐木業二

一八七三年末

糖業十、珈琲農場八、茶農場三、藍農場五。交附されたる生産物高は

砂糖十八萬八千擔、珈琲十五萬六千擔、茶六十六萬七千封度、藍三千九百九十封度

一八七七年

糖業十七、珈琲十七、珈琲農場十一、茶農場五、其他多數の煙草及香料農場。交附されたる生産物は

砂糖三十一萬五千擔、珈琲二萬八千擔、茶九十八萬封度、煙草三百萬封度

一八八三年末

糖業二十九、珈琲農場二十、茶農場四、其他數種

交附されたる生産物

砂糖九十二萬五千擔、精製珈琲三萬一千七百擔

穀付珈琲二萬二千四百七十擔、茶七十六萬七千一百封度、規那皮十一萬八千二百封度

ではかゝる發展は如何にして得られたか。蘭印の拓殖業務の遂行によつて生ずる利益は大體三種ある。第一は貸付利子（當時は平均年利七分五厘）、第二は委託販賣の手數料、第三は自營又は贊助企業よりの利益配當である。蘭印商業銀行が拓殖業務に對する放資金額は一八六七年末に於て四十萬九千フロリン、七四年末には五百七十一萬二千フロリンに達した。これから何程の利益を擧げたかは、損益勘定が不備な爲め之を明示し得ないが、創業後十ヶ年の配當は平均五分五厘にとゞまり、他面積立金も僅少な點から見ても、満足すべき結果とは言ひ難いと思はれる。これは主として伐木業、規那、煙草、リベリア珈琲等の新規作物の不成績が多額の缺損を生じたるによるものである。

そこで銀行當局の往くべき道は有利な事業のみに専念する消極策か、將又、捲土重來の意氣を以て失敗事業の回復を圖る積極策かであるが、當局は敢然として後者の道を選び、或は社債を發行し或は持株を賣却して資金を作り一八八一年末には資本と社債を合して一千七百三十萬六千フロリンの巨資を擁するに至り、之を縦横に驅使して着々拓殖業務を擴張し、前記一八八三年末關係事業表に示した如き大發展を敢てしたのである。

併し事業成績の内容を検するとき、その發展は少くとも一八七七年以後に於ては可成り不健全なものがあつたこ

とを見逃せない。ヘルフェリツツの形容に従へば、それは「止むを得ざる前進」であつたと云へる。即ち一方に關係企業を増加すると共に、他方には事業の廢棄を行はざるを得なかつた。依然として煙草業務は振はず、見るべきものは甘蔗糖業のみといふ有様であつた。一八八三年末に於ける拓殖事業投資は一千五百萬盾を算し、加ふるにアムステルダム本店には十二月までに支拂ふべき手形が一千五百五十萬盾あり、之に對する手元流通資金は半ば印度に於ける會社に對する債權をも含めて七百五十萬盾しかなかつた。

然るに糖價は既に八三年の下半期に低落し始め、銀行は果卵の狀況に置かれた儘で八四年の恐慌渦中に投ぜられたのである。

コロニアル・バンク 一八八一年の創立にかゝるコロニアル・バンクは二つの特徴を以て生れた。第一に純然たる拓殖銀行として設立されたるに拘らず、農業金融（運轉資金の融通及生産物に對する前貸）と保管及管理業務に自己を限定せんとし、自營又は共同經營に依る農企業經營は之を認めず、自己計算の貿易業務の如きも禁ぜられてゐた、第二に、他社と異り既存の經營に立脚せず、全然新規に開業したのである。許された業務の範圍は狭いが、その狭い範圍に於ける發展は實に目覺しく、第一營業年度末に於て早くも廿五個の企業に關聯を持ち、關係企業の種類も珈琲、糖業、煙草、藍、米作、雜農及び伐木に及んでゐる。更に二年後には關係企業の数は一十三個を増加して計三十八となつた。融通資金も大きく、拂込資金五百萬盾に對し七百七十三萬六千盾に達した。

アムステルダム商事會社 アムステルダム商事會社の經營史は興味が多いものである。一八七八年末にアムス

テルダムのハーライネケ商店及そのバツヴィア支店の經營を引受けて設立された當初に於ては、目的とする處は蘭領印度向の輸出業務であつて、蘭印からの輸出業務を自己計算で行ふ様になつたのは後の事である。況んや拓殖業務の如きは定款に於て之を禁止してゐる。曰く「會社の自己計算に依る拓殖事業の經營は禁止せらるゝ處にして、不得止る場合にのみ債務者との清算を目的としたる土地設備等の管理權等の會社への移轉を臨機適宜の處置として許容せらる。その場合に於ても尙、かゝる管理は取締役の判斷に従ひて會社に有利なりと認められたる期間を以て限度とす」と。

然るに皮肉にも會社は次第に拓殖事業に深入りし、やがて貿易業務の一切を放棄して拓殖事業に専念するに至つてゐる。併し一八八三年まではその拓殖業務はまだ極めて僅少で取立てゝ述べるものはなかつた。この事實は恐慌の打撃を甚だ輕微ならしめる結果となり、設立そのものは恐慌前であつたが、拓殖銀行としての極めて大膽な活躍振は總て恐慌後に行はれたものである。

以上を以て主要拓殖銀行の恐慌直前迄の状態を略述したつもりである。然らば、その恐慌はどんなものであり、どんな影響を拓殖銀行に及ぼしたであらうか。

金融機構の發達と相俟つて、漸く發展に向はむとした爪哇糖業は、既述の如く世界的生産過剩に基く糖價の激落とセレ病と稱するバクテリアによる甘蔗病に依つて一大創痍を蒙つた。セレとはシトロネラと云はれる植物の土語名で、バクテリアに侵された甘蔗の葉がセレの葉に似てゐるところから名付けられたものであるが、西部爪哇から

東部に蔓延し、中部爪哇では收穫の三分の一がやられたと云はれてゐる。生産過剩の方は主として歐洲に於ける甜菜糖の發展によつて生じたものである。自然的原因と經濟的原因との双方から生じた恐慌は仲々に猛烈で、一八八四年の輸出糖の値下りは約二千五百萬乃至三千萬盾に及んでゐる。

併し爪哇糖業はこの颶風によつて壊滅することなく、兎も角之を切抜けたのみならず、却つて他日の大發展の基礎を築いたが、これは學者の努力と和蘭資本の目覺しい援助によるものであつた。即ちセレ病は學者、技師等が苦心慘澹の結果、やうやく蔓延が喰止められ、經濟病は三千五百萬盾の新投資と拓殖銀行の機構再編成で治癒するを得た。科學方面の收穫は姑く置いて、再編成の模様を一瞥しよう。

さて、かゝる恐慌が全蘭印の拓殖銀行に深刻な打撃を與へたことは勿論であるが、たゞ和蘭貿易會社及アムステルダム商事會社の二行のみは被害を受けることが尠く、前者の如きはこの恐慌に際して却つて大活躍をなしたのであるが、一八八六年に減配を行つたので見れば、表面にこそ現れなかつたが矢張り或程度の損害を蒙つたことは推察される。これはアムステルダム商事會社がその名の示す如く商業關係に従事し、和蘭貿易會社が恐慌直前相當の收縮整理を終へてゐたことに依るものである。

蘭印商業銀行 之に反し、蘭印商業銀行の如きは慘澹たる状態を呈し、拓殖事業全部を切離して別個の子會社に譲らざるを得ない仕末であつた。一八八四年末の同銀行債務總額は社債(約七百八十萬盾)を別にして一千九百萬盾、之に對應する流通資本總額は僅々二百三十萬盾に過ぎない。他面、拓殖事業投資は二千三百五十三萬四千盾と

なり、營業缺損は實に百萬盾を超えるに至つた。この間銀行當局は何とかして危機を凌がんと、先づ生産過剰切抜の常套手段たる「製品持越」を企てたが、之に要する多額の資金を取得する爲めに行つた社債は失敗し、止むなく六十萬擔の砂糖を二十五隻の船に積み、仕向先の當もなく海上を漂はしめるの醜態をさへも意としなかつたのであるが、固よりかゝる糊塗的手段に依つて世界的生産過剰から生じた恐慌の激浪を凌ぎ得べくもなかつた。依つて蘭印拓殖會社を創立して一切の拓殖事業を之に移し、蘭印商業銀行は本來の銀行業に専念することにはなつたが、他面、新會社株式の九九・九%を所有する持株會社となつた。新會社の資本金は蘭印商業銀行から引繼いだ農拓利權及財産を九百萬盾と評價して之に充當すると共に、五分利付社債九百萬盾の募集に成功し、こゝに新體制を整へて再出發したのである。かゝる際に、かゝる事情の下に、資本金と同額の巨額の社債募集に成功した本國の救濟委員會の手腕もさることながら、更に味ふ可きは失敗せる蘭印商業銀行の重役連をして新會社の經營を兼務せしめたる委員會の度胸である。小しく誇張して云へば叛將スマツツをして南アの統治に當らしめた英國政府のやり方と同じやり方をした譯であるが、當時の熱帯栽培業に於ける如く、何よりも「經驗」が物を言ふ場合、失敗の經驗と雖もむしろ却つて多大の價値あるものである。

ドレパール商會　ドレパール商會は恐慌の打撃を最も劇しく受けた拓殖銀行で、一時は全業務をドレパール銀行が引繼いだ、一八八八年三月一日王領地農事會社を創立し再び右の業務を之に移讓した。その際、帳簿價格一千四百三十六萬盾を八百二十六萬五千盾に切下げたが、尙、實際は之でも不充分で、創業第一年度末に於てさへ五

十一個の企業に關係を有してゐた。

自營企業……藍農場一　珈琲農場四
 共營企業……藍農場一　珈琲及藍農場五　甘蔗珈琲藍農場一
 關係企業……甘蔗農場十一　珈琲農場十四　藍農場十四　藍、煙草農場五

此の如く整理そのものが不徹底であつたばかりでなく、その後の經營方針も放漫で、緊縮を旨とすべきに拘らず、却つて關係企業及び自營企業を擴大し、會社の脆弱性は急速に増大し、一八九四年には拓殖事業投資額は九百七十八萬盾に上る有様であつた。こゝに至つて事態は漸く再急迫を告げ、いはゞ破綻の一步手前まで來たゝめに、こゝに會社も覺醒し、爾後九ヶ年銳意改善に努力したのである。この間に在つて珈琲事業と藍事業とは、他の會社に於けると同じく王領農事會社をも苦しめる事多大で、爲めに或は所有珈琲農場を放棄し或は關係珈琲農場と縁を切る等の措置を採つた。藍農場に至つては人造藍の發明によつて致命的打撃を受けるに至つた。その反面、糖業のみは一九〇三年頃から次第に隆昌に赴いたので、當社の如く、糖業以外に特に手廣くやつてゐた會社も、結局は糖業が經營の中心を占めるに至つてゐる。即ち一九〇七年には自營、共營、關係製糖工場一九、栽培面積一四、〇〇五バウ、之に對しその他の自營企業は三にすぎない。一九一二年には前者は二一工場、一七、〇六五バウとなり後者は茶及規那皮農場一となつた。これと一八八八年末の數字と對照されるならば糖業中心の著るしいに驚かれるであらう。こゝで注目すべきは共營關係の方式で、後年發達した持株會社類似の形式を採用したるが爲め、二百八十

餘萬盾の投資に依つて計一千萬盾の資本を有する十一個の企業を傾使し得たのである。

コロニアル・バンク 創立日尙淺きに拘らず、各種事業に手を擴げた點では、コロニアル・バンクも人後に落ちないものであつたが、その結果は恐慌の襲來でひとたまりも無くデッド・ロックに乗上げ、一時は整理人の手に一切を委託した程であつたが、本國金融界其他の援助に依つて五分利付社債五〇〇萬盾の發行に成功して、モラトリアムだけは解除することが出來た。併し内部整理は頗る緩慢で、會社財政の基礎は永く安定せず漸く一九〇六年に至つて確定的利潤を擧げるに至つてゐる。この間に在つて會社の營業方針が、確固たる原則に基いてゐたとは云ひ難いのであるが、漸次に自營及共營企業の擴大は他社並に行れ、就中、この社の經營方針の特色は共營主義の擴大に在つた。一度自營としたる企業を再び共營とするが如きことさへも行れたのであるが、かゝる共營擴大主義の依つて來る處は、會社の資金僅少、財政の薄弱なるに拘らず、事業規模を擴張せんとする點に在つたと考へられる。

かゝる不安定な状態がやがて何等かの危機を招くべきは當然豫想されるところであるが、一九〇一、一九〇二の二ヶ年の凶作に遭遇するや、又も破綻に瀕し、和蘭貿易會社に救助を乞ふに至つたのである。併しこの危機はコロニアル・バンクの一大危機であつたが、半ば獨立せるも共營企業にとつても同程度に危機であつたとは云ひ難く、共營企業も勿論救済は受けなければならぬ、それは凶作といふ一時的原因に基いたもので、企業全體としては次第に内面的充實を獲得し、就中、糖業に於て之を見ることが出來たのである。その結果、當社も亦、他社と同じく、糖業

中心主義へ向つて行つたのである。

和蘭貿易會社

和蘭貿易會社及アムステルダム商會社が恐慌の打撃を大して受けなかつたことは一言したが後者は創業幾干もなくして未だ大打撃を蒙る程の經營を行つてゐなかつたから問題はないが、前者は創業以來約六十年を経過し經營も洵に手廣かつたに拘らず、經營内部が堅實であつた爲め能く大恐慌を乗切つたゞけでなく、他社救済の爲め大童の奮闘を敢てし、同社の勢力は恐慌の御蔭で却つて増大したかの觀を呈してゐる。例へば輸送中の農産物に對する本店貸付九百萬盾の外に、爪哇在庫品に對するバタヴィア支店貸付も莫大なるもので、之等の貸付が當然同社の勢力強化に役立つたは勿論であるが、同社銀行部の預金の如きは恐慌に依つて却つて急激に増加してゐる。併し恐慌後の十數年は流石の和蘭貿易會社にとつても飛躍時代とは云ひ難く、相當の利益は收めてゐるが全體としては整理改善の時代で、其の眞の發展は九八年以後に遺されたのである。

恐慌が各拓殖銀行に及ぼした影響は大體右に述べた通りで、之を一括すれば蘭印商業銀行から拓殖事業を切離して蘭印拓殖銀行が創立され、ドレパール商會が解散して王領地農事會社が出來たことであるが、併し恐慌が生じた重要な事實は、これ等の表面に現れたことよりも、もつと内部的なもの即ち拓殖銀行の經營方針の變化と、拓殖企業に對する拓殖銀行勢力の著増とにあるので、この變化こそ蘭印拓殖銀行本來の面目となつたものである。經營方針の最大な變化は前述の記述から推察される如く、糖業中心化と自營主義の強化である。從來と雖もこの方針はな

い譯ではなかつたが、銀行又は貿易會社たる本質上、拓殖銀行が主たる目的としたものは貸付の金利と委託販賣の手

數料とであつた。然るに恐慌によつて拓殖銀行は何よりも投資の「安全」に多大の關心を持つやうになつた。何分にも農企業の收穫と収益とは自然の影響に依つて年々多大の變化を生じ易いので、投資の安全を期する爲めには、農企業に對しては工業企業に對するよりも遙に多大の關與を銀行は持たざるを得ない。この勢を押しつめて行けば結局自營主義に到達するの外ない譯である。

恐慌後の拓殖銀行はこの方針を最も嚴格に實行したもので、當時の融資條件を見ると、よくもこゝまで企業側が温順だつたと驚く程である。之を法的に可能ならしめたものが一八八六年一月廿四日の「農收穫物入質法」の制定である。これに依れば信用提供者に對し、毎回次季一回の收穫に對しては農圃上の作物、收穫濟又は未完成の製品又は加工に使用される設備に對して抵當權が認められると共に、若し債務者が自己の承認した義務の遂行を怠りたる時は、債權者は一時全企業を占有し、入質されたる收穫を自己の管理の下に債務者の計算に於て實行し、その收入を以て自己の債權の辨濟に充當することが認められたのである。即ち債權回収の方法として企業管理權を承認したもので、拓殖銀行側の新方針に全く歩調を合せた法律である。この法律は直ちに委託契約に利用され、債權者たる拓殖銀行は債務者企業の工場其他の建設物と共に、その全財産を以てする保證を與へられるに至つた。

右の新方針から生じた拓殖銀行經營事情の具體的變化は後述するとして、グレッツェルの所言の如く、恐慌は栽培の糖業集中に依つて切抜けられ、その結果、企業は大資本を擁する拓殖會社の手に落ちたが、之に依つて甘蔗の栽培及製糖事業に新資本が供與され、近代的な方法と合理的な經營に依つて、爪哇糖業は復活するを得たのである。併

しフアニヴァルの如く、之を以て爪哇の社會機構の完全な再編成と稱するは云ひ過ぎである。彼の云ふ處に依ると恐慌前にあつては、栽培者は富裕なる貴族であり、彼の農園の所有者であり、各拓殖銀行は獨立的存在であつたが恐慌後に於ては、企業は株式會社に再編成され、自己に對してのみ責任を有した個人の所有者は、會社の重役會に責任を負ふところの有給支配人となつた。拓殖銀行が此等の企業に融資を繼續してはゐるが、嘗つては純粹な商業的關係であつたものが、今や銀行は支配權を主張するに至つた。銀行は最も有能な栽培マネジャー中から、貸付に關してのみならず、栽培及營業行爲に關しても注言を與ふべき者を物色する。かくて彼等は生産の技術及經營の改良を主張し、共同の販賣政策を主張し、結局、經濟的發展の礎石となつたのである。加之、拓殖銀行自身も最早孤立的存在ではなく、和蘭本國に重役會を有する普通の金融機關に連結するに至り、かくて自由主義の原則たる個人的企業と自由競争とは結合と統制とに途を譲つたと。洵に彼の言ふ通りであるが、さりとして社會の經濟的機構は最早個人主義的ではなく、重心を蘭印ではなく和蘭本國に有する資本家的なものとなり終つたといふのは如何であらうか。エステート農業が資本家的である點に於ては、恐慌前も恐慌後も變りない。従つて「個人主義的」から「資本家的」となつたのではなく、産業資本的から金融資本的となつたに過ぎないのである。

併しその結果、生産に加へられた改良と之に基づく生産力の發展は大きかつた。生産改良の方法としては、灌漑の改善、研究機關の改良、人造肥料施肥の激増、製糖工場用新機械の増設等が續々として行はれ、一ヘクター當り生産高の増大と單位生産費の激減とを招來した。

年 度	企業數	栽培面積 ヘクタール	砂糖生産高 千噸	一ヘクタール 當り生産高 噸	一企業當り 栽培面積 ヘクタール
一八四〇年	1	31,100	87,000	1,508	1
一八五〇年	1	33,200	86,599	2,608	1
一八六〇年	1	34,100	136,889	3,991	1
一八七〇年	1	37,800	153,555	4,037	1
一八八〇年	1	48,200	226,244	4,710	1
一八九〇年	1	71,000	393,993	5,548	1
一九〇〇年	1	91,000	489,237	5,377	1
一九一〇年	1	126,500	1,180,300	9,331	1
一九一一年	1	133,800	1,486,500	10,739	1
一九一二年	1	140,000	1,606,300	10,038	1

單位生産費の低下に就いては、蘭印全糖業の平均的數字を示し得ないが、例へば蘭印拓殖會社關係糖業に就いて云へば一ピクル當り左の如くなつてゐる。(單位=盾)

一八八六年	八・五八	一八八七年	七・二七
一八八八年	七・五一	一八八九年	七・八四
一八九〇年	七・二六	一八九一年	八・〇四

一八九二年	八・〇九	一八九三年	七・二四
一八九四年	七・四二	一八九五年	六・六一
一八九六年	六・九二	一八九七年	六・〇九
一八九八年	五・二九	一八九九年	五・四三
一九〇〇年	五・五九	一九〇一年	六・四〇
一九〇二年	五・六五	一九〇三年	五・〇四
一九〇四年	四・七四	一九〇五年	五・三四

而もこの生産費たるや、工場の擴張及新設費をも含むだ數字であるから、實際の生産費は更に下廻つてゐる譯でかうした改良がやがて爪哇糖業、従つて拓殖銀行の全盛時代を招來したのである。

上述した如く、幾多の紆餘曲折はあつたけれども、和蘭資本は約六、七十年の間に爪哇のエステート農業を完全に把握し、獨占的本國資本たる威力を遺憾なく示したのである。

然るにこの「獨占」は第十九世紀を以て終り、第二十世紀に入るや先づ英國資本によつて破られた。元來英國資本が蘭印と關聯を有するに至つたのは貿易關係であり、それを表はすものが一八八〇年に於ける香上銀行のバタヴィア支店開設であるが、其後印度のアッサム茶の生産が次第に支那茶の生産を驅逐し始めた頃から栽培業と直接關聯を有するに至り、略々一九〇〇年に茶栽培に英國資本が投下された。フアニヴァルに依ればこれが相當の規模で外國資本が蘭印に投下された最初の事例であるといふ。更に一九〇五年頃からゴム栽培にも進出し來り、一九一二

年に於ては爪哇のゴム栽培會社一〇一個の中、五十個が英國資本であつた。併し何分にも爪哇には和蘭資本が永年に涉つて育成した糖業がある爲め、爪哇に關する限りは、和蘭資本が支配的であつたが、外領となれば事情は餘程異つてゐる。

外領の投資對象は大體二種に別れる。一つは例に依つて栽培業であり、他の一つは鑛業である。栽培業の方は一八六〇年代に於けるスマトラ東海岸のデリに於ける煙草栽培の成功が、外領投資の皮切りとなり、忽ちに英、獨、瑞西等の資本を吸収し、第十九世紀の終りに近づいて英國資本は更に茶栽培にも流入し、一九一二年迄に東部スマトラに投下された二億六百萬盾の資本中、和蘭資本は一億九百萬盾にすぎなかつたと云はれる。

前大戰の勃發に依つて外資流入は大いに阻害され、一九二〇年再び投資が始つた時には和蘭資本が優勢となつて居り、就中、新しい栽培地域たる南部スマトラに於て然りであつたが、それでもその農業投資の四十％は外國資本であつた。更に注目すべきことは、今世紀に入つて華僑資本が大いに栽培業へ進出したことで、一九二三年には二億五千萬盾と見積られてゐる。

第五章 鑛業の發展と鑛業資本

第一節 鑛業資本

蘭領印度は周知の如く鑛物に恵まれてゐる。石油、石炭、錫、ボーキサイト、アルミニウムを始め、金、銀、其他三十餘種の鑛産資源を蔵してゐる。そこで蘭印の「資源」が列國の注目する所となつた譯であるが、之が開發は「資源」の豊富さに比べて未だ決して充分とは云へない。その理由の一つは本國和蘭の資本が農業に集中されてゐた事である。第四章に述べた如く、ゴム、砂糖を中心とする和蘭農業投資は十五億盾といはれてゐるに對し、鑛業投資は六億盾に過ぎない。併し近來、世界が重工業時代に入るに及んで漸次之が開發の氣運に向つて來た。但し石油のみは例外で和蘭及外國資本の投資額は五億盾に近く、和蘭資本を主とし、英・米之に追隨するといふものゝ英・蘭の合資より成るバターフェセ石油會社(B・P・M社)が三億盾の巨資を擁して斯界に君臨してゐる。英國の

石油資本が如何に強大なものであるかを知るならば、その一部と結合せる和蘭石油資本が決して表面の投資額に示された様な實権を有してゐないことは説明するまでもない。米國の資本はスタンダードの資本で、之がネーゼラ
ンシエ・コロニアル石油會社に注ぎ込まれて居り一億二、三千万盾に達する。では日本の投資額は？ 表面はボル
ネオ石油の十八萬盾と石原産業の五十萬盾に過ぎないが、實際の投資額はいづれも三、四百萬盾に及んでゐるもの
と見られるから、結局、七、八百萬盾になるであらうが、それにしても少いものである。
左に稍々古いが各國の鑛業投資額表を掲げて置く。之は蘭印政府發表のものだが社債及借入金等の形式の投資は
含まれてゐない。

	石油	石炭	錫	其他	計
和蘭	二四八、四八〇	一一、四七〇	一七、五〇〇	三二、〇三二	三〇九、四八二
英國	一一三、六〇〇	—	—	六〇〇	一一四、二〇〇
米國	一一〇、〇〇〇	—	—	—	一一〇、〇〇〇
支那	—	—	—	八五〇	八五〇
日本	一八〇	—	—	—	一八〇
民間資本の計	四八二、二六〇	一一、四七〇	一七、五〇〇	三三、四八二	五四四、七二二
蘭印政府	五、〇〇〇	三一、二七四	一六、五七五	五、五六九	五六、四一八
總計	四八七、二六〇	四二、七四四	三七、〇七五	三九、〇五一	六〇一、一三〇

(單位。千盾)

右は十年前の數字であるが、其後世界恐慌を經過してゐるので大して増加してゐると思へない。之によつて見ると石油以外は殆んど全部が和蘭資本であり、且つ石炭及錫に就いては和蘭政府の参加が非常に大きい。又外國資本は殆んど英と米で、而も石油に集中されてゐる。

第二節 各種鑛產物

第一項 石油

オイル！ この言葉には硝煙の臭いとエンジンの響きがある。「蘭印には石油が多いそうだな」何十度知人からかう聞かれたかわからない。だから鑛產資源を語るに先づ石油から始めよう。
蘭印の石油生産はこゝ數年世界第六位であつたが、昨年は第五位になつた。%を云へば世界産額の三%内外に當る。参考の爲め三九年度の世界石油産額を挙げれば、

米國	一七〇、〇〇〇千噸
ソ聯	三二、〇〇〇
ヴェネズエラ	二七、〇〇〇
イラン	一〇、〇〇〇

蘭	八、五〇〇
ルーマニア	六、二〇〇
メキシコ	四、五〇〇
イラク	四、〇〇〇
コロンビア	二、九〇〇
アルゼンチン	二、七〇〇
トリニダッド	二、六〇〇
バーレーン	三、〇〇〇
計	二七二、四〇〇

蘭印の油田はスマトラ、爪哇、ボルネオ、セレベス、ムナ、チモール、セラム及ニューギニアに分けられる。産額は百八十萬バーレルに近い。

年度	産額 100バーレル	對世界 (%)
1920	17,529	2.5
1921	16,958	2.2
1922	17,066	2.0
1923	19,870	1.9
1924	20,473	2.0
1925	21,422	2.0
1926	21,242	1.9
1927	25,967	2.1
1928	32,118	2.4
1929	39,729	2.6
1930	41,729	3.0
1931	33,979	2.5
1932	39,001	3.0
1933	42,667	3.0
1934	46,925	3.1
1935	47,171	2.9
1936	49,360	2.8
1937		
1938		
1939		

之を島別に見れば(單位=噸)

	一九三四年	一九三五年	一九三六年	一九三七年	一九三八年	一九三九年
爪哇及マツラ	五〇、三五	八、四	四四、七三	七、六	四九、九九	九〇、二五
スマトラ	三、五八、四〇	五、九二	三、七九、〇六	六、八	四、二四、七〇	六、三九
ボルネオ	一、九四、三四	三、八	一、八五、九八	二、九	一、七三、五五	二、五
セラム	三、七六	〇、六	四、四八	〇、七	五、五五	〇、八
合計	六、〇四、七〇	一〇、〇〇	六、〇八、七五	一〇、〇〇	六、四七、八八	一〇、〇〇

即ちスマトラが六割餘、ボルネオが三割未滿、残りが爪哇とセラムで産出する。

之を稼行するものはバターフェ石油會社、コロニアル石油會社、蘭印石油會社の三社である。バターフェ社は一九〇七年コーニングレック社とシェル社との合併によつて成立した石油會社である。最初蘭印の石油界を牛耳つてゐたものはコーニングレック社であつたが、一八九八年シェルトランスポート社の出資によつて蘭領印度産業貿易會社がボルネオに設立され、これが領内第一と稱されたサンガ・サンガ油田を開發し、更に一九〇〇年にサンボチヤ大油田をも經營するに至つて、その勢力は頗る伸展し、兩者の競争は激烈なものとなつた。茲に於て一九〇七年合併してバターフェ社を作ることゝなつた。之に依つて從來兩社が各々スマトラ及ボルネオで經營してゐた油田は盡く同社の手に握られ、事實上、蘭印石油はこの英・蘭合同資本の支配する處であつた。然るに一九一二年スタン

ダード石油資本の割込みが行はれた。スマトラのパレンバン油田を採油する爲めネーデルランシエ・コロニアル石油會社を設立し、嘗てコーニングレーク社の放棄した鑛區を買つて遂に之をものにしてつた。一九二一年には政府資本も石油業に参加することとなりバターフセと政府とが五百萬盾づゝを出資して蘭印石油會社を設け、スマトラのジャンビー油田の採油に従事してゐるが、政府は純益の六割を取ることを條件として事實上の經營はバターフセ社に委してある。更に三五年にニューギニア油田開發の爲めニューギニア石油會社（資本金百萬盾）が設立された。これはバターフセ、コロニアル、パシフィック三社の共同出資によるもので、現在は試掘を行つてゐるが成績は良好と云はれてゐる。

ニューギニア石油は未知數としてバターフセ、コロニアル、蘭印石油三社の生産高は左の如くである。（單位噸）

	一九三六年	一九三七年	一九三八年	一九三九年
バターフセ	三、六一四、八六五	四、〇八九、七七三	四、二九三、〇七一	四、四八六、五一〇
コロニアル	二、〇六三、六四五	二、一六六、一五二	一、九九〇、七六七	二、一四〇、八六五
蘭印石油	七五九、三〇八	一、〇〇六、〇七四	一、一一四、三〇六	一、三三〇、三一九

石油の外に天然ガスの採取も漸次重要なものとなつてゐる。鑛區は原油鑛區と同一鑛區から得られ、特に天然ガス鑛區は蘭印には無い。生産高は百萬噸を超えてゐる。

	瓜哇	スマタラ	南部及東部	モルツカ	計				
	中部	東部	パレンバン	ジャムビ	東海岸	アチエ	ボルネオ		
一九二五年	三、二〇〇	一、一八九	五、六六八	一、一四三	三、三六〇	三、七五五	三、七三三	三、七	四二、九八
一九二六年	四、四四七	一、三三三	六、七〇三	三、三六六	三、三六六	二、六三三	三、三三三	三、三	三三、一七
一九二七年	四、二〇〇	八三三	八、八〇四	四、六三三	二、六三三	一	二〇〇、〇三三	二〇〇	三、七、四六
一九二八年	四、二二五	六、三三六	一〇、一四八	六、四四〇	三、三三三	九、六六六	三、七、九七	三、七	四、九、〇三
一九二九年	五〇、一五〇	三、三三三	二八、三三三	八、二六六	四、八三九	二、七、三三	六、八、三三	五、一	五、八、三三
一九三〇年	五〇、三三〇	五、五三八	三三、一〇四	二、一三三	四、八三九	三、四、三三	二、六、三三	五、七	五、三〇、三三
一九三一年	六、九四四	二、四八六	二四、九〇〇	五、四二二	二、〇、一一〇	六、八、三三	三、七、四三	八、七	八、四、三三
一九三二年	八、六〇三	三、三三八	二六、四三七	五、四三九	二、六、五五	七、〇、三三	二、六、三三	一、〇、三三	八、八、三三
一九三三年	五、六三三	一、六、七六	三三、四四五	四、九三三	二、六、四三	七、八、三三	二、七、三三	一、〇、三三	一、〇、六、三三

一九三四年	六、七四	一八、四八	801,003	九、六一	二四、七四	一一、一〇九	三六、三三	七〇	一、〇四、一一
一九三五年	六、三三	二二、三三	816,211	一〇、三六	二六、一〇	一四、五六	三六、一四	六二	一、〇五、四三
一九三六年	六、一〇	二二、一〇	三、四一、五	一五、七八	一〇、六二	八、三五	二七、八〇	四六	一、〇七、二六
一九三七年	六、一〇	六、〇〇〇	三、八、〇九	一五、七〇	一八、四六	九、三〇	二五、八五	七五	一、一〇、九九
一九三八年	六、〇、三三	六、二、三三	一、四、一、八七	二〇、〇、四	一四、一、三六	一〇、一、〇一	三〇、八、三	六七	一、一三、七、四
一九三九年	五、五、三	五、一、七	三、五、八、九	一三、八、三	一〇、三、〇	一〇、八、九	三〇、八、九	八八	一、一三、三、四

原油及天然ガスの生産状況は大略右の如くだが、原油から得られる生産物は左表の如くである。(単位: 底)

燃料として販賣される原油	一九三三年	一九三四年	一九三五年	一九三六年	一九三七年	一九三八年	一九三九年
精製の爲め輸出される原油	八四六、五三	七六、五〇	八〇六、二六	八三六、八三	七五〇、三五	七三三、四三	六五、四五
ベンジン	三、四、六八	五〇〇、七九	五八、三六	三、七、四六	一、一、三〇	一〇、九、二一	一三、五、九
ホワイトスピリット	一、三、〇、六四	一、四、八、八	一、五、二、二七	一、七、〇、七〇	一、七、六、八〇	二、一、〇、九六	二、三、〇、三〇
燈油	一、〇、三、三六	七、七、三三〇	八〇六、三六	八六、三三	九八、〇八	一、〇、〇、一〇	九三、四八
残滓ソラル油及デイゼル油	一、六、〇、六〇	一、四、四、四三	一、九、三、〇七	二、〇、二、四七	二、三、七、一八	二、七、〇、五〇	二、七、二、八
潤滑油	一、〇、一、三三	三、三、五	三、五、六〇	三、三、〇〇	三、八、八六	三、三、七	三、五、一三
パラフィン	四、八、七	五、一、二	四、一、〇	五、四、一	三、一、三	三、三、三	七、〇、八
アスファルト	七、七、五	八、五、二	八、八、三	一〇、三、四	九、七、〇	二、二、三	二、四、六三
注油	一一、二、三	一〇、七、九	一七、七、一	七、一、一	三、一、〇	一、七、九	一、七、九

計	五、一〇、六、四	五、五、七、三〇	五、九、〇、三三	六、三、三、四七	六、四、八、七	七、三、五、三三	七、四、五、五五	八、〇、六、一三
天然ガスより得たるベンジン	一、七、七、七	一、八、九、九	一、九、五、三	一、八、一、五	一、三、一、五	一、七、八、三	一、〇、五、三	一、六、一、三
其	一、五、八、六	七、二、四	一、四、八、七	二、三、一、三	三、六、一、六	三、九、一、四	四、〇、〇、七	五、九、〇、三
他	一、三、八、六	七、二、四	一、四、八、七	二、三、一、三	三、六、一、六	三、九、一、四	四、〇、〇、七	五、九、〇、三

之等の石油生産物を精製する精油所は十餘ヶ所ある。その規模は非常に區々であるが、パレンバンなるスンゲイゲロンにあるものは日産能力四萬バレルで、コロニアル石油會社に屬し蘭印最大のものである。バターフェ社所有の最大なるものはバリクパバンに在る。全部の能力が何程であるかは不明だが、ダツプ法—これはローヤル・シエルの精油場で最も多く使用されてゐる—に依つて作業してゐる。クラツキング分溜装置の能力は二萬四千五百バレルあり、之に前記コロニアル社のものを加へれば少くとも六萬數千バレルの精油能力はある譯である。

亦、天然ガスからベンジンを採る多數の装置があり、之に依つて得られる輕ベンジンは年産二十萬噸に近い。

蘭印の石油鑛區には一つの長所がある。それは工業中心地又は船積港に非常に接近してゐる爲めに、送油管の設備が甚だ少くして済むことである。テムビーからプラジニまでのものは二六八軒あり一日の送油能力一千八百噸である。蘭印全體としてどれ程あるかわからないが、合衆國などに比べれば問題でないことは確かである。

蘭印は工業的發達が未だ幼稚の域を出ないから、その石油の大部分は輸出され、而もその趨勢は近年いよ／＼盛であり、蘭印輸出に於て非常に重要な地位を占めるに至つた。

石油及石油生産物輸出金額(單位千盾) 及全輸出に對する%

一九二九年	一七八、九六七(一一・四〇)	一九三六年	九六、六二八
一九三〇年	一八三、八六二	一九三七年	一六五、一四九(一七・四〇)
一九三一年	一四三、三八五	一九三八年	一六一、六〇五(二四・五八)
一九三二年	九六、九〇〇	一九三九年	一五五、三八〇(二〇・八三)
一九三三年	一〇三、七二二(一二・一七)		
一九三四年	九八、八四二	一九四〇年	一六九、三三二(一九・三三)
一九三五年	八六、四九六		

右輸出數量(單位噸)

一九二九年	三、八三一・〇	一九三五年	五、一三九・三
一九三〇年	四、一九七・〇	一九三六年	五、三三五・五
一九三一年	三、四四〇・四	一九三七年	五、九七二・〇
一九三二年	三、九四七・〇	一九三八年	六、〇六七・四
一九三三年	四、四〇〇・〇	一九三九年	六、四二五・五
一九三四年	四、九二二・六	一九四〇年	六、三四二・七

之が仕向地は新嘉坡を第一とし、濠洲及新西蘭之に次ぐ。日本は一九三七年に八百六十七萬盾を輸入してゐる。三八年以後は發表の自由を有しない

石油及生産物重要輸出先及輸出額(單位千盾)

新嘉坡	一九三五年	一九三六年	一九三七年	一九三八年	一九三九年
濠洲	二二、〇〇八	一七、四五〇	三七、六九二(二二・八二)	三九、二八〇(二四・三一)	三八、三九〇
埃及	九、五九八	一〇、九四五	一七、八〇〇(一〇・七〇)	二二、八〇八(七・九三)	一五、九九〇
支那	五、三三八	四、五八三	一三、一〇七(七・九三)	一一、三〇〇(六・九九)	七、三二四
日本	五、五〇〇	五、五五三	八、六六九(五・二四)	七、五二五(四・六六)	
香港	七、一三三	五、一二二			
	二、三二六	三、二三一	六、三〇六(三・八一)	五、四五一(三・三七)	

(参考の爲め蘭印石油産地から世界主要港への距離を示して置く)

蘭領印度

港別	蘭領印度	
	バリクパパン	パレンバン
アントワープ	9,395 S	8,615 S
バルセロナ	7,709 S	6,929 S
ブエノスアイレス	9,779	9,328
ケープタウン	6,000	5,549
コペンハーゲン	9,835SK	9,055SK
ハムブルグ	9,665 S	8,885 S
香港	1,700 S	1,250
ホルル	5,200 S	6,200
倫敦	9,385 S	8,605 S
マルセイユ	7,633 S	6,853 S
モントリール	11,211 S	10,431 S
ネーブルス	7,229 S	6,449 S
紐育	11,228 S	10,448 S
リオデジャネロ	9,308	8,857
ロッテルダム	9,395 S	8,615 S
上海	1,800	2,210
ストックホルム	10,165 S	9,385SK
シドニー	4,306	4,006
横濱	2,700	3,000

(註) K||キール運河。S||スエズ運河。P||パナマ運河。

一九三五年	一、一〇、九五三	一九三八年	一、四五六、六四七
一九三六年	一、一四七、一九六	一九三九年	一、七八一、一八二
一九三七年	一、三七二、五三六		

官營炭田中最大なものは前記の表でもわかる通り、オムピリン炭田であるが、スマトラの西海岸にあり、埋蔵量一億九千三百萬噸といはれ、炭質は光澤を有し粉炭が少い。政府出資は三千六百萬盾で採掘は囚人又は土民の請負でやつてゐるが、大半は囚人だ。先づ佐渡の金山といふ格である。ブキツト・アセム炭田之に次ぎ炭量一億八千萬噸、炭質は比較的良好で灰分は一乃至二%と見られてゐる。

民間經營では東ボルネオ會社、ステインクレーンの二社、特に後者の經營するランタウバンジャンが大きい。この社はK・P・M社の子會社で、その生産炭はK・P・M社の汽船に用ゐる。東ボルネオ社のロア・クルーのものと同じくK・P・Mに供給してゐるから、結局、蘭領印度の石炭は政府とK・P・M社の支配するところとなつてゐる。従つて一般消費用としては土人炭坑(年産四萬噸位)其他があるに過ぎない。

左に石炭の輸出入を掲げて置く。

	(輸出)			
	一九三五年	一九三六年	一九三七年	一九三八年
和蘭	七、八六五	一一、一四〇	一三、八一五	一三、八〇〇
タイ	一四、九九九	一五、七〇五	一三、四二〇	三〇、〇三三
彼南	一四、六二〇	一八、〇一四	二〇、一五五	二二、八〇〇
新嘉坡	一〇四、八五三	一〇九、二〇〇	一七五、〇九六	一一八、〇〇〇
				一九三九年
				一四四、三〇〇

	(輸入)			
	一九三五年	一九三六年	一九三七年	一九三八年
佛印	一〇、五二〇	七、六九三	八、九七三	一・七
香港	六九、五七三	五〇、〇一〇	五二、三四四	一〇八・一
支那	五、三六七	二、五五二	一、二五一	八・二
比律賓				二九・六
其他	二〇、九五六	四、五九〇	五、四一三	一八〇・三
計	二四八、七五三	二一八、九〇四	二九〇、四六七	
英國	一、八四三	一、〇一八	一〇、六六四	
獨逸	一一、〇六四	一四、五八九	一一、六〇四	
日本		一、〇〇〇	一〇・二	
濠洲	二六、七三七	三二、七八五	二一、一八八	
南ア	一一、九九六	一五、九一四	九、五五二	
其他		二、三〇九	二、八三九	
計	五五、三三六	六七、六一五	五六、九九九	

第三項 鐵

鐵も亦豊富である。現在判明してゐるだけでも埋蔵量十億噸といはれるが、未だ本格的な開發が行れてゐない。

これは埋蔵量は豊富であるが、品位が比較的到低いものが多いこと、場所によつては海岸から遠距離にあること及び製錬用の良質炭が鑛區附近に産出しないといふ三つの技術的理由に依るの外、英・米・獨の三大工業國が良好なる鐵鑛資源を自國に有する爲め、敢て蘭印の如き遠隔の地に鐵鑛資源を求むる要が無いからである。併し日本からみれば事情は甚だ異なる。釜石の鐵山が云々されるけれど、固より需要の一部を満すに過ぎない。從來日本の製鋼業はスクラップを非常に多量に使用し、之を米國等に求めてゐたのであるが、最近はその量が止つて了つた。然らば蘭印の鐵鑛はそれが開發されて居らず、且つ近い將來も他國が之に當る可き可能性が少いだけ、日本にとつて頗る注目すべきものと言はねばならぬ。殊に軍備の必要が歴倒的である場合には、從來の採算的見地は餘程緩和される。右様の次第であるから、蘭印の鐵に關する記述は、主として鑛床、鑛區に就いて行はれざるを得ない。

H. A. Brower 教授の見解に従ふと、蘭印に發見された紅土鐵鑛石は埋蔵量十億噸に達し、中央セレベスの湖水地方、ラウト海峡、北部ボルネオ等に多量に發見される。最大なるものはセレベスのラロナ鑛床で埋蔵量三億三千三百萬噸、ラウト海峡セプリー島のもは埋蔵量三億噸、北ボルネオのスルヴァンジ鑛床は二千萬噸、ボルネオの其他の地方一億二千萬等であるが、今後更に發見されるものと云はれる。以下少しく詳細に叙述しよう。

爪哇の南海岸ケヅ州及バニユマース州には磁鐵砂鑛床があり、鐵鑛三千五百萬噸にして之より製錬し得べき鐵は二千萬噸と計算されてゐる。蘭領印度鐵鑛採掘會社に所屬するが、未だ採掘は行れてゐない。

ランボン（スマトラ島）にあるものは九つの山から成つて居り、主要なものはブルハン及タンジョンの兩山でランボン開發會社に屬する。推定埋蔵量二百萬噸、品位六二%である。其他スマトラ西海岸にはスンゲイ・ラン、グノン・ブジ等があるが經濟的價値に乏しい。近頃有名なのは南東ボルネオにあるスンゲイ・ドワで埋蔵量一億七千萬噸、うち粘土鑛七千萬噸、片鑛一億噸と見積られてゐる。

鑛量の最も多いのは前記セレベスのラロナ鑛區で總鑛量三億七千萬噸中、片鑛は一千百萬噸で、鑛床はアルミニウム、ニツケル、滿俺等と結合してゐるものが多い。

第四項 錫

近頃はサロンの話題がまことに豊富だが、錫も亦ハル聲明以來その一つとなつたものだ。錫は金屬だ。金屬だと云へばスグ軍需資源にするのが流行だが、これは必ずしも軍需資源とのみ銘打つべきものでなく、廣く工業一般の資源である。煙草の包装にも使はれるし齒磨のチューブにもなる。ナマ麥酒を冷すパイプから自動車のエンジンにも使はれ、用途は至つて廣い。世界で錫の産地と云へば殆んど太平洋岸で、英領馬來、タイ國、ビルマ、濠洲、ボリヴェア、英國、それに蘭領印度である。産額は一九三七年が最大であつたが、その年で二十萬餘噸、その中、蘭印は四萬噸弱で約一九・八%に當る。この%はこの年に限らず、逐年をみても近年は大して變つてゐない。

期 間	世界生産額 (英噸)	蘭 領 印 度	
		生産額(英噸)	%
一八〇一—五	四一、五〇〇	九三五	二・三
一八〇六—一〇	四三、〇〇〇	二、八六五	六・七
一八一—一五	四六、〇〇〇	四、二八五	九・三
一八一六—二〇	五四、五〇〇	六、四八五	一一・九
一八二—二五	五七、五〇〇	六、四九五	一一・三
一八二六—三〇	六五、五〇〇	九、四八〇	一四・五
一八三一—三五	六七、〇〇〇	一二、八三〇	一九・二
一八三六—四〇	七七、〇〇〇	一六、七八〇	二一・八
一八四—四五	七九、五〇〇	一七、六七〇	二二・一
一八四六—五〇	八六、五〇〇	二一、三六五	二四・七
一八五一—五五	八八、六〇〇	二四、四九〇	二七・六
一八五六—六〇	一〇〇、六〇〇	二八、〇五九	二七・九
一八六一—六五	一一九、七〇〇	二七、五五五	二三・一
一八六六—七〇	一二九、五〇〇	三二、〇七八	二四・八
一八七一—七五	一六九、五〇〇	三八、〇九五	二二・五
一八七六—八〇	二二七、六〇〇	四三、一〇一	一九・八

一八八一—八五	二六〇、一〇〇	四二、七九七	一六・五
一八八六—九〇	三一三、八〇〇	五二、五〇六	一六・七
一八九—九五	三九四、四〇〇	六七、八四〇	一七・二
一八九六—一九〇〇	四〇五、五〇〇	八三、七三一	二〇・六
一九〇—一〇五	四七〇、〇〇〇	七二、五六七	一五・四
一九〇六—一〇	五四四、六〇〇	九〇、四九〇	一六・六
一九一—一五	六二八、一〇〇	一〇〇、〇六四	一五・九
一九一六—二〇	六二三、二〇〇	一〇四、三九六	一六・七
一九二—二五	六五一、一〇〇	一四二、六二八	二一・九
一九二六—三〇	八五二、二〇〇	一七一、六二四	二〇・一
一九三一—三五	六〇一、四〇〇	一〇〇、九六六	一六・八
一九三六	一七九、八七八	三一、六八四	一七・六
一九三七	二一〇、五四七	三九、七七九	一八・九
一九三八	一四七、二八四	二七、一六〇	一八・四
一九三九	一七八、五三二	二七、六〇九	一五・六

即ち世界生産の二割弱といふところである。さうしてみれば何もアメリカが蘭印の錫ばかり狙はないでもよささうに思へる。殊に馬來にしろビルマにしろ、將又タイ國にしろ、いづれも米國の親戚たる英國の領土又は勢力圏に

屬するものだから何とか話はずきさうだが、それはいはば岡目で、現状に立脚する限り蘭印錫が米國に不可欠のものたることは貿易關係をみれば一目でうなづける。

蘭印の錫は各地に鑛床があるが、現に主要産地となつてゐるのは、バンカ、ピリトン、シンケツプの三島で他にリオウ群島等にもある。

この中、最大なものはバンカ島の鑛區で、埋藏量二千萬ピクルと推算され、鑛床は一〇—四〇センチメートルの厚さのものが重つて居り、鑛層の二—四%が錫鑛である。バンカ島の錫採掘は最も古いもので、一七一〇年頃に鑛床が発見されると同時に行はれてゐる。當時バンカ島はバレン本のサルタンの領有で、一七二二年に和蘭東印度會社はこの地に産出する錫の獨占權をサルタンから得てゐる。爾後一八一二年まではバンカ錫はサルタンの手で東印度會社に納入されてゐたが、一八一二年に同島が一時、英國の領有に歸するや、之が輸出販賣に始めて歐洲人の干渉が加へられた。一六年再び蘭領となると共に、錫生産は蘭印政府の直接支配を受け、爾後百二十五年間政府の獨占事業となつてゐる。この二百二十年に渉るバンカ錫の歴史を顧ると大體四期に分けられ、その四期は、亦生産額の躍進を示してゐる。即ち

- 一、英國領有まで（一七一八—一八一二年）
- 二、一八一三年から五三年まで
- 三、鑛山技師の使用開始以後（一八五四年—一八九〇年）

四、蒸氣機關利用以後（一八九一年—一九三九年）

右四期の生産高

1)	70,504英噸
2)	109,793
3)	164,052
4)	658,566
計	1,002,915英噸

即ち一七七八年から一九三七年まで約一億噸の錫鑛がバンカから生産されてゐる。これは盡く官業なので、従つて財政に及ぼす影響は非常なものであるが、錫と蘭印財政の關係はバンカ錫だけに限らないからこれは後廻しにすることにして筆をピリトン島に進めよう。

ピリトン島の錫は埋藏量一九〇萬ピクルと稱せられ、一八五二年に初めてコンセツションが許可されて採掘が開始された。然るに多額の負債の爲めに、新たに五〇〇萬盾の資本を以てピリトン會社が一八六〇年に設立された。これが蘭印錫鑛業界に強力な支配權を有するピリトン社の前身である。設立後も經營狀態思はしからず一度は整理も考へられたのであるが、幸ひ富裕鑛床が発見されて、六八年には初めて四分半の配當が行はれた。爾後、一九二一年を除けば無配のことはなく、寧ろ相當の高率配當が行はれてゐる。一八九二年に政府はピリトン社のコンセツ

ジョンを擴大したけれども同時に純益の八分の五を政府に收納することとした。このコンセッションは一九二七年に満期となるために、之が延期を認むべきや否やが一九一七年の和蘭議會の大問題となり、遂に延期は否決されたが、最後に一九二四年に到つて妥協が成立し、蘭印政府とペリトン社共同で會社を設立することになった。蘭印政府出資一千萬盾、ペリトン社出資六百萬盾でペリトン共同鑛業會社(G・M・B)を作つた。同社存續期間は一九四八年十二月末である。この會社の設立に依つてペリトン社はペリトン鑛區を直接に經營して居らないことになつたが、事實上は經營はペリトンに委託されて居り、ペリトン共同鑛業社は經營委員會を設けて之を監督してゐるに過ぎない。委員は五名、中三名は植民大臣任命し二名はペリトン社が任命する。

ペリトン鑛區の錫鑛は大部分、新嘉坡近くのブループラニイなる海峽貿易會社の手で熔解されて海峽植民地錫として輸出され、一部は和蘭本國で處理される。

次にシンケツプ島であるが、この埋藏量は二六萬ピクルと云はれてゐる。組織的に採掘が行はれるに至つたのは一八八七年にシンケツプ錫開發會社が設立されて以來である。爾來、同社の單獨經營であつたが、一九三三年に全コンセッションと全經營をペリトンに譲渡して之が傍系會社となつた。資本は一株だけペリトン社が所有し他は盡くG・M・Bの所有に歸したが、經營は之亦ペリトン社に委託されてゐる。

シンケツプ鑛區で注目すべきは海中錫である。その鑛區面積は全シンケツプ鑛區の四分の一に過ぎないが、錫の產出高に於ては海陸殆んど同一である。之が採集は淺瀬船で行はれてゐる。

其他リオウ群島ヤシアリ、リマ・コツタ等にも鑛區があるが未だ問題とするに足らず、従つて蘭印の錫としてはパンカとペリトンが中心と云ふべきである。

以上諸鑛區の生産高は後掲表の如くである。この外にバンキナン等に少許の土人錫が生産されるが、僅々數十噸に過ぎないから、前記三者の生産高合計を以て、蘭印錫の全産高と考へて差支へない。

之等の生産は土人錫を除けば一〇〇%に和蘭資本の經營である。ペリトン、バンカ及シンケツプが政府とペリトン社の獨占する處たるは前述したが、その他、スマトラ島に於けるスタナム鑛業會社、リオウ群島一帶の採掘權を握る蘭印錫開發會社等孰れもペリトン系に屬し、錫の生産に關する限り、外國資本は完全にシャットアウトされてゐる。

(單位、英噸)

	蘭 印 計	バ ン カ	ペ リ ト ン	シ ン ケ ツ プ
一九二七年	三三、七三五	二〇、六八八	一一、九四四	九九三
一九二八年	三五、二一五	二一、五〇一	一二、四八六	一、〇二九
一九二九年	三五、九一〇	二一、三〇九	一三、一八〇	一、二二八
一九三〇年	三四、九〇三	二一、五九四	一二、〇三九	一、〇四六
一九三一年	二七、四八〇	一七、三五六	九、一一〇	九九〇
一九三二年	一五、六八三	九、九七七	五、一四八	五五八
				一六一

一九三三年	一四、四〇六	九、二一六	四、六八一	一六二
一九三四年	一八、六七八	一一、四一七	六、三三二	五〇九
一九三五年	二四、七一九	一四、五〇五	八、九九五	九二九
一九三六年	三一、六八四	一八、六三六	一一、〇一二	一、二一九
一九三七年	三九、七七九	二三、五八七	一三、八七〇	二、〇三六
一九三八年	二七、一六〇	一五、二四五	一〇、二七七	二、三三二
一九三九年	二七、六〇九	一六、六二八	九、七一七	一、六二八
				一、二六四

前述したやうに蘭印の錫生産は政府とピリトン社で完全に獨占してゐる。而も政府はバンカを獨占し、G・M・B社の株式の過半数を所有し、經營委員會委員の過半数を制して、ピリトン社をも支配してゐる。何のことはない蘭印の錫は殆んど官業の一手手前まで來てゐる。それにも拘らず和蘭政府は之に満足せず、更にバンカ官業とG・M・B社を合併せしめようと企て、一九三七年に植民大臣は之を議會に諮つたのである。表面の目的は蘭印錫鑛業の地位を強化せんとするものであつたが、この案は通過しなかつた。かゝる企てがなされたといふのも錫生産が莫大な利益を政府に呈供してゐるからである。一九三七年に於て、バンカ錫は約二千六百萬盾の財政収入を擧げた。G・M・Bとシンケツプ兩者の利潤は約一千一百萬盾であつたが、政府は株主としてその八分の五、即ち約七百萬盾を收得する。更にG・M・Bは有限責任會社税として三百萬盾、輸出税其他として一百萬盾、計一千一百萬盾を政府に支拂ふ。だから全部では三千七百萬盾の財政収入を生じてゐる。錫の好況であつた一九二六年の如きはバン

カの純益五千六百萬盾にG・M・Bの株式配當・會社税等の九百五十萬盾を合して六千數百萬盾を政府は收得してゐる。

併しその反面に財源としての錫生産は一つの危険を抱有してゐる。それは収入を最も必要とする不況時に、兎角大減收を招き易いことだ。これは錫生産に限つたことではないので一般に官業収入に共通なものであるが、財政の見地からみて決して感心したことはない。そこで蘭印政府は一九三二年にバンカ利益保有基金なるものを作つた。それによるとバンカの利益中年々一千五百萬盾までは政府へ支拂はれるが、残りは各基金が三千五百萬盾となるまでこの中へ拂込まれる。これで不況時にも一千五百萬盾づゝの經常収入を擧げようといふ仕組である。

この一千五百萬盾なる金額は蘭印財政にどれ程の重要性を有してゐるかといへば、一九三八年の租稅收入は二億八千九百萬盾、この中、所得稅收入が三千三百萬盾、更に一九三七年度でみれば、租稅收入二億八千五百萬盾、中、所得稅收二千八百萬盾となつてゐるから、錫からの収入は全收入の五分強、所得稅收の半分位に當る譯である。政府がかゝる有力な財源を飽くまで確保しようとするのは無理もない。錫生産に關しては和蘭資本のピリトン社さへ、政府の完全な支配下に置かうとする位であるから、況してや外國資本など許容すべくもない。これは錫生産に限らず、鑛産資源一般の開發に於て、蘭印政府は外國資本に對しては閉鎖方針を採つてゐる。元來は自由主義的方針を採つてゐたもので、鑛物の發見者に對しては無制限に鑛業權を與へ、外國資本も大いに歡迎したものであるが、前大戰から急に閉鎖主義に轉向したのである。これには將來の財源確保といふ意味もあつたらうし、亦、外

國資本の投資が結局外國の政治的勢力侵潤の基礎となることを惧れたからでもあらうが、結局、本國資本の投資對象を確保し、投資市場としての蘭印の價値を認識したによるものと思はれる。

第五項 ポーキサイト、其他

(イ) ポーキサイト及アルミニウム

ポーキサイトの採鑛は錫と異り、一九三二年以後のことである。その年に蘭印ポーキサイト開發會社がピリトン會社の子會社として和蘭本國のヘーグに公稱資本金二百萬盾(拂込六十五萬盾)を以て設立された。先づビンタン島で開始したが成績良好で三五年には一六、七〇八噸、三六年には一三三、七三一噸、三七年には一九八、九七〇噸、一九三八年二四五、三五四噸、一九三九年二三〇、六六八噸と文字通り躍進的發展を示してゐる。

ビンタン島の鑛區は同島南部のキヂヤン海峡に面するスンゲイ・コラツクなる小邑であるが、對岸のコヤン島、アングート島にもポーキサイト鑛が発見されてゐる。埋藏量は未だ不明である。

採掘された原鑛は製鍊に必要な石炭と電力に乏しい爲め、原鑛のまま日、蘭、獨等へ輸出されてゐるが、製鍊工場設立の計畫は傳へられてゐる。

又ビンタン島の酸化アルミニウム土からもポーキサイトを抽出し、之からアルミニウムを製鍊する爲めに、前記蘭印ポーキサイト社はアルミニウム會社設立の計畫を有するといふ。

又、バターフセ石油會社もアルミニウム採掘に乗出し、爪哇、ボルネオ兩島に四十三のアルミニウム原鑛試掘許可を政府へ申請したと言はれてゐる。

(ロ) 金・銀・クロム其他

石油・石炭・鐵・錫・ポーキサイト。これだけでも充分なのに、更に、金・銀・白金・マンガン・モリブデン・ニツケル・クロム・タングステン・水銀・アンチモニー・鉛・亜鉛等をも亦産する。これでは「無限の寶庫」と云ひたくなるのも無理ないかも知れない。先づ金銀から始めよう。

蘭印の金は古い。第八世紀の文書に既に記載されてゐる。かう書いてくると、讀者は直ぐに日本を黄金の國として描いたマルコポーロを思ひ出されるであらうが、蘭印も亦マルコポーロによつて黄金の島だと書かれてゐる。よく黄金狂の男であつたと見える。彼を地下に起して現在の日本を見せたいものである。案外、ナヒモフ號の十隻位さがし出すかも知れない。昔話は別として、實際に之が採掘に手をつけたのは東印度會社で、數回に及んで試掘をやつたがいづれも成功せず放棄した。其後、第十九世紀中頃に至つて蘭印にもゴールド・ラッシュの旋風が吹き捲つて、百五十もの産金會社が出来上つたが、いづれも同じ秋の夕暮で、この旋風も永くは續かず、今世紀に入つてレヂヤン・ルボン、シマウ、プリンピン、ザ・マウント、イエークター、ボランモンゴンドー、グスン・マスの七社と政府直營の金山が現在活動してゐる。

別にニューギニアにはニューギニア鑛業會社が英蘭合辦で設立されてゐる。一九三七年に於ける全産金額は一、

七二九・五疋、銀は一五、五九四疋である。

一六六

ニツケルも亦當今注目に値する鑛物である。セレベス島南東のマタノ、トウテイ兩湖附近に産する。オースト・ボルネオ社が主として之が採掘に當つてゐるが、一昨年ピリトン社と政府との間にも、開發契約が結ばれたと傳へられてゐる。同地方に於ける採掘は既に二萬噸に及んでゐるが、未だ海外へ積出されてゐないやうである。問題は品位の低いことである。二・五%乃至三・〇%のものが多く、一〇%以上のものは極めて稀である。従つて眞に經濟的開發を行はんとすれば、採掘した鑛石を蘭印で處理し得る設備を整へねばならぬ。

非金屬鑛物としてはダイヤモンドを先づ第一に擧げねばなるまい。第十八世紀の後半からボルネオ・ダイヤとしてバタヴィアで取引されてゐたものである。ボルネオ・ダイヤの名に示されてゐる通り西部ボルネオ州、南東州に産する。普通正八面體の結晶であるが色澤は白色のものが三割を占め、その他の色ものは値段も安い。但し赤色と青色は産出が稀なる爲め値も高い。大きさは一カラット以下のものが普通で二カラット以上のものは殆んど稀である。ダイヤモンドの採掘は支那人及土人の手で行はれて居り、歐洲人で之に手をつけたものもあるが現在は放棄してゐる。次は硫黄だ。ダイヤから硫黄とは一足飛びも甚だしいが、ダイヤ以外にこれと云つて寶石が出ない。鑛物學的には柘榴石、黄玉と見る可きものがあるけれども色澤が駄目なので寶石として考へられてゐないのである。そこで一足飛びをする譯である。蘭印は火山地帯である爲め硫黄は各所に存在して居り、爪哇のウリラン等では昔から土人が採取してゐる。現在まで判明してゐるものは爪哇で百九萬噸、スマトラで三十數萬噸であるが、未調査

の地域が多い。埋藏量五十萬噸を有する爪哇のカワ・プテイの鑛區はカワ・プテイ硫黄採掘會社の手で採掘されてゐるが、三七年の産額は硫黄九千噸、粉末一千七百噸、硫泥一千五百噸で、之に前記ウリラン山の土人生産の四百七十四噸を加へると、一萬二千七百噸ばかりになつてゐる。蘭印に於ては硫黄は砂糖精製に使はれる外、栽培業の害蟲驅除に多量使用されるので内需が少くない。それに英領印度、南アフリカ方面へも相當輸出される。

第三節 鑛業政策

以上述べた如く、蘭印の鑛物資源は確かに豊富で、その中、錫・石油の如く開發されたものもあれば、亦、鐵の様に埋藏量の大きいことは判明してゐながら、殆んどその儘になつてゐるものもある。本國及外國資本の鑛業に對する投下額も數億盾に止つてゐるが、その地域の廣さと鑛物の豊かさに比べて、これは決して多からざる金額である。加之、新しき鑛物、新しき鑛區の發見の爲めにも、尙、今後多くの費用をかけねばならない。固よりこれは和蘭一國の資本の爲し得る所ではない。殊に戦後、和蘭が獨立を恢復し得るとしても、この方面にまで急速充分に手が廻るとは考へられない。そこで外資誘入の必要があるのであるが、不幸にして現在の蘭印鑛業政策は著るしく閉鎖的である。

元來、和蘭は自由主義の國であり、この方針は對蘭印鑛業政策にも現れて外國資本も大いに受入れられたもので

あるが、前大戦を機として一八〇度の轉回を行ひ、今や外資の投下などは甚だ困難である。蘭領印度鑛業法及蘭領印度鑛業條令に依ると、法に規定する種類の鑛物は、たとへ之が鑛床を發見しても自由に之を採掘し得ないことになつてゐる。而も法に規定された鑛物とは、上述した錫・石油その他のものが全部含まれてゐるだけでなく、殆んど目覺しいものは總て含んでゐる。即ち、

(A) 寶石・黒鉛・白金・オスミウム・イリヂニウム・金・銀・水銀・蒼鉛・モリブデン・錫・ウォルフラム・鉛・銅・亜鉛・カドミウム・ニッケル・コバルト・クロム・鐵・マンガン・アンチモニー・砒石・ストロンチウム(純たると不純たるとを問はず)及び同一鑛床にあるがため、上記鑛物と同時に採掘する他の鑛物・硫黄を含有する鑛物・明礬及び硫酸の製造に使用し得べき鑛物・硝石及び、肥料の製造に使用し得べき燐酸・岩鹽及び岩鹽と同一鑛床にあるもの。

(B) 無煙炭及び其の他の石炭・褐炭・石油・土蠟、其他の瀝青物體(固體・液體とも)及び可燃性瓦斯・沃度及び同化合物。

かう並べられてはどうにもならない。この場合AとBとに分けたのは採掘權關係からで、A類鑛物の發見はその鑛物が自然の状態に在り、且つ採掘が技術上可能なる場合に於ては、他に差支へなき限り、當然採掘權が與へられるが、B類の方はさう行かない。このB類に屬する鑛物は政府保留といふことになつてゐて、之が採掘は政府との契約に依り委託採掘として、始めて採掘が出来る。而もその契約は蘭印政府との交渉だけでは濟まず、一々本國議

會の許可を必要とする。

これだけでも相當に厄介なところへ、事業主體に嚴重な制限が設けられ、和蘭人、和蘭又は蘭領印度に永住權を有するもの及び和蘭又は蘭領に於て設立された會社の三者にのみ許される。且つその「會社」もたゞ和蘭又は蘭印で設立されたといふだけではない。重役の數及び資格に制限が設けられ、一口に云へば和蘭人の支配確立が露骨に示されてゐる。尙其他に數多の特殊規定があつて一寸外國人には手が出ない様になつてゐる。

此の如き排他的方針は如何なる理由から生じたものであらうか。その一つは外國資本の導入が投資國の政治力を引入れる結果、各種の紛争を惹起する危険があることである。現在までの處、英・米・日等の資本が入つてゐるが別段さしたる紛争を耳にしないけれども、之が自由活動を認めれば列國が資源を喘ぎ求めてゐるこの際、メキシコの二の舞を演ずる恐れ無しとしない。その二は資本主義の發展に伴ひ、植民地としての蘭印が單に本國製品の市場たる役目を果たすだけでは不充分で、更に投資市場たる役割を擔當せねばならぬ。今日まで蘭印鑛業に投下された本國以外の外資は、既に三億盾と推算されてゐる。許せば外資の輸入は急速に増加すべくそれでは和蘭資本介入の餘地は乏しくなる。この見地からも「鑛物資源の保護」が要求される譯である。第三の而して最も當面現實的な原因は財政收入に絡んだ問題である。錫の場合に述べた如く、鑛業から得る蘭印政府の收入は尠からざるものがある。で今後とも鑛産資源の開發を政府の有力な財源たらしめようと心懸けてゐる。試みに左に錫及石炭に依る財政收入表を掲げて置かう。

(バンカ錫)

年	収入	支出	剰餘	政府へ又は政府よりの支拂	純剰餘
一九三〇年	二九、二八〇	二一、〇三八	八、八〇二	—	—
一九三一年	一九、五一〇	一七、七五一	—	—	—
一九三二年	一〇、一三〇	一一、一〇一	九七一	八一九	一、七九〇
一九三三年	二四、二二四	一四、一三〇	一〇、〇九四	四、二一八	五、八七六
一九三四年	二三、四八九	六、六〇三	一六、八八六	九、四七五	七、四一一
一九三五年	二五、七一四	六、四七四	一九、二四〇	六、〇三一	一三、二〇九
一九三六年	三一、四三〇	八、七六九	二二、六六一	七、六六一	一五、〇〇〇
一九三七年	四〇、二五八	一一、〇三三	二九、二二五	一四、二二五	一五、〇〇〇
一九三八年	二六、五五一	一一、一九二	一五、三五九	三五九	一五、〇〇〇
一九三九年	三二、五八七	一〇、一五四	二二、四三三	七、四三三	一五、〇〇〇
	収入	支出	剰餘	政府へ又は政府よりの支拂	純剰餘
一九三〇年	一五、二八四	一四、九〇〇	三八四	—	—
一九三一年	一〇、九〇一	一一、三〇〇	(-) 三九九	—	—
一九三二年	五、七三〇	六、五一一	(-) 七八一	—	—
一九三三年	五、六三五	五、八四二	(-) 二〇七	二、八六〇	(-) 三、〇六七

(石炭)

一九三四年	五、三三三	五、三六二	(-) 九	二、六一〇	(-) 二、六一九
一九三五年	五、〇〇二	五、〇〇二	(-) 一	二、二九五	(-) 二、二九五
一九三六年	五、六三六	五、三〇六	三三〇	二、三五一	(-) 二、〇二一
一九三七年	七、四一一	六、一四七	一、二六七	一、六七三	(-) 四〇六
一九三八年	一〇、二五七	七、八八八	二、三七四	一、四四八	九二六
一九三九年	一一、七三三	八、八三六	二、八九七	一、七六一	一、一三六

(單位：千盾)

斯様な譯で鑛業に對しては蘭印及和蘭政府は閉鎖主義の方針を採つてゐるが、既に許して了つた外資を驅逐せんとする行動には出てゐない。少くとも目立つ程には行はれてゐない。然るに現在までの鑛業外資と云へば英國を第一とし米國を第二とし、その大部分は石油に集中されてゐる。英米資本のかゝる存在は、將來の日本・蘭印關係に於て考慮すべき多くの問題を包含するものと云はねばならぬ。

第六章 産業革命は進む

第一節 工業の動向と問題

農業や鑛業に比べて、製造工業が非常に立遅れてゐる事は更めて説くまでもない。何故かといふ事はいろいろに説明され得るだらうが、往々行はれてゐる様に、この土地の地理的條件や住民の性質などいふ自然的事情にのみ之が理由を求めることには賛同し難い。それ等も無關係ではあるまいが、何と云つても「植民地性」が根本の原因であると思ふ。この場合、植民地性とは第一に収取が強烈で土着人が生活改善を行ふ餘力に乏しい事、第二に本國が非工業化の政策を採つた事である。収取の激しさは、細かい統計など示さないでも、あの自然に恵まれた土地であるに拘らず、殆んど全部の土人が貧しい生活をしてゐる一事で解る。壯美を誇る總督官邸や豪華な製糖業者の生活など、土人の青黒い血色とを見較べる時、一頁の經濟書を読んだ事のない者でも、収取の激しさをしみ／＼感ぜざ